
東方一般人

いっぱんじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方一般人

【Nコード】

N3648S

【作者名】

いっぱんじん

【あらすじ】

青年が東方Projectの昔の時代に飛ばされ（理由は不明）生きていく話。能力はチート気味、だけどそれ以外は一般人となんら代わりの無い青年が果たして生きていけるのだろうか？それは読者にも作者にも分からない・・・。

プロローグ（前書き）

初めまして、いっばんじんといいます。初心者ですが一生懸命書きますのでよろしく願いします。

ブローグ

やあ皆！初めまして。俺は杉本公平というものだ。

突然なんだが今俺の状況はどうなってると思う？学校に通学中？はたまた食事中？いや、就寝間際の可能性もあるな。

ノンノン。正解はなあ・・・

「キシヤアアアアアアッア！！！」

「うわあああああつあああ！？く、食われるー！！？」

化物に追いかけているが正解でした。

いやいやいや！？冗談じゃねーよ！！なんで俺が追いかけれなくちゃならねーんだよ！！可笑しいだろーがよぉ！！

はぁ、何でこんなことになったんだろうか？俺は普通に寝たはずだぞ？なのに起きたら周りは見知らぬ森で、しかも見た目が蟻の化物に追いかけられんといかんだ。蟻といっても俺の身長の倍くらいはあるデカさだ。

つておうわぁ！？危なっ！？顎が掠りやがった！このパジャマ地味に高かったのに！！許せん！！といっても俺には逃げることしか出来ないわけであ・・・。ただどさ、逃げるのはいいけどさっきから全力疾走なんだよね。つまり・・・

「勘弁してくれー！！！」

あ、足が限界に近いッス。まだ体力はあるんだが如何せん足がモた

ん。
チクショー！六足とか汚いぞ！俺にも分ける！！・・・つて今はふざけてる場合じゃねえ。何とかこの窮地を脱する作戦を練らねば！

？戦う

無理無理無理、絶対無理。人間相手ならともかく、巨大蟻相手じゃ力も耐久力も向こうの方が上。速さも向こうの方が地味に速い。此方が勝っているのは知能のみ。．．．あれ？蟻って昆虫の中では頭いいほうじゃなかったかな？．．．気のせいだな、うん。
まあ戦う案は却下の方で。

？誰かに助けを求める

恐らくだがこの周りに人はいない。もしくは逃げているかのどっちかだ。なぜなら逃げている間に人を見なかったし、こんなに派手に逃走劇をしているのにノンビリしてる馬鹿はいないだろ。それに、助けに来てくれても、その人諸共心中なんて嫌だよ。ロリッ娘なら本望だが。

で、この案も却下。

？逃げ続ける

恐らくこれが今ではベストなんだろうけど．．．。ハッキリ言おう。

無理

無理ゲーにもホドがある。体力が確実にもたん。つまり、このまま逃げ続けると遅かれ早かれ食い殺されるだろう。．．．嫌あああああああああ！まだ俺は生きていたい！生きて．．．ロリッ娘と結婚するんだ！死亡フラグ？関係ねえ！

つてことでこの案を維持しつつ次の作戦。

？土壇場で俺の潜在能力が覚醒し、能力を駆使して蟻を倒す

．．．なんていう厨二病。恐らくだが一番ありえない且上記に比べると希望がある作戦。え？なんで希望があるかって？起きたら見知らぬ森で巨大蟻に襲われてるというありえないことが起こっているのなら、覚醒して能力使える様になるっていう事もありえるだろ？で、さつきから手に力を込めたりしてるけど何も起きん。

『原子を操る程度の能力』

『寿命と若さを奪う程度の能力』

——と。・・・程度？このフレーズには聞き覚えがある。ああ、俺はいつの間にか幻想入りしたそうだな。でもここが幻想郷なら博霊の巫女なり、白黒魔法使いなり来て蟻さんを撃退してくれてもいいんだが・・・。それともここは幻想郷ではないのか？・・・ダメだ。考えても纏らん。この蟻さんを倒してから考えよう。

さて、能力の名前からして向きと原子を操ることと寿命と若さを奪うことが出来ると思うんだが。三つもつとか反則じゃないか。だが今はその反則に感謝だ。なぜなら能力を使って蟻さんを倒せるからなあ！！。さて何が出来るのだろうか？

向き・・・向き・・・ベクトル・・・ベクトル変換！？まさか一方通行の能力なのか！？つまり反射や運動ベクトルとか操れるのか？く・・・ククククク・・・俺、勝ち組、決定！

「くらえやこの昆虫がア！！」

「！？」

突然俺が反撃してきたのにビビったのか、顎を振り回してきた。だが甘い！俺には反射という名の無敵防御がドガッ！ドン！！・・・はあ？

「ガアッ！？」

顎が当たり木にぶつかったようだ。つーか反射できないんかよ！期待して損したぞ！！それに運動ベクトルとかも操れん。まったく、泣きたくなってくる。これで一方通行モドキになれると思ったのによあ。あっ、口調だけはちょっと真似てみようかな。こーゆうのは気分が大事だからな。

その森では、一週間男の叫び声が耐えなかったそう。迷惑極まりない話である。

プロローグ（後書き）

一応この世界は東方Projectの世界観ではありますが、似て非なるもの的な感じですので、このキャラの口調が可笑しい、こんなキャラいない、原作より強い、弱い等が出てくる可能性が大です。そこら辺はご了承してくださいさるとありがたいです。

第一話（前書き）

会話が全然ない・・・。

第一話

あれから十年くらい経った。え？時間経過するの早いって？いやー、あれから能力研究と戦闘研究、人を探していたんだよね。で、分かった結果を報告しよう。

？今は何時代なのか

恐らくだが飛鳥時代だと思う。聖徳太子なる人物や冠位十二階や十七条憲法、一番決定的なのは大化の改新かな。え？何で大化の改新が起きたのを知ってるって？噂で聞いたんだよ。蘇我入鹿がどうのこうので殺されたってな。それが今から八年前だったから・・・今は653年くらいかな？自信ないけど。

？能力について

まず一つ目の『向きを操る程度の能力』だ。

これは一方通行みたいな反射や運動ベクトルなどの操作は出来ない。だけど血液の向きを逆にしたり、風の向きを操れることはできた。

あと応用で向上心なども操ることが出来た。中々な能力だ。でも防御に関してはいまいちな能力だ。妖怪相手に無謀にも「反射が出来ないなら、反らすことは可能じゃないか？」と思い実験してみた。

結果は・・・はい、見事に直撃をくれました。この能力は本当に『向き』だけにしか関与しないようだ。反射も向きを逆にするだけだろ？って思うのだが、恐らくは脳が『相手の攻撃の向きを逆にする』じゃなく『相手の攻撃を反射する』って無意識に処理しているからだと思う。反らすも同じ原理だな。

ベクトル操作はただ単に俺の能力では操れないってだけだろうなあ・・・。

「ベクトル変換したかったんだけどなあ」

「!?」って叫んじゃったよ。で、襲ってきたから戦ったんだよね。逃げる?どう考えても逃げれません^^。結果的には勝ちました。奇跡が起きたんだよ。最初は俺がボコボコにされていたんだが、鬼が油断してたのか分からんけどこけたんだよね。その拍子に腕に傷を負ったんだ。俺はそれを見逃さなかった。素早く鬼のところまで走り、傷に指を当てた。そして確実に殺すために、血液を逆流させたんだよ。その瞬間風船みたいに弾けたんだよね……。グロすぎて吐きまくったが。

閑話休題

まあ、人を探したいわけだよ!出来れば集落をね。後、体も鍛えなといけない。能力もまだ他に使えることが無いか探す必要がある。やることがいっぱいだ。でも生きていくためには必要なことなんだ!幸い、向上心を上げることが出来るから挫けることはないだろ。

「さア、頑張ッて生き残ッて、ロリッ娘と結婚するぞオーーーーーー
ー!!!」

森の中で変態宣言をする主人公であつたとき。

第二話（前書き）

眠いです・・・。

よう！杉本公平だぜ！あれから何年経ったか分からんが（30年くらいで数えるのを止めた）、今は恐らく奈良時代！だって都に陰陽師がいっぱいいるもん。え？人に会えたのかつて？勿論！どうやら俺がいたところは現代という四国らへんだったらしい。人が余りいなかったのも頷けるってモンだ。で、今は奈良県にいる。そう！平城京、都だよ！こんなに人がいっぱいいるのを嬉しく思ったことはなかったね。人間バンザイ！賑やかバンザイ！！ロリッ娘バンザイ！！！！！！

で、人に話を聞いてみたところ、なんでも養老律令なるものが発令され、陰陽寮を設置するのが当たり前になったとかどうとか。でも興味ないんで俺には関係ないことさ。え？何で関係ないって？・・・俺霊力無いもん。ああ、そうだよ！俺には霊力が無いんだよ！！これに気づいた時は絶望したね。俺陰陽師になれないんだ・・・ってね。

こうなりや魔法使いにでもなるか？と思ったけど魔力すらない。妖力や神力が無いのはわかる。でもさあ、霊力も魔力もないとか、俺に気力だけでいけというのか神は。しかも気力だってそこまで多くないし。

15

身体能力が違いすぎるから結局は能力を使う羽目になった。

「はア、俺はやっぱり一般人なんだなア……。泣きたくなッてくるぜ」

「あんちゃん何か言ったか？」

「なんにも言ッてないぜ親父さん」

「そうか。んじゃこの酒を配達してくれ」

「また俺が配達するんかよ。偶には親父さんも配達してくれよ」

「嫌だね。あんちゃんという使える駒がいるのに、何で俺が配達しなきゃなんねーんだよ」

「この駄目おっさんが……。！」

怠け者にも程があるだろ。酒だつて親父さんが作ってるんだが、俺が助言と能力で調整しないと飲めたモンじゃなかったからな。親父さんはそんな俺にこういつてきた。

「あんちゃんよ。俺の店で働きな！」

「はあ？」

つてよ。まあ行くところもないから働いてるんだけどね。一年働いたところで俺が割と体力あるつて知ったらほとんどの配達を任されてしまったけど……。まあ給料ももらえるし、三食宿つきという破格の物件だからいいんだけどね。つーかこの時代に酒つてあったのだろうか……。まあいいか。

「まあそついうな。ほら、これが配達先だ」

「えエと……。あア？おっさん、ここッてまさか」

「そうだ。今話題になってるあのかぐや姫が住んでいる屋敷だ」

「……。はあアアアああああアアッア！？」

ちよつ、このおっさんは何がしたいんだ！なんで俺がかぐや姫の屋敷に行かなきゃいけないーんだよ！

ん？ああ、言つてなかったな。実は今かぐや姫がこの都にいるんだよ。何でいるのかは俺も知らん。で、各地から貴族や俺みたいな庶民も求婚しに屋敷へ赴いてんだとさ。その屋敷は毎日毎日行列が出来るほどだったらしい。らしいというのは、有名な5人の貴族を振つてからは行列が出来なくなったからだ。

それほどの人気だ。さぞかし美人なんだろうな。でも俺からしてみたら興味はあるけどーでもいいことで。ほら、原作の東方Projectのかぐや姫ってロリかどうかわかんねーじゃん？ロリだと思つて会いに行ったらロリじゃありませんでしたって最悪じゃん。だから会いたくないわけで。会えるとも限らんが。

「いやいやいや、行きたくねエよ！」

「折角注文を貰ったんだ。断るわけにもいかんだろ？それにこれは仕事だ。好き嫌い言つてると食えなくなるぞ」

「グッ・・・！」

それを言われたら行くしかないじゃないか。

「はア、分かりましたよ。行ッてきますよ」

「それでいい。ほら、これが注文のお酒だ」

「・・・多いな」

「大方貴族どもに飲ませるんだろ」

「かもな。さて、配達行つてくるわ」

「おう、行つてきな！」

さて屋敷に向かいますかな。

青年移動中・・・

行列が出来てたせいで道に迷わずにこれたぜ。つーか屋敷でかくね？普通に目立ってる。っと、酒を届けなくちゃな。親父さんが言うにはここら辺に使用人がいるとか何とか・・・。お？あれかな？

「すみません」

「はい？なんですか？」

「玄屋ですけど、お酒を届けにきたんですが・・・あつてますか？」

「ああ、武雄さんのところの。はい、確かにお酒を注文しました。では案内しますのでどうぞこちらへ」

よかった。合っていたようだ。ちなみに玄屋というのは店の名前で、武雄っていうのは親父さんの名前だ。苗字はないらしい。道案内をされていたら調理部屋に通された。

「ここで待っていてください。翁様を連れてきますので」
「分かりました」

ふう、ここに通される間に陰陽師から睨み付けられた。何でだろう？俺はただ単に酒を配達しにきただけなのに。まさか、俺が能力持っていることに気づいたのか？いや、それはないだろう。あつてほしくない。ここで討伐的なことをされて返り討ちにしたら二度と都にくることはないだろう。

と、俺が考え事をしていると隣の部屋がガタガタうるさい。何だ？たしか隣の部屋って食料貯蔵庫だっけか？もしかして食料泥棒か？・・・ありえるな。念の為風の槍をツク。よし、1、2、3、のタイミングで行くぞ！

1・・・2・・・3！

「覺悟しろやア泥棒がアア！！」

泥棒が此方を振り向く。此方を向いたのが貴様の敗因だ！

「えっ！？ちよつと何なのよ！？」

「この声は女性か？しかし俺は女性に対しても容赦しないこと有名だ。ロリッ娘なら許して・・・って・・・エエエエエエエエエエエエエエエエエツエエエツエ！」

衝撃の事実！俺が槍を突きつけている相手・・・それは蓬萊山輝代だった！！

ああ……俺の人生オワタ。まだ俺は生きたいのに……。

「ねえ」

チクショー！何でこんなことになった？何が原因だ？酒か？酒が原因なのか？

「ちよつと」

クソッ！こんなことなら都にくるんじゃないかった！人とのコミュニケーションに飢えていたからって軽率な行動だった！もう少し用心しとけばよかった！！

「私の話を……」

俺はまだ結婚もしてないんだぞ？ロリとも仲良くしたことないんだぞ？まともに話したこともないんだぞ？なのにここで人生がGam

e O v e rなんて嫌だよー！！

「聞きなさーい！！」

「又ハッ！？」

グウ！？こいつ！俺に腹パンをくらわせてきやがった！とんだ凶暴な女だな！！ロリに殴られるならともかく、ロリじゃない奴に殴られても嬉しくねえ！！

「テメエ・・・何しやがんだア！」

「それはこつちの台詞よ！急に襲ってきて、槍を突きつけて身動きできなくして・・・何？私を攫いにきたの？」

「アホか。俺はただ単に酒を運んできただけだ」

「アホって何よ！それに酒を運んできたのなら私を襲う必要ないじゃない！」

「それはあれだ。食糧庫に変な音がしてれば泥棒だと思うだろ」

「私の家で私が何しようがいいじゃない」

「なら堂々と食いやがれ」

「そんなはしたないマネは出来ないわ！」

「コソコソ食ッてる方がはしたねエだろ！」

「私は女性よ？大勢の前で堂々と食事してる方がはしたないわ！！」

このアマ・・・どーいう教育されているんだよ！って、ああそうか。猫被ってるのか。これだから女は怖いんだ。やっぱりロリだよロリ！ロリが一番だ！！

「はア・・・まあいい。あんたと話してると疲れる」

「ちよつと待ちなさいよ！」

「断る」

調理室に戻る。と同時に襖が襖が開かれた。

ソコには先ほどの従者と爺さんがいた。ああ、この人が竹取の翁か。

「おお、これはこれは玄屋さん。お酒を届けに来てくれてありがとうございます」

「いえいえ、これもお仕事なので」

「ちよつと！待ちなさいよ！！って、あ・・・」

空気を読まずに輝代が追いかけてきた。おいおい、これで猫被つてるのがバレたんじゃないか？まあ猫被つてるのが悪いから関与しないが。

「これ輝代！昼間は出ては駄目かぐやだと言ったじゃろ？」

「ご、ごめんなさいお爺ちゃん・・・」

「すみません玄屋さん。輝代のことはどうか内密にお願いしたいのですが・・・」

「ん？別に構いませんよ。それに俺はかぐや姫の事はどうでも良かったんで」

「どうでもいいって何よ！」

「これ輝代！お客様にそのような言葉を使ったら駄目じゃろ！後で説教じゃー！！」

「うう・・・ごめんなさい」

・・・流石に可愛そうになつてきたからフォローぐらいしてやるかな。言っておくがデレてないからな。原作キャラと仲良くなつておくのも悪くないだろうと考えただけだからな？ホントだからな！

「まアまア、翁さん。私は言葉遣いとか気にしませんから」

「ですがお客様にあのような言葉遣いは・・・」

「確かにそうですが、私は貴族じゃないですし、ソコまで固くなら

れるとむず痒いんですよ」

「うむむ、お客様そういうのであれば、説教はなしにしてあげましよう」

「あ、ありがとうございます・・・」

ふう、慣れないことはするもんじゃねーな。鳥肌が凄いことになってやがる。やはり俺はロリしか駄目らしい。当たり前のことだがな。つか、一つ疑問に思うことがあるんだ。何故翁をここにきた？ハッキリ言つて翁がくる必要ないよね？・・・何か嫌な予感がする。早く帰るとするか。

「では、酒はここに置いておきましたので、後はそちらが全部やってくださいね」

「ちよつとお待ちくだされ」

翁が声をかけてきた。背筋がゾクゾクしてきた。

「・・・なんでしょう」

「実は頼みたいことがあるのじゃが」

「酒のことですか？」

「いえいえ、輝代のことです」

「輝代？」

「私のことよ」

「それは知ってる。俺が聞きたいのは頼み事の内容だ」

やべエよ！この先の展開が簡単に予想されるから怖い！！

「頼みたい内容はじゃな・・・輝代を月人から守ってやってくだされ！お願いじゃー！！」

「お爺ちゃん・・・」

キタアアアツアアアアーーーーー！！やっぱり予想してたこととが的中したよ！何で俺が輝代を月人から守らないといけないんだ！！そして爺さん！土下座止めろ！！土下座されるほどの人間でもねーんだよ俺は。まあ、取りあえず説明を聞こう説明を。

「・・・説明を頼む」

「分かりました」

翁説明中・・・

なるほど。輝代が月に帰ることを翁に言ったけど、翁は輝代が月に帰りたくないと言破り、話を聞いたら、涙を流して帰りたくないと言ったそう。そこで帝や陰陽師たちに頼んで月人を追い返そうということらしい。でも輝代の話だと月の兵器の前ではいかなる陰陽師や兵士でも石ころ同然らしい。だからもう半ば諦めているそう。

「で、何で陰陽師たちすら敵わないといわれているのに俺に頼むんだ？」

「それは武雄さんが貴方様を推薦したからじゃ」

「親父さんが？」

「はい、武雄さんが『うちで働いてる公平ならどうだ？あいつなら妖怪だろうが月人だろうが追い返せるだろうよ。根拠？勘だ！』

と言っていました」

「・・・おっさんめ」

ああ、推薦だから陰陽師が睨みつけてきたんだな。しょーもねえ。やっぱりあのおっさんに能力のこと話したのは間違いだっただか？まあ今後悔しても後の祭りだしなあ。はあ、何で俺がこんな面倒なこ

としなきゃならないといけないんだよ。でもなあ、いくらロリじゃないとしても少女には変わらない。そんな少女が悲しい顔してたら助けたくなっちゃうだろ。

はあ、俺もまだまだ甘ちゃんだねえ。」

「おい輝代！」

「何よ・・・」

「お前は月に帰りたくないんだよね？」

「・・・ええ」

「それは本心か？」

「本心よ！本心だけど・・・誰も月の兵器には勝てないのよー！」

「おいおい、本当に勝てないと思ッてんのか？」

『えっ？』

翁、従者、輝代が呆然とする。当たり前か。勝てない勝てないといわれている月の兵器に勝てると余裕で言っているのだから。

「親父さんが何故俺を推薦したと思ってる？勝てる要素があつたらだろ？」

「でも武雄さんは勘だと言っておったぞ？」

「親父さんは勘なんて信じない。根拠がないと断言しない。それに俺は自分で言うのもなんだが弱くねーぜ？」

「つまり・・・」

「俺が月人を追い返そうじゃねエか！」

俺は力強く言った。もうこれで後戻りはできない。後はやることをやるだけだ。

「で、月人はいつくるんだ？」

「明日です」

「早ッ!？」

明日とか・・・。まあいいさ。進化した俺の強さを見せてやるよ！
そして生き延びてロリッ娘を探すんだ！！

第二話（後書き）

次回主人公がチート化します。

第三話（前書き）

遅れてすみませんでした！

第三話

やあ、杉本公平だよ！今は17時くらいかな？

あれから技の練習をしたんだ。だってほら、俺は能力は強いけど使える技が少なすぎるからね。一応未完成の技もあるけど、大体完成できたよ！そのせいで一睡も出来なかったがな。

でも、月の民に勝つためにはここまでしないと駄目だろうなあ。肉弾戦をするにしても、月の民は絶対浮いてるだろうし、近づく前にブツ殺されると思うんだ。クソッ！月の兵器め・・・卑怯なり！こっちも卑怯だけだな！

さて、ここで語っても時間は過ぎるばかりだ。早く屋敷に向かわないと遅刻する！いざレッツゴォー！！

青年移動中・・・

さて、着いたのはいいんだが・・・何故空が光ってる？え？もうくるの？ええ？？輝代から聞いた話だと夜だった気が・・・。どーいうことだつてばよ！？

「あつ！公平、遅いじゃない！！」

「遅いッて、いやいやいや！？俺は夜に来るッて言うから今の時間に来ただけだぞ！？」

「もう夜じゃない！」

「なん・・・だと・・・？」

ば、馬鹿な！？今の時間が夜だと！？夕方じゃないのか？ハッ！？
そういえば親父さんも・・・

「夕方ってなんだ？」

って言ってたな。俺はそれをボケたと思って笑っていたが、ボケてなかっただど！？クツ、親父さん、お許しください！

「すまなんだ輝代。俺が勘違いしてただけだツた」

「勘違いで済まされる問題じゃないけど・・・まあいいわ。それよりも早く来て！」

「おうけい！」

輝代についていくと其処には翁、従者、兵士の方々、帝がいた。つて帝！？ちよつ、こんな所に来るなよ！死んだらどうすんだよ！パニックが起きて都が死ぬぞ！！

「おお、公平殿！よくぞ来てくれました」

「翁さん、挨拶はいいんだが、今はその時間すら惜しい」

「誰かさんが遅れたせいでね」

「ウゲツ！？」

この女、性格悪いっすわ。これだから少女じゃない女は汚れてるんだ。美少女だからって許されぬと思うなよ？ああ、少女ほしい幼女って、変なこと考えてたら宇宙船が降りてきやがった。おいおい、時代背景ブチ壊しすぎだろ。周りの兵士は「天の船だ・・・」「勝てるわけない・・・」とか言ってるし。まあこんなん見せ付けられたら意力も落ちるだろ。って、ん？中から人が出てきたぞ？つてこっちに向かって来てるぞ。ってオイ！輝代も向かってっただぞ！？何がどうなっただよ！！

「姫様！」

「永琳！」

ヒシッ！つと二人は抱き合った。感動の再開というやつか……。
「イエダナー。って永琳？えーと・・・八意永琳？ってエエエエエ
エエエエエエエツエ！？こんなところで八意永琳が出てくるの
かよ！？全然分からなかったから一瞬風槍出そうとしたぞ。危ない
危ない。」

「お怪我はありませんか姫様」

「ええ大丈夫よ。皆優しくしてくれたから」

「そうですか」

「八意様、カグヤ様。時間がありませんから、船にお乗りになつて
ください」

「・・・よ」

「カグヤ様？」

「嫌よ！」

輝代が何か叫んだみたいだ。そして男を吹き飛ばした。でも平気な
顔で立ち上がった。丈夫な防具をつけてるんだろうなあ。そしてこ
れで輝代は反逆者かな。ところで反逆者って響きかっこいいよね。
え？どうでもいい？・・・はい。

「私は月なんかに戻りたくない！あんな監獄のような樂園にいたつ
て全然楽しくない！あそこに戻るくらいなら穢れた方がマシだわ！
！」

「・・・そうですか。それがカグヤ様の意思なんですね？」

「ええ」

「なら・・・皆！罪人カグヤを捕えよ！！」

その言葉で月の兵士達が動き出した。と同時に先ほどの男の首が飛
んだ。

「姫様ならそう言うと思いました。だからこの八意永琳、姫様を守ります!!」

「永琳・・・」

「感動の場面のとこ悪いが早くこっちに来い!そこだと守るうにも守れねエよ!」

俺は飛べないから空中にいられると守れなくなる。まったく、そこから辺考慮してくれ。そして大声出したから敵にも気づかれたし。って、永琳凄くね?こちらに向かいながら月兵を迎撃してやがる・・・俺がいなくても勝てるんじゃないだろうか。っておお、俺の横に着地しないでくれ。風圧で倒れそうになったじゃないか。

「姫様、この方は?」

「ただの一般人よ」

「ちゃんと紹介しろよ。一般人だけどさア」

「ッ!? 姫様!」

永琳が輝代を押し倒す。え?そういう気があるの?ん?空がやけに明るい・・・ってビーム撃ってきやがった!?あわわわわ!?お、俺も地面に伏せよう!!

ドガガガガガガッ!!

お、おお!!?揺れる揺れる!

「姫様、大丈夫ですか!?」

「え、ええ。私は大丈夫よ。それより皆は!?」

俺も起き上がり見渡すと・・・

「これは酷いな・・・」

俺らがいる場所以外はほとんどが死体だらけ。生きている奴もいるが腕が無かったり、呻き声をあげてる奴ばかり。うえ・・・吐き気が込み上げてきた。けどここは我慢だ。

「ふん！地上の穢れた奴らにはお似合いだな。」

「だな。大体数だけで我々に勝てると思っていただけで穢れてる」

「さて、罪人八意永琳、罪人力グヤを捕まえろ。抵抗するなら殺せ」

変な拘束具みたいなモノを取り出した。ああ、あれが羽衣か。全然羽衣に見えない。ってそんなことよりも輝代達を助けないと。ここは先手必勝だ！

俺は風槍を五本創り、最前列にいる月兵に投げた。が、簡単に避けられた。

「そんな穢れた攻撃当たるかよ。これだからッ！？」

避けたはずの風槍が月兵の心臓を貫いていた。他の月兵にも突き刺さっていた。

何故避けたはずの槍が刺さったのか。それは俺の能力、『向きを操る程度の能力』のおかげだ。

槍を創る過程で投げてから何秒経ったらどのように向きを変えらという条件を付加したのだ。今の例で言うと、投げてから5秒経ったら真後ろに向きを変えらと付加したんだ。これが徹夜で頑張って完成させた技だ。ホント苦労したぜ。

まあそんな事はどうでもいいんだよ。問題は初めて人を殺したということだ。罪悪感と込み上げてくる吐き気がすごい・・・。涙も出てきそうだ。でも我慢する。我慢しなければ輝代達に恥ずかしい所を見せてしまう。だが、その我慢が裏目に出た。何故なら・・・俺のわき腹を何かが貫通したからだ。何か・・・？それは光線みたいだった。だがそんなのはいい。問題なのは

「うがああがうががああああ！？」
「公平！？」

物凄い痛い。蟻さんの時よりも痛い。熱い。わき腹を見ると火傷したようなかんじになってる。ああ、だから痛いよね。

「よくも穢れた分際で我々の仲間を殺したな！」
「即効殺してやる！！」
「あいつはいい奴だったのに・・・！！」

なんだこいつら。テメエらは俺らの仲間を殺したがや。しかも大量に。なのに殺されたらキレるとか意味分かん。本当に意味分からん。イミワカラン・・・。

「ふざけんなよテメエら」
「穢れた分際で喋るな！」

俺の脚に衝撃が走る。そのせいで倒れてしまった。だが俺は喋り続ける。

「殺したならガッツ・・・殺されてもゼエゼエ・・・文句は言えねエだろオがよオー！！」

「公平、もう喋らないで！これ以上喋ったら本当に死ぬわよー！」
「ハッ！これが終わッたら・・・八意さんに治してもらっさ。・・・出来ますよね？」

「・・・貴方が死なない限り治してみせます」

よし、これで生き残れば助かるぞ。ククク、今喋っている最中に右手に薄い薄い丸鋸みたいな風の球を創っておいたのだ。未完成な技

だが、仕方ない。本番だと使えるって可能性もあるだろうし。

「ほらよ月の民。俺からの・・・プレゼントだ」

風鋸を月兵に向かって投げる勿論避けられるが・・・甘い！！

「自然を増やせ」

カット！で有名な吸血鬼の技をパク・・・オマージュした技をくらえ！

「分解を逆しまに！」

避けられた風鋸が大きくなって戻ってくる。月兵達も戻ってくると分かっていたが大きくなって戻ってくるとは分からなかったらしい。

「破壊を逆しまに！」

更に通過した風鋸が大きくなり他の月兵達を切り刻んでいく。おおグロイグロイ。

「絶滅を逆しまに！」

風鋸が月兵達の下真ん中に留まる。さて、止めだ！

「増やせ増やせ増やせ増やせフヤセエエツエ！！！」

いやあ、この技さ、オマージュしたせいなのかこの言葉言わないと発動しないわけなんだよ。え？どこが未完成だって？いや、ホント練習してる時は全然出来なかったんですよ。いや一回出来たけど、

そのとき制御できなくて巻き込まれそうになったんだよね。つまり、今も制御できないから大変危険なんだよ！

ドンドンと風鋸は大きくなっていく。その大きさは月兵の宇宙船すら飲み込み、月兵達も飲み込んでいく。勿論、死体もな。おかげで血が飛び散ってる。ウエエエ！マジで吐きそう……。あつ、もう駄目だ、吐く。

「オエエエエエエエエツエウ……」

吐くと動じに意識が遠くなる。ああ、力使いすぎたのか。次目覚める時は布団の中で目覚めたいなあ……。

最後に見たモノは、地面に血と下呂が混じった液体だった。

第三話（後書き）

仕事が忙しくて遅れてしまいました、すみません！

次は何時投稿できるか分かりませんが、早めに投稿できるよう頑張ります。

主人公の最後の技は、滅多に使えません。今回は崖っぷちだったので偶々使えただけです。練習の時はマグレです。

主人公の能力は分解も反射も使えるのですが、主人公の演算能力が普通なのでただ出来ないだけです。

主人公は能力を使わなかったら、中堅妖怪の下位をギリギリ倒せません。ここが一般人の限界でしょうと私は思っています。

第四話（前書き）

遅れてすみませんでした！

第四話

なんだろうか、物凄い虚脱感がある。おつといきなり失礼。いやあ、昨日力を使いすぎたのかな？全然身体が動かない。この感覚だと布団に寝かされてるみたいだが・・・。

布団に寝かされてるって事は俺は生きてるって事だよな？昨日は無茶すぎたからな。最後の技だつて火事場のクソ力って奴だったんだろう。おかげで脳がこれ以上無理しないように気絶させたんだろ・・・多分。何はともあれ死んだら元も子もないかったから嬉しいぜ。よく耐えた俺の体！伊達に100年くらい生きてねえぜ！！・・・だけど風鋸が俺の限界の技だ。アレやると吐き気とか込み上げるんだよなあ。・・・あつ、俺血と下呂が混ざったパラダイスに顔から突っ込んだんだっけ？・・・イヤああああああああああ！？ななな何で俺があんな目にあわなきゃいけないんだ！クソッ！思い出しただけで吐き気が。

「チツ、mんkすありぜ！」

は？なんだ今の言葉は？俺はただ単に胸糞悪いぜって言おうとしただけなのに。

「ちょッ！？mいgl！！？」

なんだ！？言葉が喋れない！？何これ何これ！？な、何が一体どうなつてんだ！？Help！Help me！！

ってああ？何か首元についてやがるぞ！後近くからカサカサという音が・・・まさかG！？ちょ、洒落にならんぞ！？言葉も喋れなくなり、更にGらしき音が鳴るとか、身体動かせない俺に対しての虐めか！？

「kうつそhア！はyhイせしぞsnうエくで！！」

俺としてはクソが、速く正常になつてくれといったつもりなんだが如何せん喋れない。何故だ・・・

「なぜだアアアッアーーーーー！！！」

つてええ！？な、何で急に喋れるようになったんだ！？つて、ん？か、身体が動くようになったぞ！ハッ！？Gは！？

横を見てみるとGらしき姿は見えず、その代わり封筒があつた。封筒？と思つて手にとつて見ると、中々重い。何が入っているのかと興味がわき、封筒を開けてみると文字が書かれている紙が何十枚も入っていた。いやいやいや、多すぎるよ！大体この時代の紙は高価なんだぞ！無駄遣いよろしくないあるよ！

「まア、俺には関係ない話だ。どーせ紙なんて買わないし」

封筒の中から紙を取り出すとそこには『杉本公平様へ』と書かれていた。普通封筒に書かないか？という疑問が湧くがどうでもいいかと気にも留めず紙に書かれている紙を見る。

「何々・・・『公平様へ、姫様を助けてくれてありがとうございます。もう会えないことが残念らしい。輝代も寂しがっていたそうだ。興味ないが。だが最後に書かれていた言葉には興味が湧いた。俺が何故喋れなくなったのかについてと、この首についてる変な機械についてだ。」

さて、色々読んでみるとお礼の言葉が大半だつた。もう会えないことが残念らしい。輝代も寂しがっていたそうだ。興味ないが。だが最後に書かれていた言葉には興味が湧いた。俺が何故喋れなくなったのかについてと、この首についてる変な機械についてだ。

「ふむ・・・『束ねている紙に説明が書かれています。最後になりますが、助けていただき本当にありがとうございます。奇跡があったら、もう一度お会いしてお話したいと思っています。それではさようなら・・・八意永琳より―――P・S・絶対生きてもう一度私に会いにきなさい、それが私からの難題よ！蓬萊山輝代』・・・難題とかいらね」

もう一度会いにきなさいとか何様だよ全く。幼女だったら今すぐにも会いに行つてやるのに・・・。幼女じゃない自分の身を呪うがよい！・・・おふざけはここまでにして、早速説明が書かれている紙を見るかな。

青年読書中・・・

「な、なんだって――――――――――

――！！？」

おっと、いきなり叫んですみません。いやでもね？これが叫ばずにはいられないんですよ！なんで叫んだって？まあ待ちなさいな。ちゃんと説明するさ。

まず俺の喋りが可笑しい理由だが、どうも能力の使いすぎで脳が傷ついたんだとさ。それで言語機能が可笑しくなってしまった。そして身体も余り動かせなくなってしまったんだとさ。つまり俺は身体障害者つてわけだ。・・・この身が身体障害を持つのはお年寄りぐらいかなと思っていたのに。

で、このままだと生活はおろか生きることすら難しいので永琳が作った（何故作れた）補助装置というのが首につけられているらしい。この補助装置が最強なんだよ！もうチートもいいところだ。

この装置は起きたと同時に電源が入り、普段通り動けたり喋ったり出来るようになる。能力も普通に使えるらしい。さっき喋れなかったのは、装置を初期稼動する時に自動的に血液を調べDNAを登録したりして起動するのに時間がかかったらしい。なんていうハイテク！流石は天才だな。さて次が凄いんだ。

なんと！一分間だけけど、俺の能力を全開まで引き出すことが可能らしいんだ！永琳が俺を手術した時（気絶してる間に色々弄ったらしい）に、俺の脳の演算パターンをみて（どうやってみたんだよ！）、補助装置に取り付けたいらしい。これ読んだ瞬間に叫んでしまったわけだ。

フッフ、遂に俺が最強になれる日が来たというわけだ！フハハハハハハハ・・・ハ？

「・・・マジかよ」

何か使った後血が全身から吹き出る＋寿命が1000年削れるとか・・・使いたくねえ！！何だよこれ！良いメリットにはそれ相応のデメリットがつくってか？やめてくれえ！しかも全身から血が吹き出るとか死ぬだろ！出血多量で死ぬだろ！！それに奇跡云々言ってたくせに寿命が1000年削れる機能を入れるなよ！俺じゃなかったら詰んでるぞ！！

つて、ハアア！？何だよこの装置！俺には霊力や魔力が無いから、電源のエネルギーは寿命を使うつて・・・永琳さん、貴方はこの私に死ぬと？とんだドSだな！これだから女性は幼女以外は信じれないのだ！！ちなみに一ヶ月で二年分の寿命が減るそうだ。

「クッ、助けてやツたのにこの仕打ちとは・・・世の中は常に理不尽だ・・・」

そう呟いて俺の意識はブラックアウトした。

後日、とある青年は都の英雄になったらしい。

やめて！恥ずかしい！！英雄とか俺の柄に合わないから！！と都のとある酒屋でそう叫んでいたそうだ。

第四話（後書き）

説明会乙的な話です。

主人公が遂にチートに！・・・制限つきだけど。
永琳は原作でもチートだと思います。

第五話

「さアーッて、今日も張り切ッて酒を造るぞ!!」

『オオッーーーーー!!』

さて皆さんおはようございます、杉本公平ですよ。アレから二百年くらい経ちました。え？時間経ちすぎだって？・・・だってこれとって事件なかったもん！ああー、でも驚いたことはいくつかあったな。

まず親父さんが妖怪だったこと。種族は狸。聞いたときは驚いて、尻尾と耳を出してくれたんだが、外見と全然あってなくて吹いたんだ。仕方ないよね、ごついおっさんに狸の丸い耳と尻尾がついてるんだぜ？吹かない方がおかしい。で、退治されるんじゃないかね？って思ってたらどうやら都には周知の事実で、帝には公認されてるとか。親父さん意外と有名人だったのね。

次に驚いたことは、俺の存在についてだ。何故だが英雄扱いになっちゃっている。やっぱり200年前のアノ事件と100年前の事件・・・というよりも国直々の依頼でな何と！あのフラワーマスター風見幽香を退治してこいという達成率0%以下というマイナスをひた走る意味不明な依頼を『達成』してしまったのだ。いや、正確には『人間を見つけても襲わないでほしい』と約束したんだ。正当防衛は仕方ないけどね。ん？ああ、戦ったよ。まあ俺が勝ったさ。補助装置のおかげで勝てたようなもんだけど。

で、なんやかんやあり俺は英雄となったのだ。ちなみに俺が不老って言つのも周知の事実。今の帝さんも俺のことを公認してる。でもさあ、急に依頼とかもってきてほしくない。事前にアポを取れよ。この時代に電話無いけどさ！

で、それから目立ったことがなかった。ああ、鵜が出た事があつ

たなあ。適当に戦ってたら消えてったけど、これは事件じゃないよね。

「公さん、小麦が足りなくなりましたので補給してきます」

「おー、いてら」

「公のだな！新しいつまみが出来たので試食してくださいな！」

「んー、味はいいけどちょっとしつこいな」

「公平さん、酒の濃度はこれくらいでいいですか」

「ゴクツ・・・うん、これくらいでいいよ」

いやあ、弟子達を鍛えるのは大変だ。この店に働き始めてもう20年くらい経つのかなあ。段々と大きくなっているよ。途中引越しもしたけど、全然衰える気配が見えない。他の酒屋もあるけど、コみたにいいお酒は造れないからな。フッフ、それもこれも全部俺のおかげだ！って言うのは嘘で、俺は情報提供と微調節しかしないわけで、ほとんどの基盤を作りあえてるのは親父さんだ。ホント凄いわ。

「おーいコウ！お前にお客様だ」

「はいよ！・・・嫌な予感がする」

親父さんに呼ばれ、客間に移動する。もう俺に客って時点で嫌な予感がビンビンだ。

「お待たせしました・・・ってゲツ！？」

「こらコウ！お客様向かってゲツ！？はないだろ」

「フッフ、お邪魔してるわ」

俺の目の前には女性がいる。長い黒髪をポニーテールにし、ちょっと切れ目だけど容姿がとても整っている。背はおよそ160cm。

そして赤い巫女服を着ている。

彼女の名は博麗^{はくれいれいな}霊菜。何でも代々伝わる博麗家の巫女さんとか。で、注目のポイントは博麗という苗字だ。あの東方Projectの主人公、博麗霊夢の苗字と同じなのだ。つーことはコイツは霊夢の先祖なんだと思う。

で、コイツが来るということは・・・

「また依頼かよ・・・」

「ええそうですよ。公平さんの大好きな依頼です」

「好きじゃねエよ・・・」

何でもコイツは帝の妹と仲がいらしく、帝はコイツを利用して俺に依頼を渡してくるのだ。ハッキリ言って迷惑極まりない！全く、自分の権力振りがざしてんじゃねーぞ。

「俺は邪魔そうなんでそろそろ仕事に戻るぜ。後は若い二人でお話しときな」

「もう武雄さんたら。その様なこと言われたら近い時期、公平さんの苗字が博麗になりますよ？」

「いやいやいやならねーよ！」

「俺はコウがここで働き続けるのなら構わん」

「オイおっさんゴルア！」

俺はおっさんに向かって叫ぶが、無視された。あのおっさんめ・・・畜生！

「では早速・・・」

「オイコラテメエ！何服脱ごうとしてんだ！」

「え？だって武雄さんの許可も貰えましたが、後は交わりあって子を残さないといけないじゃないですか！」

「俺はテメエとは結婚もしないし、交わるつもりもねエー！ってオ
イイ！？何で拒否してんのに更に服を脱ごうとする！？」

何なんだコイツは！痴女か？痴女なのか！？ううう・・・こんな奴
に好きになられても嬉しくねえーーーーー！！何で口リじや
ないんだよ！！

「まあおふざけはここまでにして・・・ほとんど本気ですけど（ボ
ソ」

「聞こえてるぞ」

「コホン、では依頼について説明します。依頼の内容は単純です。
単純ですがその分危険度も高いです」

「単純で危険度が高い？・・・まさか風見幽香と同じくらい強い奴
を退治してこいとか？なーんてあるわ「正解です」け・・・なん・
・だと・・・？」

「今回の依頼は妖怪の山にいる鬼を退治してきてほしいという極単
純で且つ極悪な依頼ですね。全く、帝様にも困ったものですね。私
の旦那様（予定）に危険な仕事をやらして・・・ブツブツ」

俺は霊菜の後半の話は全然聞いていなかった。あまりの依頼の内容
の馬鹿馬鹿しさに啞然としているのだ。鬼？鬼ってあの鬼だよな？・
・無理無理無理！勝てない勝てない！！だって風見レベルの奴が
少なく見積もって4人いるんだよ！？リミッター外せば一人くらい
なら何とかなるが他は無理だ。ああ、俺の人生完全に詰んだな。

「・・・？どうしたんです？瞳の色が抜け落ちていますよ？」

「この世の理不尽について嘆いてるところだ・・・」

「それは大変です！私が慰めてあげますよ！」

そう言っただけで抱きつこうとしてくる霊菜を俺は避けて、準備をするた

め立ち上がる。

「霊菜、鬼がいる場所はどこだ？」

「妖怪の山の頂上付近ですよ」

「なん・・・だと・・・？」

妖怪の山とか危険な妖怪がウロウロしてるって有名な山じゃねーか！クソッ、帝は俺を殺す気か？まあ帝は俺を信頼してくれてるからこんな依頼を出してくるだけだろうが・・・限度がある。この依頼が終わったら抗議に行かないといけないな！

「霊菜！俺になんか道具を貸せ。妖怪の山頂上まで行くのに余計な（寿命という名の）出費は出たくないんでね」

「いいですけど・・・無料では貸せてあげれませんなあ」

「グッ・・・この女！何がほしい？金か？金なのか？！」

「それもほしいですけど、やっぱり一番ほしいのは公平さんとの子どもです！」

「出来るだけ丈夫な道具を売ってくれ」

「うう・・・無視しないでくださいよ。コホン、一応今もっているもので使えそうなものはあるにはあるんですが・・・」

「が？」

「結構高いですよ？」

「いくらだ？」

そんな高くないだろ。

「ざつと・・・こんなもんですね」

「・・・金以外でお願いします」

「もう公平さんたら、しょうがないですね。じゃあ無料でいいです。」

「ほんと「ただし条件があります」・・・なんだ？」

「無事に帰ってきてください。もし破ったのならその時は・・・フフ」

「・・・クツ、それでいいだろう！」

「フフ」(鬼相手に無事に帰ってこれるはずがないです。つまり約束は破られる。フフフ・・・既成事実を作りあげるチャンスです！)

これがその道具です、と渡されたモノはお札が十数枚(投げるだけでいい、追尾機能付)と、短剣四つ(地面に刺し四角形を作り上げるだけで簡単な結界が作れる)、本当に危なくなつた時に使つてほしいモオが入っている袋だ。最後のが怪しすぎる。

「さて、行ツてくるかね」

「行つてらっしゃい！お赤飯炊いとくねー！」

「イミワカラン」

最後の最後まで意味が分からない女だつたな。俺は口りにしか興味が無いっていうのに・・・。

さて、鬼退治と行きますかね！

第五話（後書き）

今回は博麗霊夢の先祖、オリキャラである博麗博霊菜が登場しました。オリジナル設定ですので、後々矛盾などが生じる可能性もあるかもしれませんが、後了承ください。

次回鬼との対決！あっさりですが。

幻想郷縁起 ネタバレあり

自称一般人（ 1 ）

すぎもと
杉本 こうへい
公平

能力 向きを操る程度 of 能力

原子を操る程度 of 能力（ 2 ）
寿命と若さを奪う程度 of 能力

危険度 普通

人間友好度 高

主な活動場所 人里

昔からいる人間。この時点で一般人からかけ離れている。

普段は人里にいるが、玄屋（ 3 ）での仕事で色々な場所にお酒を届けに行くこともある。妖怪を襲うことは殆ど無く、襲ってきたならば即効逃げ出すらしい。何故逃げるのか分らない。

たまに狂っているような発言をするが、本人は狂ってなく、常に冷静だという。ただし女兒を見つけたときは興奮が抑えきれないらしい（ 4 ）。私が話しかけたときも興奮してた。

首には変な装置が着けられている。彼に聞いてみてもはぐらかされる（ 5 ）。ただ生きていくために必要らしい。いつかあの装置の機能を暴こうと思っている。

いつも玄屋と書かれた服を着ており、彼の私服姿を見ることはほとんどない。一度見せてもらったことがあるが、普通だった。

向きを操る程度の能力、原子を操る程度能力、寿命と若さを奪う程度の能力とは文字通りの能力である。

向きを変え、弾幕を様々な方向に向けさせることが出来るらしい。後は向上心などの精神系統にも効果が及ぶ等の応用性は高い。

原子を操り、風や炎を生み出したり、形を固定できたりとこちらも応用性が高い。が、創れる量は限られているらしい（6）。

相手を殺すと残りの寿命と若さを奪うことが出来る。それのおかげで彼は今まで生きてきたのだ。ただしこの能力は不老不死を殺しても発動しないらしい。本人も分かっていないようだ。

本気を出せば誰も勝てないらしい。本当かどうかは定かではない

目撃報告例

・偶に来てお賽銭を入れてくれるいい人ね。私の先祖の夫らしいけど本当かしら？（博麗 霊夢）

彼は地味に金持ちらしいです。八雲様曰く、本当の事だと言っていました。

・いい人なんだが、偶に突拍子のないことをするのは驚くから止めてほしい。（上白沢 慧音）

神様と戦ったと言ったときは私も驚いた。

・彼を式にするのはそれ相応の代償があるわ。あれは本当に・・・。

（八雲 紫）

式にするつもりは毛頭ありません。ところで何故貴女がここにいらるんですか。そして何故震えているんですか。

・空やこいしが彼に懷いて驚きました。ですが、彼は空やこいしの事は眼中にないみたいです。どうでしょうか……。 (古明地さとり)

あの人見知りの空さんやこいしさんが懷くとは珍しいです。相談されても私には頑張ってくださいとしかいえません。

対策

普通に接していればいい。下手に彼を怒らすとどうなるか分からない。本気を出されては諦めるしかないだろう。(7)

(1) 自称なのは、どう考えても一般人ではないから。

(2) 本気を出せば『原子を司る程度の能力』になるらしい。

(本人談)

(3) 昔からある酒屋。私も偶に飲むのだが、他とは比べ物にならないくらいおいしい。

(4) 女兒に巡り合えることが嬉しいらしい。変態である。

(5) 閻魔様に説教されて以来、説明はしなくなったそうだ。どうやら彼の能力に関係あると思われる。

(6) 演算処理が追いついていないらしい。演算処理とは何だろうか。

(7) 八雲様曰く、「鬼や神すら一分で屠れる」らしい。化物にも程がある。が、本気を出すことは滅多にない。

幻想郷縁起

ネタバレあり（後書き）

東方地霊殿が終わった話までです。縁起に乗ってること意外もいっぱいありますが、ピックアップして書きました。

第六話

ここは妖怪の山。多種多様な妖怪がうじゃうじゃいるからその名が付けられたそうだ。名高い陰陽術士でも好き好んでくる者はいないという、危険度がインフレしてる山に俺は来ている。

・・・本当は行きたくなかったよ！でもさあ、帝の依頼だよ？断つたら不敬罪とかでブツ殺されるんだよ！？受けるしかねえよ！！俺は空を見上げた。決して目から汗が出るのを防いでいる訳じゃないんだよ！・・・気晴らしに歌でも歌うか。

「あアるこォー！あーるウこォう！俺はー・・・元氣じゃない・・・」

駄目だ。今の俺のテンションは最強のハイキングソング、散歩を全く寄せ付けないようだ。まあ、今から鬼退治というのにテンションが高くなるわけないよね。高くなる奴は間違いなく戦闘狂だ。ヤベツ、幽香を思い出してしまった！あー、アイツに殴られた痕が痛くなってきた・・・もう二度と戦いたくないなあ。

さて、もうかれこれ3時間くらい登っただろうか。未だに目的地へ到着する気配が見えない。いや、それどころか中間地点まできてないと思う。だって目印の滝の音すら聞こえないんだから。あるえー？道に迷ったか？いやそんなはずはない。ちゃんと地図通りに来たはずだ。

「・・・とりあえずこっちにいくか？」

俺がそう呟いた瞬間、周りの草むらから多数の人が出てきた。そして嫌な予感がする。あー、これは・・・

「逃げるに限る！」

「おい、待て貴様！」

「待つかよバーカ！」

俺は一目散に逃げる。人間だったらまだ良いのだが、背中に黒い翼が生えている奴等は十中八九天狗。しかも鴉天狗。まず勝てない。だから・・・

「グヘッ！？」

「ふん、人間風情が私達から逃げれるものか！」

簡単に追い付かれます。おまけに飛び蹴りを喰らわされます。いやだつてさあ、コイツら飛んでくるんだぜ？俺は走りだぜ？逃げ切れるわけないんじゃないじゃあああああつ！！

「た、隊長・・・速すぎです・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「お前達だらしないぞ！」

「いやいや、隊長がありえないんですよ・・・」

何やら揉めてるようだ。今の内に逃げ「貴様、そこから動くな」れるわけなんですよねはい。俺は体を起こして天狗達のほうを見る。するとそこには中々な美女達が5人いた。チツ、幼女じゃねーのか。

「た、隊長、説教は後ですよ！今はこの人間をどうするかですよ！」

「そんなもの決まっている。我々の領域に無断で入ったのだ。殺すに決まっている」

ですよねー。もう分かりきってたことだから別段驚かないが。そして相手のやり取りをしている中で俺は逃げる作戦を練っていたのだ

！流石俺だ、頭がいいぜ！！

「じゃあな人間。我々の領域に入った自分の身を呪え」

「いけー隊長！」

応援するとか、なんとも緊張感のない部下なんだろうか。ってやべ、刀を振り下ろしてきた！フハハ、だが甘いのだよ！

ガキンツ！という音が俺の目の前で鳴った。その正体は刀と俺が創った50cmくらいの土の盾がぶつかった音だった。ハッキリ言っでこれで防げたのは運だ。相手が油断していたって事もあるだろうが。

「なっ！？貴様能力持ちか！」

「持つてなきやこんな所こねエーよ！さア喰らえ！我流八極拳奥義

『崩掌』！！」

「ガフツ！？」

き、決まったー！避けられると思ったけど普通に決まったー！これはうる覚えの崩拳をアレンジしたものだ。本家より威力が無いと思うが・・・。

だが、チャンスは出来た。今の内に逃げる！！

「隊長の敵は私達が討つ！」

「よくも隊長を！」

クソッ、こいつ等もいたな！でもその言い方だと隊長さんが死んだみたいじゃないか。まあいい。俺にはまだ切り札が沢山あるのだよ！

「邪魔だ！これでも喰らってろ」

霊菜から貰った札を投げる。札には光と書かれている。後は分かるな？

札から強烈な光が迸った。俺は直視しないよう下を向いていたから余り効いてはいない（それでも少しくらっているが）が、天狗たちはそうはいかない。

「キャアアッアアッ！？」

「め、目がアアアアッ！？」

今がチャンス！目を押さえている天狗たちの腹を蹴り、追いかけて来れなくしておく。そうしないとすぐ追いかけてしまうから。本当は蹴りたくなかった。俺は平和主義な人間だからな、暴力は苦手なのだよ。え？嘘だって？嘘じゃねーよ！ホントだよ！

「後は全速力で逃げるだけだ！」

サラバダー

青年逃走中・・・

ハア・・・ハア・・・な、何とか逃げ切ったか・・・？

俺は土の上とか関係なく大の字で寝転ぶ。久しぶりに全速力で走った気がする。途中でこけたけど気にせず走った。でもそのお陰で逃げ切れた。

ポケットから札を取り出す。後あるのは結界用短剣と木・火・土・金・水と書かれた札が合わせて15枚だ。霊菜から買ったから効果はあまり無いだろうと思っていたのだが、そんなことは無かった。これは帰ったらお礼をしないとあげんとな。調子に乗りそうだが・

「さて、一応危機は去ったがまだ安全とはいえない。一先ずまた移動するか」

また天狗に見つかったら面倒だ。俺の体力も札も有限だ。鬼と戦う前に力尽きてしまうだろう。それだけは何としても避けたい。俺はココで死ぬわけにはいかないのだから。まだ幼女と結婚してない！これが一番の理由だ。

「なんだい兄さん、もうどっかいくのかい？」

「！？」

前へ飛ぶ。その瞬間ドゴンッ！という音が響いた。

後ろを振り向くと俺がいた場所はクレーターが出来ており、その中心には額に一本の赤い角を生やした『鬼』がいた。その姿には見覚えがあった。あれは・・・

「おお、アレを避けるとはやるねえ」

「山の四天王、力の勇儀・・・！」

「おや？私の名前を知っているのかい」

「・・・ああ」

クソッ！いきなりヤバイ奴登場か！

星熊勇儀、怪力乱神を持つ程度の能力。つまり一撃でも喰らえば即アウトってわけか・・・。

「まあ人間なら知っていて当たり前かな」

「あア、アンタは都では有名だからな」

「それは嬉しいねえ。で、人間のアンタが私達の縄張りに何のよう

だい？・・・ん？ああ、そうか」

「・・・？何がそうか何だ？」

「アンタは何も聞いてないのかい？私達が都に出した暇つぶしの事だよ」

「暇つぶし？」

何だそれは？暇つぶし？そんなの全くといっていいほど知らない。

「ああ。母様が都に手紙を送ったんだ。『強い人間を一人寄越せ。そして私の子どもに戦わせろ』ってね」

「・・・ハアアアアアッアアッア！？」

み、帝の野郎オオオッオオオッ！！何が退治だ！生贄の間違いだろゴルア！！チクシヨウチクシヨウチクシヨオオオウ！！

「その様子だと聞いてないみたいだな。まあ私達には関係ないかならさつさと行くよ」

「ハア？どこグエエッ！？」

ちよ、お前首根っこ持つのはヤメロ！く、苦しいイ・・・！！

青年移動中・・・

「ほら着いたよ」

「おぶっ！？」

こ、コイツ投げやがった！しかも凄い勢いで投げた！！受身すら取れなかったから背中を強打してしまったじゃないか。い、痛い・・・

。 っ て エ エ ！ ？ 周りに沢山の鬼がいるぞ！？ ヤベツ、俺死んだわ・・・

「母様、人間を連れてきました」

勇儀がそういうと奥から馬鹿でかい妖力が吹き出てきた。こゝ、これは幽香以上だぞ・・・！？ ヤバイ、手が震えてきた。

そして姿を現した一体の鬼。一言で言うなら妖艶という字が当てはまる。俺が紳士じゃなければ前屈みになっていたことだろう。

「うむご苦労だった勇儀よ。一先ず下がっておれ」

「分かりました」

「で、お主が都から来た人間かい？」

「・・・そうだけど」

「貴様！母様になんて口の聞き方をするんだ！」

「殺してしまえ！」

『殺せ！殺せ！殺せ！』

殺せコールが始まった。が、そんなもの今の俺にとってはどうでもいい。問題は目の前にいる鬼。ありえないくらい妖力を出して此方を値踏みするかのような目で見ている。油断すればそのまま潰される・・・！

「お前達、静かにせんか！」

「しかし母様！」

「今は私と人間が話しているんだ。他の者は口出しするでない！」

「・・・分かりました」

「すまないな人間よ。子ども達の事は許してくれ」

「あア、こつちも口調が悪かったからな」

あの鬼達を一喝で黙らせるほどの力を持っているとか、俺が勝てるわけ無いじゃないか！

「では人間よ。我が都に送った手紙の内容は知っているな？」

「あア。つツても内容は勇儀に聞いただけだな」

「・・・まあいい。では内容を知っているなら我が子どもと戦ってもらおうか」

すると勇儀と鬼達の中から一人の鬼が出てきた。これまた見たことのある容姿。頭に挟れた二つの角に瓢箪ひょうたんをぶら下げている。だが身長は152cmくらいというところに疑問を感じる美少女。恐らくこの鬼は伊吹萃香だろう。だが原作だと幼女なのにこっちでは少女クソッ、こんな所で原作と違うところが出てこなくてもいいじゃないか！

「お母様！私も戦いたいです！」

「おいおい萃香、アンタはこの前戦ったじゃないか。しかも負けたし」

「あれはあの陰陽士が強すぎたんだ！」

「まあ確かにあれは反則だったねえ・・・」

何か知らんが話し始めたぞこいつら。

「なら最初に私がその人間と戦って、次に勇儀が戦えばいいじゃないか！」

「いや、最初に戦うのは私だろ？その後生きていれば戦えばいいじゃないか」

「えー、最初がいいよお」

「萃香、あまり我侂言うんじゃないよ」

「・・・わかったよ。じゃあ勇儀の後でいいよ」

「それでいいか人間よ？」

「無理に決まってるだろ」

「はあ！？」

萃香が驚いている。いやいや驚きたいのはこっちの方だ！何で俺が四天王相手に連戦しないといけないんだよ！確実に死ぬわ！！

「いいじゃん連戦くらい！」

「アホかテメエ！鬼と連戦したら死ぬに決まってるだろ！！」

「アホとはなにさ！」

「テメエの脳みそに聞け！」

相手が幼女じゃないなら罵声もスラスラでるぜ。全く、この世界には人間しか幼女がいないのかねえ？妖怪相手だと見かけたことすらねーんだけど。・・・チルノとかが幼女じゃなかったら死のう。

「勇儀！やっぱり最初は私にやらせて！」

「しょうがないね、好きにしな」

「おいおいおいちょツとまで！何で二人と戦うことになってるんだよ！無理だッて言ッてるだろオが！！」

「じゃあどうにかしてよ！」

「まさかの丸投げ！？」

何なんだこの鬼は！我俣にも程があるだろ！！チクショー！どうにかしろっていわれてもどうにも出来ないだろーが！でもどうにかしないと二人と戦う羽目に……。どうする？どうする俺！

ふと頭の隅に袋の事を思い出した。ピンチの時に使ってほしいと言われ渡された袋。すぐさま袋を取り出し、中身を出す。そこには陰陽球があった。勇儀や萃香は武器だと思ったのか戦闘体制を取っている。

「へえ、連戦は嫌だから二人同時にやろうってわけか」

「男だね」

「その心意気に免じて本気で相手してあげるよ」

「はあ？」

「いやいや、誰も同時に戦うとかいってないんですけど？サインとかも出してないんですけど？本気とか死ぬんですけど？秒殺されるんですけど？」

「じゃあ早速・・・やろうか！私の名前は伊吹萃香！山の四天王技の萃香！！」

萃香の拳が目の前に迫ってきた。ちよっ！？速すぎる！！

「のわああっああ！！？」

ギリギリ避けれたけど、風圧なのか頬が少し切れた。は、半端ねえ・・・。ってうおお！？勇儀がいつの間にか目の前に

「ほらほら！よそ見してる暇なんて無いよ！！私の名前は星熊勇儀。山の四天王力の勇儀だ！！」

「グオッ！？」

目の前に今度は勇儀の拳が・・・。これは避けられねえ！ならば！

「激流に身を任せ同化する！」

「何！？」

俺は勇儀の拳を手で逸らす。なんてことは出来ずに左腕が折れた。はっ？

「づああアあアッア！？」

「悲鳴あげてる暇も無いよ！」

「ブハッ！？」

次に萃香の蹴りが俺の腹に突き刺さる。だが俺はその瞬間に札を全て右手だけで投げた。が数枚は投げるのに失敗して地面に落ちてしまいが、それ以外は全部萃香に命中したはずだ。あの至近距離で投げられたんだ。避けれるはずがない。

ドゴオン！という音と共に俺は壁に埋まった。文字通り埋まったのだ。何て力だよ・・・、蹴り一発で壁に埋まるとか死ぬレベルだろ。現に俺は肋骨などが折れて口から血を吐き頭からも結構な出血をしている。でもこんな時でも冷静な俺は異常なのだろうかと思う。いや、こんな時だからこそ冷静じゃないと駄目なんだろうな。

「ふー、今のは危なかったなあ」

「油断しているからそういう目にあうんだ」

「避けたからいいじゃん！」

なん・・・だと・・・？アレを避けたと？そ、そっぴや萃香の能力って大きくなったり小さくなったり出来たんだっけ？それ以外にも霧になったりと強力な能力だったかな・・・？リミッター外せば勝てると思うが・・・、残念ことに右腕も逝ってしまったみたいだ。あー、これは本格的にまずいな。

「勇儀さあ、この人間威勢のいいこと言った割には弱くない？」

「私もこんなに弱いとは思ってもしなかったな」

「よ・・・弱くてわる、かつた・・・なア！」

火槍、水槍、土槍、風槍、雷槍を一本ずつ計五本出して勇儀の方に向けて発射する。だが・・・

「甘いねえ」

「はッ？」

勇儀がブンッ！と腕を振った瞬間、五本の槍が砕け散った。な、何が起こったの・・・？

「その程度じゃあ私達には届かないよ」

「能力もたいしたことなかったみたいだねえ」

おいおいふざけんなよ！腕を振るっただけで槍が崩れるとか有り得ないだろーが！これが鬼って種族なのか！？

「強いと聞いてわくわくしたのにガッカリだよ」

「本当だねえ」

「・・・誰も、強いとはゲホッ！言って・・・無いだろ！」

陰陽球を蹴飛ばす。ただの悪あがき。確実に避けられる、もしくは壊されてるのは目に見えてる。でも殺される前に傷一つつけたいから槍も飛ばす。

「だから無駄だって」

今度は萃香が球＋槍を壊した。ハハハ、もうこれは詰んだな。詰みゲーだ。やっぱりただの一般人が鬼相手に勝てるわけなかったんだな・・・。

その時だった。壊された陰陽球が光り始めた。俺や勇儀たちは陰陽

球に目を向けた。光は段々と大きくなってそして・・・

「破ッ！」

「えっ！？」

「何ッ！？」

光から人が出てきて勇儀と萃香が吹き飛ばされた。光から現れた人物、それは・・・

「大丈夫ですか公平さん！」

・・・博麗霊菜だった。

此方に近づいてくる霊菜。まさかの霊菜がくるとは思っていなかった。なるほど、ピンチの時に使ったと陰陽球が壊される事を予想して渡してきたんだな。ヤベエ、女神に見える。

「あああ！？こんなに怪我するまで何で陰陽球を割らなかったんですか！」

「ゲフッ・・・今はそん、なこ、と言ッてる場、合じゃないだろ・・・」

そう、そんなこと言ってる余裕がない。何故なら二人がこっちに猛烈な速度できてるからだ。

「勇儀！あの巫女、噂の博麗の巫女じゃない！？」

「これは運がいいねえ！博麗の巫女ならつまらない試合も楽しくなる！」

「くっ、流石に山の四天王が二人相手だと厳しいですね・・・」

二人の強烈な攻撃に、霊菜は防戦一方となる。いや、二人の鬼の攻

撃を防いでもうだけでも凄いなが……。それに比べて俺の雑魚さは……。

ん？待てよ？霊菜がいるって事はリミッター外してもらえるんじゃないか？

「霊菜！ゲホッゲホッ！！？作戦がある……。」

「作戦？分かりました！」

二人をまたも吹き飛ばす。うわー、まじ強え。吹き飛ばせる時点で人間卒業しちゃってるじゃないか。

「公平さん、作戦とは何ですか？」

「俺の手を取って……。首にある装置に赤い……。丸がある……。・・それを俺の指で押してくれ……。・・。」

「了解です。ああ、私の公平さんの手が冷たいです……。・・。」

やばい、血が全然足りない。意識が薄れてきた。ふざけた事いってないで速く押してくれ……。・・。

「いきますよ？えいっ！」

カチッ！という音が首元からなった。

その瞬間傷や血が全て復元し、骨折なども綺麗さっぱり治った。これは原子を操る程度のお陰だ。マジ便利過ぎる。

「勇儀！あの人間の雰囲気が変わったよ！！！」

「油断するなよ萃香！！！」

警戒しつつこちらに向かってくる二人。さて、さっさと終わらせますかね！

「霊菜、ここは下がッていてほしい」

「ここは旦那の役目ってやつですか？分かりました、女房は下がって応援してますね！」

「黙らッしゃい！」

「話している暇なんてないよー！」

勇儀が拳を振り下ろしてきた。だが今の俺にはそんなもの効かん！！ゴギンッ！！と共に勇儀の驚く声が聞こえた。

「わ、私の腕が折れただと！？」

「意外か？まアさっきまでやられていた雑魚が腕を折ったからな。そりゃア驚くわな」

腕を折ったのはかの一方通行の反射だ。相手の力のベクトルを他のベクトルと共に反射したんだ。それだけでも瀕死級なのに骨折だけで済んでる時点でおかしいのだが。

「そついや俺の名前を言ッてなかったな。俺の名前は杉本公平「後で博麗公平になりますけどね」・・・はア・・・まア覚えなくてもいいけどさ、テメエらを倒す名ぐらいは・・・聞いておきてエだろオー！！」

腹目掛けて拳を突き出す。勇儀はまだ驚いているのか反応が遅れている。がそれでも避けようとしたので鎖を出して手足を縛る。これで逃げれるはずがない！喰らいやがれ！ベクトル変換で威力が上がったこの拳を！！

「ッ！？」

メキメキという音と共に吹っ飛ばされる勇儀。地面を何回もバウンドして最後は壁に激突してズルズルと地面に落ちていく。どうやら気を失ったみたいだ。

今度は萃香の方を向く。萃香はビクツとした。どうやら勇儀が一撃でやられたのを見て多少は恐怖を覚えたようだ。さて、フィナーレと曰くかね！地面を踏んで向かっていく。その際もベクトルを操っているから有り得ない速度で跳んでいく。

「わ、私には攻撃が当たらないんだぞ！！」

そう言つて霧になるがそんなもの俺には関係ない！要は霧の向きを変えて集合させればいい、たったそれだけだ。だがそれをやられた萃香は驚愕の表情をしていた。

「え？！何で？！」

「悪いが・・・こっから先は一方通行だ！運がなかったなア！！」

「へブアツ！！？」

顔面をおもいつきり殴つて地面に落とす。ドゴオーン！！という強烈な音と揺れが発生した。煙が晴れるとそこにはクレーターと中心に気絶した萃香がいた。

「ふう・・・何とかいけたか」

ここまでで50秒だ。早くスイッチを切らない大変なことになる！カチリッ！と平常モードに移行させる。その瞬間

「ゲボフファルブシュッ！！？」

全身から血が吹き出る。俺はスローモーションのような感覚で倒れ

た。倒れる瞬間に見えたのは驚いている鬼の親玉とこっちに向かっ
てきている博麗霊菜の姿だった・・・。

第六話（後書き）

戦闘描写が・・・難しい・・・!!

第七話

ハッ！？ここは誰？私はどこ？なーんて冗談は程々にして、今俺がいるのは玄屋にある俺の部屋だ。と言っても今起きたばかりだから部屋に寝かされている状態だ。身体もあまり動がなく、頭ぐらいしか動かせない。でも幽香と戦った時に比べれば全然マシだ。あの時は一歩気を抜けば死ぬ状態だったからなあ……。その点今回は死なないので安心できるぜ。

でも50秒で全身から血が吹き出るのか……。3分でアレだったから予想は出来たけど、いきなり噴出したら対処の仕様がな。いや、対処自体無いのだけれど。

「そt d ビス t 連もひゃ t しえ t c」

ああ、装置が起動してないのか言語が可笑しくなってる。因みに、それにしても腹減ったな、といったんだ。あー、誰か来てくんないかな？

すると噂をすれば何とやらだ。足音が聞こえて、襖の前に止まったのか音がしなくなった。そして襖が静かに開いた。開けた人物は霊菜だった。恐らくだがここに運んだのも霊菜だろう。

「公平さん起きてますか？お粥を作ったんですけど、ってあの様子だとまだ起きる様子は……」

「p r i ふえ g y は（起きてるが）」

俺が解読不能な言葉を話すと霊菜が驚いた顔で近づいてきた。そしてそのままお粥を置き……

「公平さーん！！」

「！！！？」

急に抱きついてきた普段の俺なら避けるのだが如何せんどう足掻いても身体が動かない。クソッ、初抱きつきは幼女って決めてたのに！！

「ああ、この感触・・・これが公平さんの感触・・・・・・病み付きになりますう・・・」

「ゆ！？むんpさらい！！（ちょ！？気持ち悪い！！）」
「んふふゝすりすりゝ」

俺の胸板に頬をつけてすりすりしてくる。うわあああ！？お、俺の幼女限定初すりすり胸板があああつあ！？クッソガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

「この気持ちよさ・・・このまま寝てしまいたいです」
「ね、寝るなよ！！！？」

つて、やっと起動したのかよ。この補助装置、起動がまちまちなんだよ。大体五分前後だが、偶に一時間とかあるから困る。つと、やつと喋れたんだ、コイツをどかさないと・・・って肝心の身体がまだ動かないだとおおおおっお！？

「あれ？いつもなら無理矢理どかすのに今日はそれをしないって事は・・・やつと私の愛を受け止めてくれるんですね！」

「いやいやいや！？ただ単に身体が動かせないだけだ！！！」

「・・・これはチャンスですね」

「何が！？」

コイツと話すと俺のペースが崩される！天敵ってやつか・・・ああ、

恐ろしや恐ろしや・・・！

「まあ御ふざけはこれまでにして、お粥作りましたけど要ります？」
「ふざけてたのは君だけだからね？はア・・・ちようど腹が空いて
たからいたなくよ」

「はいどうぞ、あーん」

「なん・・・だと・・・？」

レンゲを俺の口元まで持つてくる。クツ、まさかあーんをしてくる
とは・・・って今考ええれば身体動かせないから食べさせてもらっ
て以外道が無かったのだ！だがしかし俺の初あーんは幼女にやっても
らいたいのだ。ここは腹減りは我慢しとこうか。

「や、やッぱりいいよ。実はそんなに腹減ッてないし」

「またまた照れて可愛いですね、それともこれ以上の事で食べさせ
てほしいのですか？なら・・・口移ししかないですね！！」

「やっぱり腹減ったからあーんをお願いします」

「・・・わかりました、はいあーん」

あ、危ねえええ！！危つく俺の初キッスも奪われるところだった！
！マジ油断ならねえ・・・！下手したらいつか食われてしまいそう
だ（性的な意味で）。気をつけておこう。

俺は差し出されたお粥を食う。うん、中々上手い。この時代は塩が
高価なはずなんだがこのお粥には塩が入ってる。

「お味はどうですか？」

「ん、美味しいよ」

「まあお粥なら不味いわけないですけどね」

「そりゃそうか」

俺たちは談笑する。久々の談笑タイムだ。聞きたいこともあるし、ここは色々と質問しておこう。

「そっぴや鬼達はどうしたんだ？」

「それなんですけど、あの後天狗が攻めて来まして」

「天狗が？」

「はい。何でも邪魔だから出ていってもらったという感じでしたね」

「で、結果は？」

「鬼の圧勝ですね。最初は天狗が圧倒的でした。ですが鬼神が本気を出したら天魔すら一瞬で負かしたんですよ。それからなし崩しに天狗が敗れていきましたね」

「・・・やッぱりあの鬼とは戦わなくて良かった」

そうですね、と霊菜も頷く。それから鬼神に手紙を貰い、俺を連れて逃げ、帝のところに手紙を出したらしい。内容は鬼が負けたこと、二度と都は襲わない等々といったことが書かれていたようだ。因みにその手紙を見た後、霊菜と何か話して、帝が何やら張り切っていたらしい。何を話したんだって聞くとはぐらかされる。嫌なフラグがビンビンだぜ。

そして何時間か分らないが眠たくなってきた。まだ体力が全然回復してないので身体が睡眠を欲してるのだ。

「フアァー・・・あー、悪い霊菜。眠たくなッたから寝るわ」

「あつ、そうなんですか。分かりました、お休みなさい」

「あア、お休み・・・」

「・・・これはチャンスです」

瞼を閉じる。すると段々意識が遠のく。最後に霊菜が何か言っていたが全然聞こえなかった。変なことじゃなければいいのだが・・・

「寝てしまいましたか。フフツ、寝顔も素敵です！さて、早速既成事実を作りましょうか。やっと、やっと結ばれるのね！では・・・いただきます」

翌朝、公平はなぜか妙にスッキリしていたという。そして霊菜はツヤツヤしていたらしい・・・。

第八話

やあ皆！ただの一般人、杉本公平だよ！アレから10年が過ぎた。結構飛んじやったけど仕方ないよね。だってさあ・・・

「お父様、今度修行の相手をしてくれませんか？」

「れいか靈花、こうちゃんは私と一緒に家で寛ぐから駄目ですよ」

「修行についてはお母様には関係ありません！」

「こうちゃんは私の旦那ですから関係あるのです！」

今俺の隣でワーワー言っているのは靈菜と靈花。靈花は俺と靈菜の娘だ。まあこのことから俺と靈菜が結婚して子どもを生んだってのは分かるだろう。だがしかし！皆様は俺がロリ意外と結婚するなんて有り得ないと思っっているだろう。と、いうわけで俺が靈菜と結婚したエピソードを話そうではないか。
アレは今から10年前の時だ。

――回想――

鬼との戦いで見事依頼を果たした俺。そこからはもう都の英雄として尊敬されていた。尊敬されるほど立派な人間ではないのにな。と、ちよっとネガティブな考えが一ヶ月続いたある日、急に帝に呼ばれたのだ。まさかまた依頼か？と思い、宮殿に赴くとそこには靈菜もいた。まあ帝の妹と仲良しな靈菜がいるのはこのときは何にも思わなかったのだ。だがココで靈菜がいることに違和感を覚えれば結婚なんてしなくてすんだかもしれない。

靈菜もちょうど帝の部屋に行くらしく、一緒に行くことになった。

腕を絡めてこようとしてくるので、それを回避しながら部屋へと向かっていく。この時、帝の従者達から微笑ましいものを見るかのような目で見られていた。俺はそれを気にせず進み、帝の部屋へと着き、ノックをして入ったのだ。

「やあ待つてたよ」

「おはようございます。で、何故帝様は私を呼んです？」

「それはね、公平君は今恋してる人「いません」は・・・またまたそんな嘘について」

「嘘じゃありませんよ」

「またまた公平さんたら」

霊菜が俺の頬をぶにぶにと人差し指で押してくる。それを無視して俺は考える。いきなり恋してるって何だ？まさか英雄視されてる俺を自らの一族に入れようという腹か？ってことはだ。帝がこんなことを聞くんた、この可能性は高いと思った。が、大きく外れたがな。

「ほら、君たちはそんなに愛し合っているじゃないか」

「愛し合ッていないです」

「帝様、公平さんは照れ屋なのですよ」

「照れてねエし、逆に冷めてるわ！」

「仲がいいねえ」

この時帝を殺したくなったのは秘密だ。そして霊菜が腕を絡めてきやがった。俺は無理矢理解こうとしたが帝の前なので乱暴なところを見せたら不敬罪とかで殺されると思ったのでこのままにしていた。これがいけなかった。帝はうんうんと頷いて、手を叩き従者を呼んだ。もう俺はこの時点で詰んでいたのだ。

「公平君を着飾ってくれない？」

「分かりました。杉本様、どうぞ此方へ」

と、従者が俺を案内しようとする。霊菜はあっさりと腕を解いた。ここにきて嫌な予感がしたんだ。だが時すでに時間切れ、部屋に案内され、服を渡された。何かの正装らしい、良い生地が使われているのが分かった。従者は、そのまま目を瞑ってくださいと言いつと俺の服を脱がせてきた。瞬間的に逃げたが、どうやら渡された服を着せようとしたらしい。なら初めからそう言ってほしい。

10分後、ようやく着付けが終わりまた従者に案内された。案内された場所は大きい庭の入り口。何やら庭ではがやがやと賑わっているようだ。何かお祭りごとでもあるのかな？と考えていたら後ろから霊菜が来たのだ。

「お待たせしました公平さん」

「ん？別に待ってたわけじゃア・・・ハア？」

霊菜が着ていたのはよく昔の結婚式に着られる和服だった。そして顔も化粧をしてた。そして俺の服も見る。これも昔の結婚式に使われていた衣装だった。ここに来て俺は気づいたのだ。嵌められたと！

「ふ、ふざけるなアアツア！！これは帝が仕組んだ罠だア！！！」

と言って逃げようとするが

「照れないでくださいよ」

腕をがちりホールドされた。うおおおお！？全然とれねえ！？・・・後から聞いた話なんだが、体を霊力で強化しているので、並大抵の力では解くことは出来ないとか。・・・博麗の巫女恐ええ！！？逃げる事が出来ないと悟った俺は、もうどうにでもなれと覚悟を

決めたのだ。その後の事はあんまり覚えていない。キスされたりというのは鮮明に覚えているがそれ以外は全然覚えていないのだ。で、式が終わった後は初夜なのだが、俺はさっさと寝た。何故交わらなければならないのだ。といってずっと交わらなかったのだが、いつの間にか霊菜が妊娠していた。その時は頭が真っ白になった。ええ？誰の子？といったら私と公平さんの子ですよと嬉しそうに言った。どうやら俺が寝てる間にヤッたらしい。ああ、道理で朝何かスッキリしていたと思った。そして霊花が生まれた。それからどんどん育っていき、今に至る。霊花は霊菜似だ。ツリ目がもうほとんど一緒だ。で、それから一緒に神社で過ごしている。本当は博霊の巫女は5歳になると一人で神社に住まないといけないのだが、霊菜が

「掟は壊すものです！」

とって掟を壊した。まあでも神社は玄屋とは近いからいいけど。で、そこからは俺玄屋で仕事をしにいき、霊菜は霊花の修行を見ているわけである。で、冒頭に戻る。

――回想終わり――

「まアまア、落ち着けよ二人とも」

「こうちゃん（お父様）がそういうのなら」

二人は俺に対して甘い。別に厳しくてもいいんだけどなあ。

「で、霊花は修行を見てほしいのか？」

「はい」

「うーん、でもさア、靈花って実際俺より強くない？」

そうなのだ。靈花は俺よりも遥かに強いのだ。靈菜よりも・・・な。何でも歴代最強だとか何とか。

「そ、それはそうですね・・・お父様と戦いたいのです！」

「靈花、こうちゃんが困ってるですよ！」

「いや、困ってはいないんだけどさ・・・」

と、俺が返答に困っているときいきなり目の前に人が現れた。いや、厳密に言くと目が除いているスキマからヌルツと出てきたのである。

「おうわアツ!!?」

俺は吃驚して尻餅をついてしまった。でも仕方ないだろ、目の前に人がいきなり貞子みたいに出てくるんだから。

「あつ、八雲さんじゃないですか」

「久しぶりね靈菜」

「お母様、この方はお母様の知り合いですか？」

「ええそうですね」

「靈菜、この子は？」

「私と旦那様の子ですよ」

や、八雲？ど、どこかで聞いたような・・・。俺は八雲と呼ばれた人を見る。金髪、整った顔、紫を基調としたドレスにこの時代では有り得ない帽子と日傘。ま、まさかこの人って・・・

「八雲・・・紫・・・!!?」

「あら？私の事を知っているなんて・・・ああ、この方が霊菜の旦那さんですね？」

「そうですよ！私の愛しい愛しい旦那様です！」

八雲は俺を興味深く見てくる。こんな所で原作主要キャラに会うとは・・・。だがこの調子でいけばいつかロリとも会えるのではないか？まあ今は自分の娘で満足だが。

「ふーん、まあいいわ。それよりも霊菜、頼みたいことがあるの」

「へー、八雲さんが直々にお問い合わせにくるなんて・・・」

「ええ、実は前話した樂園について覚えてるかしら？」

「勿論覚えていますよ。妖怪と人間が共存できる樂園でしたっけ」

おっと、まさかここで幻想郷誕生について見れるとは意外だった。つか八雲紫って何歳だよ。明らかに俺より年上なのは分かるけどさ。

「そうよ。で、霊菜にはその手伝いをしてもらいたいのよ」

「私は別にかまいませんが・・・こうちゃん、どうします？」

おい！ここで俺に振るなよ！！まあでもここは無難に答えておくか。

「別にいいんじゃないか？あアでも霊花についてはどうするんだ？」

「あーそうですね・・・」

「ならその子も一緒に手伝ってもらえるかしら？」

「え？」

「だってその子、霊菜よりも力があるわね。實力からして私の式以上だわ」

ば、パないです八雲さん！まさか一目見ただけで相手の實力が分か

るとは……。あれ？でもさっき俺見られてたような……。？でもきつと雑魚と思われただろうな（涙）

「流石八雲さんですね」

「うふふ、それほどでもないわよ」

「で、霊花はどうするですか？」

「そうですね、私はお父様が良いというのならいいですよ」

霊花、君も俺に振るのですか。

「まアこれも霊菜のためになるからいいけどさア、無茶と無理だけはするなよ？」

「はい！」

「じゃあ旦那さんの許可ももらえたことですし、早速行くわよ」

『は？』

声が重なる。と同時に霊菜と霊花はスキマに落とされた。そのスキマに八雲さんも入っていく。そしてさっきまで賑やかだった居間が急に静かになった。ああ、ちょっとだけ寂しいや。でもいつか帰ってくるだろ。こんなことで寂しがってたら別れがきたら立ち直れなくなってしまう。その為にもこれくらいは平気にしとかなければならない。まあ、一生会えないわけではないからいいんだけどね。

後日、二年ぶりに帰ってきた霊菜たちを見て涙を流す青年が神社にいたという……。

第八話（後書き）

次から結構年数が経ちます

第？話

やあ皆。杉本公平だよ！あれから600年くらいたったかな。今俺は幻想郷に住んでいる。まあ霊菜と霊花が帰ってきた時に神社ごとスキマで拉致られたわけだよ。序でに玄屋も拉致られたんだ。親父さんは今も人里で酒を造ってるぜ。という俺も造ってるのだが。

霊菜と霊花は当然ながら寿命で死んだよ……。死ぬ時は幸せそうな顔が今でも頭に浮かぶ……。ああ、涙が出ちゃう……。まあ死んだときは悲しくもなつたし寂しくもなつた。だがそれを取り越えて俺は一步成長した。だけどそれと同時に紫に神社を追い出されちゃったんだぜ！なんでもいつ間違いを起こすか分からないとか……。起こさねえよ！！と言ったが聞く耳持たずだったよ。

で、そこから何年か経って起きた騒動。そう、幻想月面戦争騒動だ。紫率いる妖怪たちが月に侵攻していった異変。妖怪達だけなはずなのに何故か俺は拉致られた。俺は無理矢理戦わされたんだよ！マジでビームがビュンビュン飛んで来るのには唖然としたね。でも一番の問題は月夜見・綿月姉妹だった。何だよ神と神を宿せる綿月依姫、一振りですべてをなぎ倒せるほどの扇子を持った綿月豊姫というチートな面子は。で、三人を前に妖怪達は恐れたのか逃げ出す始末。紫は俺の首についてる装置を知っていたのか、リミットを解除して戦えとか言ってきたやつだ。ふざけるなと思ったがリミットを解除しなければ逃れられない。紫はそうでもないが。最後に紫は

「死ななければ助けてあげるわ」

って言ったから俺は渋々リミットを解除した。そこから一分のはずだったんだが三分も使っちゃった。三分で綿月姉妹は倒せ、月の軍は壊滅に陥った。具体的には綿月豊姫が放った極太ビームを反射し

てたら勝手にやられてたっただけだが。

紫はまさか逆転するとは思ってもいなかったようだ。が、妖怪は紫しかないなく、俺も全身から血が噴出し、拳句の果てに腕が千切れたりしたもんだ。ハッキリ言っただけがいないかったら俺は間違いなく死んでいた。境界を操る程度の能力やベエわ。だがここで原作を変えてしまった。本当は敗北するはずなのだが引き分けにしてしまったのだ。このせいで何か起きなければいいが。

次は妖怪拡張計画。これは今やってる最中らしい。何でも人の人口が増えすぎて妖怪が少なくなってしまうていたのだ。紫はそれを見てこの計画を立てたらしい。まあ妖怪が増えても人里は襲われないとかちゃんと規約があるからいいがな。

だが増えてく一方だとある妖怪は地上から姿を消した。そう、あの『鬼』が地底に潜ったのだ。何でも人間が卑怯とか何とかで見限ったとか。いやいや、普通の人間は策を使わないと妖怪には勝てませんからね？生きていくためには卑怯もクソもないからね？って言うたら勇儀に殴られた。半端なく痛かった。お陰で一週間は飯をマトモに食えなかった。

「これが600年に起こった出来事だな」

「人が話してる最中に喋らない！」

「は、はいすみません！！」

そして現在俺は四季映姫・ヤマザナドゥに怒られているのであった。そう事の始まりは今朝の事だった。俺が散歩をしているときいきなり俺の目の前に人が現れた。その人は赤髪でツインテール。そして男を魅了する大きな胸（俺には意味無いが）。そして背中には特徴的な鎌。これだけそろえれば分かるだろ？そう、東方Project公式巨乳、小野塚小町そのひとだ。小町は慌てていた。何故慌てていたのかは後に分かると思うから割合させてもらおう。で、急に俺

の背後に隠れたわけだ。急な行動だったのでわけが分からず呆然と
しているといきなり頭にゴチイン！といういい音と共に頭痛が奔
ったのである！

「痛ッてエエエツエエツエ！？」

『あっ』

「あッ、じゃねえよ二人共！尋常じゃない痛さだッたんだぞ！？下
手したら死んでたぞオイ！！」

「す、すいません！！」

声からして少女だ。俺は恐る恐る顔を上げるとそこにいたのは謝っ
ている四季映姫であった。やはり幼女ではない。が、少女だから許
してあげよう。ここら辺も俺は成長したと言えよう。

「まア顔を上げるがいいさ。故意にヤツたわけでは無いだろ？それ
に俺もそこまで怒っているわけではないしな」

「あ、ありがとうございます」

と、四季と俺の目があつた瞬間、四季は驚いた表情をした。そして

「あ、貴方は杉本公平ではないですか！？」

「ええ！？」

と言った。ええ？何で俺の名前をしってるの？小町も知ってるみた
いだし……。ここで俺の第六感が危険を告げた。久々に嫌な汗を
かいたなあ。

「ど、どうやら俺はここにいない方が良いみたいだね！じゃあ仕事
もあるし俺は行く「逃がしませんよ？」グエエ！？」

い、いつの間にか四季が俺の目の前にいたかと思うと、持っている木の棒で俺の鳩尾を殴ってきた。ヤベ、朝食がリバーズしそうだ。リバーズを我慢していると小町に無理矢理正座のポーズをさせられた。

そしてここから地獄の始まりだった。

「いいですか？まず貴方は寿命をどう思っているのですか？生物には決まつた寿命があるのですよ？なのに貴方ときたらその寿命を奪う事はおろか寿命をドンドンと減らしているではありませんか！ただでさえ奪うことは罪なのに、更に減らすとは何事ですか！！大体貴方は（グチグチグチグチ・・・・・・）」

そして今に至るわけだ。小町は途中で逃げようとしたのを俺が気づいて四季に言つた。そこから小町も説教開始。ははは、俺を睨んでも無駄さ！恨みがましい目で見てても無駄さ！！ハハハハハッ！！

「大体貴方は……小町！人が話している最中に余所見をしない！」

「きゅん!?」

「お才、意外と可愛らしい悲鳴」

「貴方もです！」

「ぐへエッ!？」

又ワアアツ！？マジ洒落にならん痛さだぞオイ！！ここで俺はあ
ることを思い出した。俺や小町を殴ったあの木の棒のことだ。確か
アレは懺悔棒だったけな？殴るときに殴る相手の罪によつて重さが
変わるとか……。え？そうなると俺の罪つて滅茶苦茶重いつてわ
けか！？つてまあそうなるわな。寿命奪つてその寿命を毎日毎日減
らしてるからなあ……。でも俺が生きたためだから仕方が無いと

思う。まあ仕方が無いで済ます俺はとっても卑怯だと思うが。

「大体ですね貴方達は罪の意識が低すぎるのです！小町は今回も仕事を放棄して寝ていて、私に見つかったら逃げるとは何事ですか！」

そう、小町が慌てていた理由は単にサバタージュしていたら四季に見つかり逃げてたってわけだ。ふざけんなよ、何で俺と会うんだよ、何で俺の後ろに隠れたんだよ、何で俺がお前の代わりに殴られなきゃいけないかったんだヨオオオオッオ！！？

「杉本公平、貴方もです！」

「低くは無いと思いますが」

「いえ、低いです。確かに貴方は寿命を減らさないと生きれないのは知っています。その為に他の妖怪などを倒して寿命を奪うのも貴方が生きる為にやったのでしょうか。ですが・・・ですが！！貴方がこれまでに減らした寿命をご存知ですか？」

「んーと・・・18000年位か？」

「27263年です」

「うえエ！？」

ちよっ！？27263年も俺は寿命を削ったのか！？ってかよく27263年もの寿命があつたな。まあちまちまと妖怪とかを狩ってたからかなあ？うーむ・・・謎だ。

「これで分かりましたか？貴方は寿命を使いすぎているのですよ！」

「で、でも寿命を削らないと俺は生きていけないだぞ？」

「ですから、貴方のこれからすべきことは奪う命を敬い、そしてその寿命を大切に使うことです。それが貴方のすべき善行です。後そ

の装置は他人には言わない方が良いでしょう。寿命を無作為に使っていると知られたら貴方に何が起こるかわかりません。下手をすれば殺されます。貴方が殺されるとその寿命も意味がなくなりますし、何より悲しむ人がいますから」

さ、流石仏様だ！これから俺がする善行を提示して、更に俺の心配をしてくれるとは・・・！！

「分かりました。この公平、善行を積んで天国へ行く思いで頑張りますー！」

「よいしいです。小町、貴方が仕事を放棄して逃げたことは許しがない行為ですが、そのお陰で杉本公平にも出会えました。なので今回は特別に許してあげます」

「あ、ありがとうございます四季様」

地面に土下座をする小町。おいおい、地面に土下座したら服が汚れるだろ。あれ？そういえば俺は一応二人の名前を知ってるが、自己紹介はしてなかったような・・・。

「そういえばお二人の名前は？」

「あっ・・・そういえばそうでしたね。私の名前は四季映姫・ヤマザナドゥです。因みにヤマザナドゥは閻魔での役職ですので名前ではありません」

「あたいの名前は小野塚小町だよ。役職は死神さ」

「俺は一般人杉本公平だ」

『どこが一般人ですか（なんだい）』

俺たちは笑いあう。こんなに笑ったのは久しぶりだ。最近は笑いあうことが少なくなってきたからな。原作キャラに会ったこともあり楽しくなったのかもしれない。

「では私達はもう行きます」

「ん、分かりました。今度会ッたら酒でも飲ませてあげます」

「おお、流石公平だ！分かってるじゃないか！」

「だからといッて肩を組むな胸が当たッてる鬱陶しい」

「小町！破廉恥です！！」

「きゃん！？」

ここでまた人騒動が起こったのはいうまでもない。そして俺はこの日仕事に遅れたのもいうまでもない。親父さんの拳骨は滅茶苦茶痛かった・・・。

第？話（後書き）

主人公は胸に興味がありません。胸は大きかろうが小さかろうが口
りならおkっていう変態という名の紳士です。

第十話

博麗大結界・・・それは博麗神社を狭間に敷かれた結界。これを敷くことにより外の世界との行き来が出来なくなるほか、色々な利点があるらしいがソコは分からない。ただこの結界が敷かれたことにより妖怪達は混乱した。何故なら八雲紫はこの結界の事について妖怪達には言っでなかったのである。そのせいで妖怪達は暴れまわったりした。が、この結界が自分たちにも有益だと知らされた瞬間おとなしくなった。現金である。そしてこの事件は後に大結界騒動と呼ばれる事になる。安易ではあるが一番しっくりくる名前である。ただこの結界もそこまで万能ではなかった。そう、妖怪の弱体化という現象が起こってしまったのである。これには流石に妖怪は黙っていないかった。結界の外にでようとしたが、結界に阻まれてしまう。ならどうすればいいか。簡単なことだ。この結界を敷いた張本人、八雲紫及び博麗の巫女を殺せばいいのだから。だがあの大妖怪の八雲紫とあの博麗の巫女だ。並の妖怪が敵うわけもなく、返り討ちにあった。妖怪達は諦め、次第に落ち着いていったと思われた。しかし、密かに機会を狙っていた妖怪達がいた。それは『天狗』だ。天狗達は天魔を筆頭に妖怪の山で戦力を蓄え里に侵攻。一番危険視されていた『自称一般人』杉本公平を真っ先に捕縛。里は一時間もせずに制圧。そして天狗は里を開放する代わりに結界を解くことを要求。応じなければ村人を全員殺すと八雲紫に言った。八雲紫は考える時間がほしいといって、天狗もそれに応じた。そして物語はここから始まる・・・。

やあ、杉本公平だよ！現在俺は縄で縛り上げられながら天狗たちを見ている。天狗はもう勝ちムードなのか宴会をしようとする始末。だが、大天狗に怒られたりしているのでもいい気味だ。まったく、何か騒がしいと思って外に出た瞬間押さえつけられたんだぜ？ヒデーよ。で、俺は一人ぼっちで監禁された。見張りには天狗一人。実は見張りの天狗は外見がロリなのだ！これにはこうふゲフンゲフン！・・喜んだね。ほら、むさい天狗とかが見張りだったらマジストレスがマッハになってただろうし。では早速声をかけようと思う。

「あゝ」

「ん？何じゃ？」

じやって爺言葉かよ！ああ天狗って確か見た目の割りに年とってる奴が多いって話だ。この幼女もその類なんだろうああ合法ロリ素晴らしいなあ！！

「喉渴いたんですけど・・・」

「我慢しとれ」

うお厳しい！！？いやあゝ、俺が要注意人物ってのは天狗たちが話していたから知ってるけどここまで警戒されるのもなあ・・・幼女だから余計傷つく。

「あー、だったらこの縄を解いてくれませんか？」

「お主はアホか？何ゆえ捕虜の縄を解かねばならんのじゃ」
「ですよー」

これで解いたら逆にそいつがアホだ。さて、どうしようか。一番良い案はリミットを外すことだが手が使えないから押せない。それに300年前に四季から説教を受けてからリミットを解除するのを躊

踏うようにした。そのお陰で300年間リミットを外すことはなくなった。だがこの状況を覆すにはリミットを外すしかない・・・うむむ、悩みどころだな。あー、でも八雲が来るのを待つっていうのも手だな。よし、この案に決めた！

「そういえばお主」

「んー？」

「お主は里で一番強いハズじゃろう？なのに何故あんな呆気なく捕まったんじゃ？」

「あー、皆勘違いしてるけど俺はそこまで強くないよ。今まで勝ってきたのは偶然ツてやつだな」

「偶然であのフラワーマスターや鬼の四天王の二人を倒すことなど出来ぬであろくに・・・」

何か疑り深い目で見られてるんですけどー！？でも何でかな、気持ちいゴホンゴホン！・・・不快だ。幼女にそんな目で見られるわけにはいかない！

「まア種や仕掛けはあるけど、本当に偶然だし、仲間がいなければ死んでいたしね」

「ふむ、そんなもんかのう」

「そんなもんですよ」

するとその時だった。突如俺の体が浮遊感を覚えたのだ。幼女もそれに驚いているのか、慌てて鍵を開け手を伸ばしてくる。俺は手を伸ばしたかったが、如何せん縛られているので無理だ。そしてそのまま落下していった。周りを見てみると沢山の目が俺を凝視していた。ああそうか。この空間は

「八雲の仕業か・・・」

「その通りよ」

「痛ッ！？グオオオオオオオオ！？う、受け止めてくれよ！？
地面に背中を打ったじゃないか！！」

「嫌よ面倒くさい」

「この野郎オオオオオッ！？」

畜生！何で俺がこんな目にあわなければいけないんだ！俺はまだ幼女と話していたかったのに！！って痛い！？何で殴るんだ八雲オ！！？

「今はふざけている場合じゃないわ」

「あ？」

「人里が天狗に襲われたことは分かってるわね」

「そりゃア当事者だし」

「ならいいわ。今から天狗共を倒して人里を開放するわ。その為には戦力が必要なのよ。でも此方が期待できる戦力は博麗の巫女と私の式のみ。で、リミットを外せば使える貴方を危険なリスクを承知で連れてきたのよ」

「あー、でもさア、俺は閻魔に無闇にリミットを外すなっていわれてるんだけど？」

「その辺は大丈夫よ。閻魔から許可を貰ってきたから」

「え？」

俺が驚いていると紙を差し出された。そこには俺がリミットを外していいのと、あまり無茶するなということがギッシリ書かれていた。八雲紫・・・事前に閻魔に許可を貰いに行くなんて恐ろしいなあ。俺はそこまで考えが及ばんぞ？

「じゃあ作戦を伝えるわね。今博麗の巫女が別の場所で待機中ですよ。もうすぐ合図を出すからその合図とともに直進。博麗の巫女と

貴方が囃をし、私は天魔を叩くわ」

「ん？俺が天魔と戦わなくて良いのか？」

「それだとたとえ倒せても、私の力で倒したわけではないからまたこの様な事が起こりますわ」

「あー、なるほどね」

「じゃあもうすぐ合図を出すわ。準備をしといて頂戴」

「了解」

こうして人里奪還作戦が始まった。

青年移動中・・・

八雲からの合図があった。その合図というのは式紙だ。そしてその合図とともに人里へ突っ込む。ハッキリ言って天狗相手に囃などできるはずがないだろう。良くてまた捕縛、悪くて瞬殺だ。この装置を使うのもハッキリ言って最後の最後だ。最初から使ってたら時間切れで殺されるのがオチだ。だからこそ俺は自らの我流八極拳と霊菜・霊花の形見の四つの短剣のみで戦うつもりだ。

あちこちで爆発音がする。どうやらあちらは戦闘を始めたようだ。ならば此方はこのまま進んで人質が閉じ込められているであろう場所まで行く。そこならば天狗もいるだろうし。って、んん？俺の数々の戦場で培われてきた第六感が告げる。ここには駄目だ！と俺は前に勢いよく飛ぶ。と同時に俺のいた場所には風の塊が直撃し、地面を抉っていた。当たってたら間違いない死ぬレベル。

「あやややや、外してしまいましたかあ」

こ、この特徴的な言葉。間違いないやつだ。清く正しいという肩書

きが嘘くさい天狗。あることないこと書き立てるパパラッチ・・・
射命丸文！まさかこんな所で会うとは。ここは一先ず・・・

「逃げるが勝ちだ！」

「あやや！？」

短剣を4本投げ、牽制する。え？形見の短剣をそんな簡単に投げて
いいって？大丈夫だ、問題ない。実はこの短剣には霊菜・霊花が魔
改造したお陰で投げてても手元に戻ってくるのだ！！他にも色々と機
能があるがまた後で使うかもしれないから割合しておこう。

「乙女に向けて刃物を投げるとは酷いですね」

「なッ！？」

いつの間にか射命丸が目の前にいた。おいおい、全然見えなかった
ぞ！？幻想郷最速の名は伊達ではなかったか！

「お返しですよ」

「させん！」

「あや！？」

手元に戻ってきた短剣を至近距離で投げ、更に火槍を5本投げる。
どうせ避けられるが、目晦まし程度にはなるだろう。そのうちに逃
げる。

「危ないですね！刺さったらどうするんですか！！」

「ちょッ！？マジかよ！？」

コイツ、投げられた短剣を4本同時に掴みやがった！？ただ単純に
速いのではなく技術もあるってわけか・・・って感心してる場合じ

やねえ！

「つて、貴方よく見たら杉本公平じゃないですか！？馬鹿ですね、折角逃がしてもらえたのにまた戻ってくるなんて」

「ハッ！勝算があるのに逃げるわけねエだろ？」

「へー、吠えますね。いくら貴方が人間の中で最強といわれても、最速の天狗である私に勝てると思っているのですか」

「勝てるに決まってるだろ？」

正直勝てる気がしません。だから俺は逃げ続ける。そして八雲が天魔を倒しこの異変を終わらせるのだ！！これしか方法がない。

「その心意気は見事ですな。ですが・・・ってあややや！？あんなにカツコいい台詞を言ったのに結局は逃げるんですか！？」

「うるせエ！逃げるが勝ちなんだよ！！」

「うわぁ・・・かつこ悪い・・・」

ハッ！何とでも言うがいいさ！世の中は正々堂々戦っても上手くいかねえんだよ！！

青年逃走中・・・

ど、どういことなんだ？逃げてたのはいい。あの後何回も追いつけられたが逃げ切れた。それだけはいいい。でもさぁ・・・

「うむ、逃げたのに戻ってくるとは良い心意気じゃな」

「あらあら、私は確か囹をしてといったはずですけど・・・」

何で俺はあの見張りの少女と対峙してんだよおおっ！？そして俺の隣にはいつの間にか八雲がいるし……。

「いやいや、ちゃんと図をしていましたよ？でも逃げていたら何故かここに着いたんですよ？これは誰かの陰謀に決まっている。ああ、俺を見張っていた天狗よ。俺に癒しをくれツエー！」

俺は少女に近づいていく。もう癒しがなければやっていけない。ああ、その可愛らしい体に抱きつきたい……。

「天魔は私が潰すって言ったのに……まあいいわ。やっぱり私は傍観する方が向いてるわね」

「ほう、人間如きが天魔であるワシに戦いを挑むとは……面白くなってきたのう」

「は？」

で、天魔って言ったよねこの少女。ってことは……ぬわあああつああつあ！？俺は天魔と戦うことになるのか！？いやいやいや、無理無理無理戦えませんよ戦えませんよおお！？少女なんて戦えるわけがない！！というわけで……

「HEYゆかりん！バトンタッチだ」

『は？』

俺は八雲の元に戻っていき無理矢理バトンタッチする。二人は呆けた顔から急に怒り顔になった。

「ちょっと公平！どいう事よ！さっきまであんなに戦う気満々だったじゃない！」

「そうじゃぞ人間！ワシの期待を返せ！」

「・・・いやだッてさ。天魔だとは知らなかつたし、それに少女とは戦いたくないし・・・」

俺がそういうと二人とも駄目だコイツみたいな目で見てくる。天魔の目線は心地いいんだが八雲、テメーは駄目だ！つと、さてこの状況をどう收拾つけようか？

「やつと追いつきましたよ！」

何か後ろから射命丸の声が聞こえた。後ろを見ると射命丸とその他の天狗が向かってきていた。その時俺に電流奔る！これは使える！！

「八雲、俺の役目は囷だ。ということは後ろから来るアイツを引き付けるのが俺の役目だ。だからここは俺に任せて天魔を頼む」

「・・・今更格好付けても無駄よ？それに最後の言葉は死亡フラグよ？」

「別にアイツを倒してしまっても構わんのだろう？」

「はぁ・・・まあいいわ。じゃあそっちの天狗をよろしく。私は天魔のお相手をするわ」

フハハ！作戦成功！感謝するぜ射命丸とその他の天狗たちよ。お詫びと言つては何だが・・・

「即効で倒してやんよオ！！」

リミットを解除する。と同時に力が湧き出てくる。天魔はいきなり俺の力が上がったのを見て驚いている。

俺は地面を蹴り、射命丸に接近する。奴らが驚いているのがわかるがその隙が命取りなんだよぉ！！俺は化学反応を目の前で起こし爆発させる。射命丸だけが逃げ切れたようだが、それだけじゃあ駄目

だ。

「フハハハッハハ！悪いが……ここから先は幼女しか避けねえ
！！」

空気を圧縮させ蹴る。俺は空が飛べないからこうしないと空中にいる時の軌道が変えれないのだ。そこら辺は不便だと思う。

「喰らえイ！我が必殺の核融合！！」

掌に丸い玉が現れる。それは核融合を丸めて球にしたものだ。当たればただでは済まないだろうが、これは調節されてるので気絶程度で済むであろう・・・多分。

「ちょ！？それは流石に危ないですよ！？」

「大丈夫だ、問題ない」

「きや あああああああああああつ ああああつ ああつ あ
つ あつ ああつ ああ . . . ! ! ! ? ? ? ! ? ? !」

腹にぶち当たったが・・・うん、大丈夫そうだ。ただ単に気絶してるだけだ。泡吹いてるが。

そして戦闘が終了したのを確認した俺はリミットを素早くつける。と同時に口から血が大量に出るが大丈夫だ。今のでおよそ30秒くらい。これぐらいの出血なら座つとれば大丈夫だ。俺は地面に座る。俺の血が大量に広がってるが気にしない気にしない。

八雲達の方を見ると、八雲は予想通りという顔をしていた。天魔は驚愕していた。そりゃそうか。あんな短時間で終わるとは思ってもしなかったのだらう。

「ほら、こちらは終わったから後はそっちだけだ。ウエ、口の中が血の味しかしねエ・・・」

その後二人は激しい戦いを繰り広げた。だが境界を操る程度の能力が一枚上手だった。天魔の攻撃を殆ど避け、更に激しい攻撃を加えていく。天魔もスキマから出てくる八雲を先読みして攻撃していたのだが、その努力も虚しく敗れた。その後俺は天魔を治療し（決して疚しい気持ちはない）、俺も八雲に治療されて天狗は天魔が敗れたことを知り、大人しく人質を解放して妖怪の山に戻っていった。博霊の巫女もいつの間にか帰ったらしく俺も家に帰ることにした。久しぶりにリミットを解除したからテンションが上がり疲れてしまった。八雲からお礼と言われ札を貰った。何でも念じればいつでも八雲と会話できるとか・・・イラネ。

その後青年は天魔に気に入られるのだがそれはまた別のお話で・・・語られるか分からないが・・・。

第十一話

スペルカードルール。これはあの吸血鬼異変以降に制定された幻想郷で今一番流行っているルールだ。他にも色々と在るらしいのだが、流行っていないらしい。流行る流行らないの問題ではないと思うのだが・・・。

で、このルールを考えた我らが東方Projectの主人公、博麗霊夢（と、八雲紫）が考えたルールなのだ。が、博麗霊夢は大した異変のない日々には暇を持て余していたのである。それでいいのか博麗の巫女よ。だがその気持ちも分かる。霊異伝、封魔録、夢時空、幻想郷といった異変以降これといった異変がなかったのである。だがまたもや異変が起きる。それが怪綺談の異変だ。これを解決した博麗霊夢は自分がまだまだ力不足だと知り、修行に励むようになる。修行している姿を見たことないが。

そしてその修行の成果を見せる時が来た。皆様もご存知であろうあの異変。そう、紅霧異変だ。紅霧異変

の半月ほど前から赤い霧が発生。異変発生から数日前に霧が里を覆い、村人は外に出ることが出来なくなる。だけど杉本公平、寺子屋の先生こと上白沢慧音と藤原妹紅は外に出ることが出来た。そして異変開始直後には神社にまで霧が届き、外の世界にまで及びそうになっていたのだ。そして博麗霊夢と霧雨魔理沙は異変解決の為に出發したのである。

だが実はもう一人出發していた者がいた。そう、この物語の主人公である自称一般人、杉本公平だ。八雲紫は霧の事を見過ごしてはいけない、だけど自分が出ていったら面白くないという理由で、杉本公平に頼んだのだ。彼は即答で了解と伝えたと準備をして家を出ていったのだ。あの戦うことが嫌いな彼が即答したのはあの八雲紫も驚いたようだ。だがこの理由は後に彼によって分かったのだ。彼はこう語った・・・あの霧のせいで幼女と遊べない・・・と。

やあ、初めましての方は初めまして！杉本公平だよ。今更初めましてかよ！っていうツツコミは無しでお願いしますぜ。

現在、俺は八雲からこの霧の異変を起こしているボスを倒せと言う依頼を受けている。紅い霧・・・間違いない。東方紅魔郷の6面ボス、レミリア・スカーレットが引き起こしたことだ。さて、ここで問題だ。俺はこの依頼を無事に果たせると思うでしょうか？答えは・・・NOー！！

恐らくレミリアは幼女。俺の便利な第六感が告げているのだ。レミリアは幼女だと・・・！もう俺はGT（Gentleman ty pe）と名乗ってもいいのでは？まあそれは置いて。相手が幼女だから俺は戦えるはずもない。だから俺は霊夢の手伝いをするぜ。え？何で霊夢を知っているかって？まあ原作知識って事もあるんだけど、実は俺、霊夢の母親に霊夢を紹介されたんだよ。あの時の俺は紳士的な振る舞いでエスコートしてあげたから高感度はグングン上がったはずだ。

数回可哀相なものを見る目で見られた気がしたが気にしない。どこるか俺はバッチリと受けとめた。それくらいの包容力がないと紳士とは言えないのだよ！紳士は正義・・・いい時代になったものだ。

閑話休題

で、今は周りが霧で視認するのは不可能なくらい濃い。だが俺はGTのお陰で迷うことなく一直線で紅魔館を目指している。偶に妖怪などが出てくるが俺の姿を見ただけで逃げてしまふ。恐らくは俺が人里の英雄だと知っていたり噂で聞いたりしていたのだろう。いや、普段は英雄じゃないですよって言うのが当たり前なので、英雄という言葉は鬱陶しく感じていたのだが、こんな所で英雄と言う肩

書きに感謝するとは……。っと、急がないと日が暮れてしまうな。こっからはランニングしながら行こうか。

青年独走中……

走っていたら湖に着いた。ああ、これがあの有名な湖か。確かここには色々な妖精が住んでいるという噂を聞いた。原作だここでチルノが出てくるはず！

「チールーノーちゃああアアアアアアアアん！！」

多分生まれて初めてこんな大声出したと思う。が……。周りはシーンという擬音が似合う静寂のみ。俺のGTにも反応はない。クッ、仕方ない、時間もあまりないことだしチルノを探すのはまた今度にしようか。アア……。チルノニアタカツタナア……。俺はトボトボと歩きながら紅魔館を目指すことにした……。

青年悲愴中……

というわけで見えてきました紅魔館。途中妖精に襲われたがその口リロリしい姿に感動を覚えて思わず抱きついてしまった。そしたら弾幕を放たれて逃げてしまったのだ……。紳士の俺がここまで理性を無くすとは妖精とは恐ろしい存在だ。多分人外の中では（萌が）一番強いだろう……。っと、そうこう説明しているうちに門が見えてきましたよ奥様！あらいやだ、門の前で人が倒れていますわ！まあ！紅魔館は門の前で人が倒れているのが普通ですか？危ないぜ

マスね！！なんていう下手な小芝居はいいとして、倒れている人の元まで行く。

するとそこには幻想郷には似つかわしくない服を着た女性が倒れていた。その服とは・・・チャイナ服だ！ズボンを穿いていたら色気すらないが、ズボンを穿いていなかったらその色気は数十倍増すと言われている伝説の中華人民共和国の伝統衣装！！そしてこの服を着ている原作キャラと言えば・・・紅美鈴ほんめいりん！！だが彼女は気絶しているようだった。どうやら服が切れたりしている事から弾幕ごっこでやられた後と言うことだな。だがこれは紅魔館に入れる絶好のチャンス！と、いうわけで・・・

「お邪魔しまアす」

門をくぐって入り口であるだろう立派な扉を開け、館に入る。外から見ても真っ赤だが、中はもっと真っ赤だな。ちよつと気分が悪くなるなオイ・・・。そして今、どうやらどこかで弾幕ごっこが行われているらしい。何故なら遠くからドゴーン！やらブワアアアア！！って言う音が聞こえるんだ。つまりそつちとは逆方向に行けば戦わずにすむってことだ！出来るだけ戦いは避けたいしな。俺がたとえ幼女を愛する紳士だとしても、流石に女性とは戦いたくない。え？射命丸とかにはおもいつきり技をくらわしてたって？・・・空が青いな。

つてあれ？紅魔館つて確かあの十六夜咲夜が能力を応用して広くしてんだよね？で、さっきから階段を上がっても上がっても最上階につく気配が見えないのだが・・・。ハッ！？さては十六夜め、侵入者が入ったとかで空間そのものを逆にしやがったな！！って事はだ・・・このまま上に行けばあのフランドール・スカーレットと戦うことに！？まあフランも幼女だしいいと思うが、流石にまだ死にたくない。だから俺は今度は階段を降りていったのである。

青年下降中・・・

ああ、俺はどうやらアホなようだ。目の前には大きな鉄の扉。その先には禍々しい空気を感じ取れる。いや取ってしまうといったほうがいいか。ヤバイ、汗がダクダク出てきた。足も震えてやがる。本能が逃げろ、逃げろと危険信号を出している・・・！速くここから離れないと！！しかし運は俺を見放したようだ。

「ソコに誰かいるの？」

その声が聞こえた瞬間、勢いよく走り出す。だが時すでに時間切れ。後ろからドゴオン！という音が聞こえるやいなや、鉄の扉が飛んできたのだ。俺は急いで右に緊急回避をして辛うじて避ける。すぐさま体制を整え走り出そうとした瞬間、俺の左手を誰かが掴んだのだ。心臓がドクンドクンと脈打つのが分かる。ああ、この音は外にも響いているんじゃないのだろうか。それくらい大きく感じたのである。俺はまるでブリキの人形のようにギギギ・・・と首を曲げる。そこには幼女じゃなく、ボン、キュ、ポーンなスタイルをした見知らぬ女性が出た。ええ？誰ですかこの女性？原作だといなかった・・・つて――

「まさか・・・」

見覚えのある帽子、見覚えのある金髪、見覚えのあるサイドテール、そして一番見覚えのある・・・翼膜ではなく宝石がついた羽。もうこれだけそろえば分かるだろう。だが俺は認めたくなかった。ここで原作と違うなんてあまりにも残酷だろ。だって・・・だって！！

「フランドールがこんな大人っぽい訳ないだろ——————！！！」
「！？」

俺がいきなり大声出したのに吃驚したのかいきなり俺の手を握り締めてきた。ただ単に握り締めたのならいいが、こうメキメキという音が出てたら――

「痛いわボケエ！！」
「きゃっ！？」

振りほどいてしまっただろ！ってヤベ・・・ヒビ入ったんじゃね？手が凄く痛いんですけど！！

「オイテメエ！初対面でいきなり手を壊そうとするのは「煩い」のうわア！！？」

コイツいきなり弾幕放つてきやがった！？しかも顔面にだぞ！？でも顔面じゃなければ当たってたかもしれないか・・・僥倖だったな。

「はぁ、折角新しい遊び相手が来たと思ったら・・・こんなに煩い玩具じゃないわね」

「なら俺は帰りますね^^お疲れ様でし「待ちなさいよ」グヘエ！？」

ちょ！？く、首が絞まってる・・・。あつ、意識が・・・あれ？目の前に川があるぞ？おや？川の向こうに霊菜がいるぞ？久しぶりだし話したいこともいっぱいあるからな。よし、この川を横切るか！ってどうした霊菜？そんなに慌てて。まるでここが渡ろうとした瞬間川に引っ張り込まれて二度と浮かぶ事が無いような三途の川を渡

らせまいと必死にジエスチャーで伝えて

「ああ、人間だとこれくらいの力でも壊れるのね。脆い種族ね」

「グハッ！？ゲホッゲホッ！！？あ、あれ？俺は一体何を・・・？」

「独り言をブツブツ言ってたわ」

「ふーん、日常茶飯事だな・・・ッて、何で俺の首を絞めたんだよ！」

「アレは不慮の事故よ。それより折角ここまできたら遊んでいきなさい」

「ハッ！冗談も大概にしろ！！俺は幼女にしか興味がないんだ！！大体こんな所で油を売ってるわけには」

「まあまあ、そういわずに」

「ちょッ、腕を掴むな！痛い痛い！！アーッ！？」

俺はズルズルと引き摺られていき、途中で腕の関節が外されたが（戻してくれたが）、先ほど鉄の扉があった部屋まで拉致られた。ああ、この部屋にはどんな処刑道具が・・・って意外や意外。そこには綺麗なシャンデリア。豪華なベッドに周りには色々なヌイグルミがある。部屋は意外と片付いており、真ん中には高そうな机があった。その前に俺は無理矢理座らされた。普通の人ならここまでされれば喜ぶだろう。だがしかし、俺はフランドールから滲み出てる狂気を感じ取っているのだ。ハッキリ言ってやばい類だ。狂気に関してはあの風見幽香よりも上だと思う。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。私の名前はフランドール・スカーレット。フランって呼んでくれればいいわ」

「俺は杉本公平だ」

「で、何して遊ぶ？」

「遊んでる時間なんてないんだが・・・」

「それは嘘ね。態々私に会いにきたんだから目的は絶対にあるはず

よ」

「ただ単純に迷っただけだ」

「それも嘘ね。ああ、そうか」

「あ？」

「私に求婚しにき」それは確実にない」即答しなくてもいいじゃない！」

何だ？何なんだこのフランドールは？外見も中身も全くの別物だぞ？だが禍々しい狂気等はおそらく原作基準。それが大人な分和らいでいるか……。逆の場合もありえるが……。

「つまんないわね！」

「つまんないッていわれてもな……。ああ、アンタの姉さんか従者に遊んでもらえばいいじゃん」

「……。お姉さまも咲夜も私に構ってくれないの。いや、私を恐れて近づかないっていうのが正解ね」

「ふーん、お前も苦労してんだな。なら……。ほらよ」

俺はバッグから俺お手製おにぎりを出してフランにやる。さっきの緊急回避のせいで若干つぶれているが、味に変わりはないのでよしとしよう。

「これは？」

「おにぎりっていう米を握った食べ物だ。俺の飯として二つ持ってきたんだが、まだそんなに腹へってないし一つやるよ」

「ん、ありがとう」

早速おにぎりを包んでいる葉っぱを取り、かぶりつくフランドール。よほど腹が減っていたのか、ガツガツと食っている。俺もおにぎりにかぶりつく。うむ、我ながらいい出来だ。やはりおにぎりには梅

干か塩だな。お茶も用意してたので取り出して飲む。フランドールも飲みたいと言ったので渡すと全部飲みやがった！おいおい、全部飲むなよ・・・帰り大変だろーが！

「ふー、美味しかったわ、ご馳走様」
「お粗末さんでした」

俺がゴミを片付けていると、いきなり紅魔館が揺れた。俺はバランスを崩しそうになるが、何とか踏ん張った。フランドールの方を見ると浮いていた。うわっ、せこ！

「今のは・・・」

「きつとお姉さまが侵入者と弾幕ごっこをしているんだわ。・・・楽しそうでいいなあ」

「残念ながら俺は弾幕ごっこが苦手で雑魚だからな。お前の相手は出来ない」

「そんなの見ただけで分かるわ」

「が、今行われている弾幕ごっこに混ぜさせることは出来る」
「えっ？」

フランドールが驚いてこっちを見る。俺はニヤリと笑って

「ただし相手をするのは侵入者ではなく、お前の姉を相手しろ」

「お姉さまの？」

「あア。お前は姉には鬱憤たまってるんだろ？ならここで晴らしてしまえよ」

「・・・・・・・・・・分かった」

「なら善は急げだ！いくぞー！！」

「あっ！待ってよー！」

しめしめ、これで俺は誰とも戦うことなくこの異変を終わらせることが出来る！それにここで姉妹喧嘩でもさせておけばお互いの主張も言い合うことが出来て今よりは仲良くなるだろ。姉妹は美しくあるべき！ドロドロ何て俺は嫌だからね。とばかりが俺にもきそうだし。さて、今日は意外と早く終わりそうで良かったよかった。

先頭を走ってた青年は場所が分からなく、結局フランドール・スカーレットに案内されてしまうのはここだけの話だ。

第十一話（後書き）

この世界の幻想郷はロリの比率が低い設定です。ですから原作キャラが大人びてたり、逆にロリになってたりすることがあります。ご了承くださいもらえれば嬉しいです。

第十二話

レミリア・スカーレット。かのツエペシュの末裔だと自称している。ツエペシュと言えばドラキュラのモデルともなったブラド・ツエペシュが有名か。モデル、と言われたら何だモデルかよって思うかもしれない。が、吸血鬼は弱点は多いが、それを差し引いても最強と名高い種族だ。何故最強なのか？それはデタラメな身体能力と半不死という二つのチートが合わさっているのだ。つまり、半不死や弱点などを差し引いた強さがブラド・ツエペシュの強さなんだろう。後は串刺し公という恐ろしい肩書き。敵味方を含めて『一人』で約1万人以上（敵味方の処刑や戦争合わせて）も突き刺したという。これだけ揃ってればドラキュラのモデルになったのも頷ける。

彼女がどのような経緯で幻想郷に来たのは知らないが、恐らくは幻想郷最強の一角だろう。ただ惜しむらくは彼女が自分勝手なのだ。そのせいで退治されるとは知らずに・・・

激しく戦闘をしているレミリア・スカーレットと博麗霊夢。紅い月が二人に月光を浴びせまるで幻想のよう^{ファンタジー}に綺麗な光景が出来ている。・・・爆発音などがなければの話だが。

「いい加減にしつこいわね！早くやられなさいよ！」

「くっ、人間風情が調子に乗るな！」

片方は誘導、片方は直線的且つ色々なところにはら撒いている。だがレミリアには誘導弾はグレイズしなければ避けられないが、霊夢は

胡散臭い回避で一撃も当たっていない。

「ならこれでどう？神罰『幼きデーモンロード』」

レミリアの周り、色々なところからレーザーが放たれる。そしてレミリア自身も弾幕を様々な場所と霊夢目掛けて放つ。だが霊夢も負けてはいなかった。胡散臭い回避が更に胡散臭くなり、絶対当たってるだろ！？ってツツコミが繰り出されても可笑しくないようなグレイズをしている。そして難なくスペカクリアしていくのである。その後レミリアの出すスペカを霊夢もスペカを駆使して乗り越えていったのだ。

「流石に吸血鬼ね。しぶといじゃない」

「貴女も流石ね……。こんなに強い人間と戦ったのは初めてだわ。でも所詮は人間、吸血鬼である私に敵うはずないわ」

「ふーん、でも勝つのは私だけどね」

「へえ、人間風情がよく言うわね」

お互いニヤリと笑いあふ。その時だった。二人の間に紅い弾幕が通り過ぎる。それと同時にレミリアと霊夢は禍々しい狂気を感じた。そしてこの狂気の持ち主を知っているレミリアは驚愕した。

「何故、何故貴女がここにいいのかしら……。フラン！」

「ウフフ、お姉さま、お久しぶりですね」

微笑むフランドール。だがその目には狂気を孕んでいる。

「私の質問に答えなさい！」

「はあ、セツカチですねお姉さまは。まあ話しましょうか」

フランドールは何故ここにいるのか、どういう経緯でここに来たのかを話し初めた。杉本公平の名前が出ると霊夢が驚いていた。と同時に彼は今どこにいるのか気になった。だがその答えはすぐ出る事になる。

「で、公平は今咲夜を負かして扉の前で待機しているのよ」
『え?』

霊夢とレミリアの声が重なる。それもそうだ。十六夜咲夜は霊夢に負けてところどころ怪我をしている。だがそれでも普通の人間に負けるはずがない。それは主であるレミリア・スカーレットも、実際に戦った博麗霊夢も分かっている。ならどうやって勝てたのか?それはフランドールが手伝ったのもあるらしいが、咲夜のスペルカードを避けまくったらしい。それはまるで実際に見たことがあるかのような動きだったと。

「・・・フラン、その男性を呼んできなさい」
「えー、面倒だわ」
「いいから呼んできなさい!」
「分かったわよ・・・」

渋々と彼を呼びに行くフランドール。そしてレミリアは霊夢に話しかけた。

「博麗の巫女・・・だったわね。聞きたいことがあるのだけど・・・」
「霊夢でいいわよ。で、何?」
「フランの話に出てた杉本公平って何者なの?」
「そうね・・・話したことはあるけど、普通・・・よりはむしろ変態ね」

「変態・・・」

「そう。他には里の英雄とも呼ばれているわね。本人は中堅妖怪すら勝てないって言ってるから尾ひれがついたものだと思うけどね」

「そう」

なら益々わからなくなっただわね、とレミリアが思った瞬間、再びドアが開いた。そこには先ほどのフランドールと後ろからはどこにでも居そうな男性が見えた。そして彼がレミリアを目にして微笑み・

「やア、お嬢さん。私と月を見ながら熱い夜を過ごしませんか？」

開口一番にそう言い放ったのである。

つてさあ、流石に終わった後気絶したんだぜ？どこまで無理してたんだよって言う話した。殆どの家事は十六夜がしてるって言う話だし、レミリアが可愛そうな目にあうのはいただけなので手当てしてるというわけだ。決していやらしい気持ちなど微塵もない。包帯などは事前に持ってきていたので役立った。やっぱり治療道具は大事だね！自分にも相手にも使える最強の道具だね！

「はア、でも俺の分がなくなっちゃった・・・」

そう、十六夜の怪我が思ってた以上だったので包帯や消毒液等々が無くなってしまった。まあ俺が怪我しなければいいだけの話か。さて、他にすることも無くなってしまった。しかし何もしてないと眠たくなってしまう。流石に俺も疲労が限界に近い。それもそうか朝からランニングで紅魔館まできて、禍々しい狂気を間近で浴びせられ、更に十六夜との戦闘。ホントよくここまで持つてるよ俺。長生きしているからかな？

とその時ドアが開いた。そこから現れたのはフランドールだった。あれ？案外早いな。戦闘音もしなかったし、まさか話し合いで解決したのか？ならそれはそれでいいことだ。

「早いな。もツと時間がかかると思ってたぞ」

「お姉さまが公平を呼んで来いっていうから戻ってきただけよ」

「は？何で俺を呼ぶ必要があるんだ？」

「さあ？お姉さまの気まぐれじゃない？」

「気まぐれ・・・ね。まあいいか、分かッたよ」

俺はバッグの中から薄い毛布を取り出し十六夜にかける。風邪引いて体調崩したら嫌だしな。

「意外と優しいのね」

「ただの気まぐれさア」

俺はフランドールに続いて部屋に入る。だがそこには誰もいなかった。ってフランドールが先に進んでいく。俺は遅れないために慌ててついていくとコテージにでた。そこには浮いているレミリアと霊夢がいた。やはりレミリアは幼女だった。クフフ、久しぶりに興奮してきたアアアアアアアアアアア！さあ、俺の言葉と微笑みに堕ちるがいい！

「やア、お嬢さん。私と月を見ながら熱い夜を過ごしませんか？」

辺りが静寂に包まれた。あれ？俺的には決まっていたと思っているんだが……。レミリアの目も霊夢の目もフランドールの目も冷たい者を見るような目で俺を見てくる。ハッ！？ま、まさか熱い夜って言うのを変な意味で捉えてしまったのか？俺はただ単に月を見ながら紅茶を飲んで笑いあいたいと思って言っただけなのに！！

「霊夢の言ったとおり変態ね……」

「こんなのが里の英雄って……」

「やっぱりお姉さまのような幼女が好きなんだ……」

「好きがッて言ッてくれますねエ！！」

酷すぎる！別に幼女が好きでもいいじゃないか！昔の人たちは10歳前後で結婚してたんだぞ！？なら俺はその昔の人の血を色濃く受け継いでいるだけなんだよ！なのに幼女が好きってだけで俺がこんなに言われなければならない！

「クッ、フランドールのお姉さんに何言われても快かゲフッゲフッ！……別にいいが、霊夢とフランドールは許さん！」

「変態に何言っても逆効果ね」

「・・・やっぱり」

「変態ではなく紳士といってもらおうか」

「同じ意味でしょ」

「やっぱり・ねえ・・・み・・・いんだ」

「否！断じて違う！変態はただ単に変態だが紳士は女性、俺の場合は幼女だが、に優しく親切に変態なだ「やっぱりお姉さましか見てないんだ！」くぁwse d r f t g y ふじこ1p!？」

いきなりフランドールからプロのアメフト選手も吃驚するほどのタツクルを腹にくらった。声にならない叫びを上げながらガシャーン！というコテージの窓ガラスを粉碎し、部屋の床に勢いよく叩きつけられた。

「ガッ!？」

「やっぱり・・・やっぱり私に優しくしてくれたのも、私におにぎりをくれたのも全てはアイツに会いたかったのね・・・」

「フ、フラ・・・ン・・・ド・・・ル？」

「誰も私を恐がり、誰も私を見てくれず、誰も私を好きにならない・・・。公平だけは会った時は恐怖で震えていたけど、それでも私の話し相手になってくれていた。でも・・・それは全てお姉さまに会うため・・・」

フランドールの腕が俺の首元まで伸びてくる。抵抗しようとするが、あまりの痛さで身体が動かせない。どうやらどこかの骨が折れたらしい。どこかは分からない。何故なら全身痛いから。

「でもおにぎりは美味しくて温かった・・・。だから、一思いにコロシテアゲル！」

「ウー!？」

狂ったような笑みで俺の首を絞めてくる。く、苦しい。流石に俺は
不老不死ではないのでこれは確実に・・・死・・・ぬ・・・

俺はここで意識が途絶えてしまったのだ・・・。

第十三話

フランドール・スカーレット孤独である。親にも姉にも幽閉され、狂気を頑張って抑えても溢れ出してしまう狂気。皆が恐れ、彼女の周りには普通に接してくれる人はいない。そんな彼女に彼、杉本公平は現れた。彼は最初彼女の狂気に恐怖し、逃げた。それを見た彼女は、またか、と思い追いかけた。するとどうだろう。彼女は直感的に覚ったのである。彼は彼女自身を恐れているのではなく、狂気を恐れているのだと。そこから彼女は共に話し、共に飯を食った。彼は私を見てくれる。彼なら私の味方になってくれる。だがそれも崩れ去ってしまう。正確には彼女の思い込みの激しさだ。裏切られたと思った彼女はせめて死体を自分のものにしようとした。ただそれは叶わなかったが・・・。

――――

「霊符『夢想封印』！」

遠くから聞こえた霊夢の声。それと同時に光がフランドールと『俺』にぶつかってくる。又ギヤアアアアアアアアアッアア！！？

「邪魔ヨ！」

痛みで意識が戻った俺はフランドールを見る。そこには最初会ったときよりも禍々しい狂気が虫みたいに蠢いている。それと同時に弾幕を張るフランドール。原作よりもより凶悪に、よし最凶に。って

弾幕がこっち向かってきてるうう！？よ、避けなきゃって痛い痛い
イタイタイイタイイツイイツイイツイイ！？痛みに気を取ら
れて、気がつくと目の前に弾幕が迫っていた。ああ、もうだめだ・
・と思った瞬間景色がガラリと変わった。そう、今までは地べたに
這いつくばっていたのだが、今は空中に浮いている。しかも誰かに
抱えられている。誰だ？と思い顔を見てみるとそこにはドアの前で
寝かせていた十六夜咲夜だったのだ。そして十六夜の後ろには霧雨
魔理沙、紅美鈴、パチュリー・ノーレッジがいるのだ。

「大丈夫ですか？」

「こ．．．れが大丈夫．．．．．夫に見．．．える．．．か？ゲフ
ッ！？」

口から血が吐き出される。あー、これはもしかしてアバラが折れて
肺が何かに刺さったか．．．？って、俺は何故こうも冷静に分析で
きているのか．．．。ああ、多分この冷静さが俺が唯一一般人から
かけ離れている点だろう。でも冷静でよかった。冷静じゃなかった
らとつくの昔に死んでいるだろうし。

「咲夜！急いでその人間を渡しなさい！今すぐ治療を開始しないと
手遅れになってしまうわ！！」

「分かりました」

俺はパチュリーに渡され、地上に降ろされた。どうやら今すぐ治療
しないと大変なことになるらしい。本来なら図書館でやるものとか
何とか．．．。

フランドールの方を見る。禍々しい笑みを浮かべながら霊夢、レミ
リア、美鈴、魔理沙、十六夜を相手していて押しているのは流石に
ヤバイと思った。あの5人があんなに押されるとはフランドール恐
るべしだ。つかフランドール原作より強くな？アレかな、大人っぽ

くなってるから強くなってるっていうパターンか？ってイタイイタイ！？パチユリーさん！？ソコは物凄く痛いって更に強く押さないでエエエ！？

「おい、霊夢。吸血鬼ってこんなに強いのか？」

「多分このフランドールっていう吸血鬼が特別強いよね」

「フランは溢れ出る狂気を抑えていたわ。でも抑える必要が無くなつた今どれくらい力が上がったか分からないわ」

「フラン様は時々暴れます。ですが、ここまで強いのは初めてです」
「接近戦だと私が上のはずでしたけど、技量を力でカバーしているのか私の気を貫いてきます・・・！」

皆苦戦しているようだ。弾幕ごつこなどお構い無しに打撃等も入れられていく。だがフランにはそれがまるで効いていないように見えた。いや、実際に効いていないんだろう。霊夢達がスペルカードを発動してもそれをフランドールのスペルカード一枚で一蹴されていく。これ、勝てる奴いないんじゃないか？

「ん？あれ？これは何かしら？」

「そ、それ・・・に触・・・るな！」

間違っても壊されたらたまつたもんじゃない。リミット解除に関しては俺の指で押さないと発動しないから安心だがな。

「装置・・・みたいね。このボタンは・・・押してみても反応はないわね」

「や・・・めると・・・言つて・・・るだ・・・ろ！！」

ちよつとイライラしてきた。こんなピンチの時に好奇心なんて押さえ込めよ！大体これはあの天才永琳が造った補助装置だぜ？魔女た

るパチュリーとはベクトルが正反対だからわかる筈がないだろ！

「私が押しても反応しない・・・ということは本人が押さないと反応しないってことかしら」

「ッ！？」

「その反応、正解ってわけね。でも安心しなさい。押したいところだけど流石に許可を貰わないと私は押さないわ」

クソッ！ニヤニヤしゃがって、ウザイ……。だがここでリミットを解除したらまた閻魔様に何を言われるか分からない。説教は確定だな。後は寿命を奪うために家畜などを殺さなければならぬ。うええ、首ちょんばとかしいといけないからグロイんだよなあ……。

「パチエ、遊んでないで貴女も手伝いなさい！私達だけだと勝てないわー！」

「悔しいが吸血鬼の言うとおりだぜ。私達の攻撃が効かないとなると流水を出せるパチュリーしかダメージを与えることが可能なんだぜ」

「打撃も効かなくなると残りは弱点を突くだけよ。だけど・・・」

「私の銀のナイフは狂気の波に跳ね返されてしまう・・・」

「アッハハハハ！皆、皆壊レテ終エッーーーーー！！！」

『くっ！？』

どうやら思っていた以上にフランドールは強かったらしい。流石にこれはリミット解除しないといけないような気がしてきた。くっ、こうなったら説教覚悟でいくしかないなあ！！パチュリーも戦闘に加わりうとしているし早めに言うか。ちょうど話せる位には回復してるしな。

「オイ……」

「何？」

「俺の首についている赤いボタンを俺の指で押せ」

「……いいの？」

「緊急事態だからな。仕方ねえ」

「分かったわ。でも後悔しないことね」

パチュリーが俺の手を取る。と同時に指を首元まで持っていき赤いボタンを押す。その瞬間に全ての怪我が治り且つ力が湧き出てくる。パチュリーは俺の怪我が全快したのに驚いているが今はそんなことを気にかけている余裕はない。

俺はフランドールの方を向き、足に力を込め……蹴る！ただの蹴りではない。ベクトル変換で様々なベクトルを操ったんだ。それはもう音速とっていいほどのスピードだ。そして……

「余所見はいけねえぜ！」

『！？』

フランドールに突っ込む。感触からしてモロに当たったのだろう。だが……

「公平……貴方モ私ノ敵ニナルノ？許サナイ許サナイユルサナイ・
……！！」

ダメージはゼロだったようだ。おまけに腕を振り上げ俺に向かって振り下ろしてくる。だが残念。俺には全ての攻撃を受け付けないのだよ！！

俺に当たった腕はゴキ！という音が鳴り逆に骨を粉碎していく。それには流石にフランドールも痛かったのだろう。悲鳴をあげたのだ。

「アアアアアアアッアッアアアア！！？」
「悲鳴をあげてる暇なんてねエぞ！！」

俺は空中で一回転して踵落としを決める。ドゴオン！という音と共に地面に叩きつける。俺は更なる追い討ちのため、槍を数十本生成して叩きつけた場所に発射させる。そして突っ込んでいく。今の俺には誰も触れないだろう。フランドールには悪いが、本気でいかせてもらう！

――
霊夢たちは目の前の光景が信じられなかった。先ほどまで瀕死だった青年が、私たちが何をやっても効かず、押されていたのに、青年のいきなりの参戦で逆にフランドールが押されることになったのだ。誰もが予想だにしなかった光景。と同時に青年一人でフランドールを相手しているという事に悔しがる。それもそうだろう。人間が吸血鬼を、それも自分たちが傷つけることの出来なかった吸血鬼を青年が圧倒しているのだから。青年に残された時間も30秒。そろそろ物語りも終わりを迎えるだろう。それは意外な結末で……。

――
やはりフランドールは強い。俺がいくら攻撃してもいくら怪我を与えても瞬時に回復する。だけど流石にフランドールにも焦りが見えてきた。

「何デ・・・何デ私ノ邪魔ヲスルノ!?」

「あア?邪魔だア?俺は邪魔しているつもりはないね。ただ単に暴走してるお前に鉄拳制裁くわえてるだけだ」

「マタ意味ガ分カラナイ事ヲ言ウ!禁忌『フォーオブアカインド』!」

「4人になツたところで・・・意味ねエんだよオ!!」

一気に分身三対を屠る。その後ろから本体がレーヴァテインを出して切りかかってくるが、勿論反射して俺には無傷。その代わりフランドールの腕があり得ない方向に曲がる。が、もう痛み慣れたのか悲鳴はあげなくなっていた。

「ハッ!この短時間で成長するとはやるじゃんか」

「今ノハ褒メタノ・・・?」

「んア?褒めたに決まツてるだろ」

「・・・ソウ」

更に切りかかってきたフランドール。おや成長したと思っていたのにまた切りかかってくるとは・・・前言撤回かな?

「無駄だといって・・・グフツ!」

「アハハ!ヤット・・・ヤット私ノ攻撃ガ当たツタワネ!!」

俺はフランドールに斜めに切られた。なぜ?何故反射が発動しなかったんだ!?切られた後から傷が全快するが、更に切りかかってきたので、こっちは肉を切られて骨を絶つ思いで殴る。だが・・・

「グウツ!」

「フフフ・・・モウ公平ハ私ニハ勝テナクナツタネ!!」

腕を切られる。だが瞬時に腕も再生していく。しかし可笑しい。放射が通用してないなんて……。ここで俺はあることを思い出す。それはフランドールの能力だ。『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。これはどんなモノにも目があり、フランドールはそれが見えるらしい。それを自らの掌に移動させ握ると、その目の持ち主は破裂するとかいうチート能力だ。だがそれは目に関係することで能力には関係ないはずだ。だが万が一にも可能性があるならばそれしかない。

「クツ、能力か・・・!?」

「ソウ、私ノ能力ヲ応用シタノヨ!私ノ能力ハ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。ソレデ公平ノ意味不明ナ防御ヲ壊シタノ。ドウ?褒メテモイイノヨ?」

「・・・これは褒めるどころか抱きつきたくなくなるほどの成長振りだなアオイ!!」

「・・・・・・。本当?本当ニ抱キシメテクレルノ?」

「あア?この試合が終わったなら好きなだけ抱きしめてやるよ!!」

「これって告白じゃないの?」

「告白だぜ」

「告白ね」

「フランは人間なんかに渡さないわよ!」

「ああ、フラン様にも遂に春が来たのですね・・・」

「うう、フラン様に先を越されたああ・・・」

女性人がキャッキヤ言っているが何を言っているのか聞き取れないのでスルーさせていただこう。さて、ここにきて異常な成長をしたフランドール。これは流石にヤバイ。俺は手に化学反応を起こし、核融合をさせ、圧縮させ丸めた玉を出す。後10秒・・・これで決めるしかない!!

「フランドール、流石に俺も限界が近い。だからこれで決めさせてもらうぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かポツーとしているが何を考えているんだ？まあいい。俺はフランドールに突っ込む。フランは今だポツーとしている。決めるなら今がチャンスだ！だがこのとき俺はミスをしていた。それは・・・

「ウ・・・アアアアアッアアアアアア！？」

『！？』

フランドールの目の前まで来た瞬間、全身から血が吹き出た。同時に腕や足が千切れていく。そう俺はミスを犯していたのだ。それは、『能力の使いすぎ』だ。今までは俺はダメージを受けずに勝っていた。だが今回は違う。何回も何回も攻撃を受けその度に『原子を操る程度の能力』が傷を回復、もとい死んだ原子を新しく生み出していたのだが、これが原因だろう。莫大な演算をしている状態でさらにこれだ。脳のスペックをオーバーしてしまったのだろう。クツ、流石にこれは・・・死んだな・・・・・・・・。

傾く俺の体。足や手がないので踏ん張ることも支えることも出来ない。最後に見た光景は涙目で近づいてくるフランドールだった。

第十三話（後書き）

主人公初めての負け回です。この作品のフランドールは原作のフランドールの2〜3倍の強さで設定されています。ですから勝てるのは八雲紫か四季映姫、八意永琳くらいかなと。

第十四話

チュンチュンと雀の鳴く声がする。そして眼を瞑っていても分かるほどの光。ああ、これはどうやら朝のようだ。

ふと眼を覚ました俺こと杉本公平。見知らぬ赤い天井が最初に映った。おや？三途の川に行くかと思つてたがいきなり地獄とはこれいかに。だが、やはり地獄というのは血で染められているのか・・・くつ、俺の血も染めるのに使われるのだろうか。それは嫌だ！だが逃げようとしても体に激痛が奔り、動けそうにもない。オマケに何かに体がロックされているので逃げようにも逃げれない状況だ。

ロックを外したい所だが、いかんせんびくもしないし激痛のせいで力が入らない。首も動かしたいが今度ばかりは動けそうにない。ならば感触だ！と思つたが麻痺してるのか分からないが痛覚以外何も感じない。この状態は気持ち悪い。だって何かにロックされているが、その感触がないものだからロックされていると分かつているがロックされていないような感じになる。例えるなら食感も味もないゼリーを食っているかのよう。ああ気持ち悪い！

だが俺はここで気づいたのだ。何に気づいたって？それは俺の耳元からすうすうという音が聞こえているのさ。間違いなく俺の隣には誰かが寝ている！だが動こうとすると激痛が奔るから動けない・・・

。しかし俺のGTに反応しないということはレミリアの線は確実にない。そして十六夜、パチュリー＆小悪魔、紅美鈴は面識があまりないので可能性が低い。霊夢や魔理沙は恐らく帰っているであろう。となると消去法であのフランドール・スカーレットが俺の隣に寝ているのだが・・・それは流石にないだろう。だってあのフランドールだぞ？あんなに狂つて俺の事殺しにきたフランドールだぞ？もし隣に寝てるのがフランドールだったら俺はもう死んでいるだろう。だがもし・・・もし俺を生かしてくれてた場合、何故？という疑問が生まれる。うゝむ・・・分からん。

その時だった。部屋のドアがコンコンとノックされたのだ。この状況を見られては何を言われるのか分からないので寝たフリをした。

「杉本様、起きていますか？」

ノックをしたのはどうやら十六夜だったらしい。メイド長にこんなことがバレたら・・・と思うと恐怖で心臓がバクバクなる。必死に恐怖を抑え、寝たふりを決め込む。

「失礼します」

部屋に入ってくる十六夜。ヤバイ、またバクバクいつてきた。静まれ、静まれ俺の心臓・・・！！

「あら？またフラン様は杉本様の布団に潜り込んで・・・」

また？またってどういう事だ？って、え？またって事は俺は少なくとも丸一日は寝てたって事だよな？・・・遂に俺もここまで寝れるレベルに達してしまっただか。

「これで一週間連続ですね」

「んじけ！？（まじか！？）」

「！？」

一週間で寝てたのか俺！？まああんなだけ能力を使っただから妥当といえば妥当なのかな？でも一週間か・・・一週間もロリと遊べなかったのか・・・ああ、人里の女の子に早く会いたい、会いたいよお！！

「お、起きていたのですか？」

「wか、だpつrにdたmrかあdた（ああ、さっき起きたばツかだ）」

「・・・すいません、何を仰っているのか分かりません」

そ、そうだった。今の俺は補助装置が起動していないので、言語が滅茶苦茶なのだ。そしてこの事を知っている知り合いならともかく、知らない人がこの滅茶苦茶な言語を聞いたらどうなるだろうか。それは・・・

「ま、まさか後遺症が・・・」

「u t y k、とk s r gじゃkれん？（いやいや、違うからね？）」

当然このような反応を示す。まあ後遺症は合ってるけどさ、随分昔だぜ？いつか治ることを願ってるけど、あの永琳すら治せなかったのだ。だからもう一生治らないと思う。そして補助装置よ。起動するのが遅すぎるのではないか？こんな所で空気読まなくていいんだよ？だからさ、お願いだ。

「早く起動してくれエエエツエエエツエエ！！！！」

「！？」

ブツ！？急に起動するなよ！！確かにお願いしたけどさ、いきなりは止めてよ。ほら、急に治ったから十六夜が驚いていてではないか。（急に大声出されて驚いただけです）って、痛い痛い！？大声出したから全身が死ぬほど痛いイイ！

「だ、大丈夫ですか！？」

「グワアアアツアア！？ゆ、揺すらないでくれ！痛すぎるウ！！？」

又オオオオオオオオオツオツオ！？こ、このままだと意識がブラッ

音すら聞こえてくる。そして全身に意味不明な痛みが広がる。いや、痛みを超えてもう何も感じなくなってしまった。そして俺はそのまま意識を落としたのであった……。

青年気絶中……

アレから6時間ぐらいいは経ったであろう。何とか俺は気絶から回復した。だが身体は何も変わっていなかった。いや、むしろ酷く痛みが増した。そのことについては寝ている俺に抱きつきながら謝ってきた。なら抱きつくなよ！って言ったが無視された。そしてコレを他人から見ればイチャイチャしているように見えるだろう。そう見えても仕方ないだろう。だがしかし俺はイチャイチャしているつもりもないし、それに俺自身は相当嫌な顔をしながら鳥肌が立っていることだろう。現に今も現在進行形で鳥肌がたっているのだ。なのにフランドールは離してくれないし、十六夜やパチュリーはニヤニヤしてやがる。クソッ、唯一レミリアだけが俺を睨んでくれているのが救いだ（なんとなく雰囲気で睨んでいるのが分かる）。ああ、癒される……。

「何お姉さまの事見ているのよ！」

「いいいいいい、頬ほひッはるは！（痛い痛い、頬を引っ張るな！）」

「

「お姉さまに色目使ってる公平が悪いのよ」

「お前、頬を引っ張っただけでも全身に痛みが届けられるんだぞ？嬉しくない宅配なんだぞ？だから引っ張るな触るな離れる。そして俺は別にレミリアに色目を使ってるわけではない。ただ単に慈愛に満ちた感情を向けているだけだ」

「アンタに変な感情を向けられるだけで悪寒がするのに、更に色目

を使われるなんて・・・虫唾が走るわ」

なんて罵倒だ！こんな気持ちいゲフゲフッ！・・・酷い罵倒は初めてだ！つか何で俺レミリアに嫌われてるんだ？まあ理由は分かりやすいが・・・。大方フランドールが俺にベツタリなのが気に食わないんだろう。でもそこが可愛らしい。

「ふッ、まあいい。で、どうやってアノ酷い状態の俺を治せたんだ？ハッキリいつて俺は死んだと思っただぞ」

「それは私の治癒魔方阵のおかげよ」

「パチュリーのの？」

「ええ。と言つてもあそこまで酷い状態だと手足を繋げるのが精一杯だったけど」

いやいや、手足くっ付けた時点で十分凄えよ。しかも魔方阵だぜ？書くのに苦勞するだろ・・・。それに俺は魔力等がないから俺自身の魔力を使うことは出来ないはず。つまりパチュリーの魔力を使つたわけだ。手足をくっ付けるほどの魔力・・・流石に賢者は格が違つた！

「いや、手足くっ付けてもらったんだ。その時点で感謝してもしきれないよ」

「そう、私に感謝するのもいいけど、フランが嫉妬籠った目で貴方を見ているわよ」

「えエ？」

首を曲げることが出来ないのどんな目で見られているのか分からないが、冷や汗がダラダラ出ているのはなんとなく分かる。

「公平！公平は私と結婚するんだから浮気は駄目よ！！」

「ああ？浮気も何も俺は誰とも付き合ッてないし、それに結婚は一回までと決めてるんだ」

「一回なら私と結婚できるじゃない」

「いや、実は俺一回結婚してるから無理だぜ？」

「え？」

「だから、俺は一回結婚してるから無理なの」

[illegible]

皆してそんな驚く事か？この年だ。流石に結婚していると思つていても可笑しくないだろうに。それとも遠まわしに俺は結婚する相手がいらない奴だと思われてたのか？それは酷い・・・。

「こ、公平って結婚してたの!？」

「なのにフラン様に告白とは……」

「鬼畜ね」

「フラン、こんな男と結婚すると酷い目にあうわ。だからもう忘れなさい」

「いやいや告白した覚えはないからね？それに鬼畜でもないです。そして俺は結婚する気はないと何回言えば分かるんだ？」

くっそ、俺が動けないのを知って好き放題いやがつて。いいじゃないか俺が結婚してても！！

「……その女を殺せば私と結婚してくれる？」

・ ・ ・ ヤンデレですか？ 声に殺氣が凄いい籠ってますよ？

「いや、1000年くらい前にもう死んでいるんだけど」

「ああ言ってなかったな。俺は1000年以上も生きている一般人なのだ！」

ドヤ顔を決める。ふっ、気持ちいいくらい決まったな。

「年上……フッフ」

「それは一般人ではないのでは？」

「
・
・
・
いい研究材料ね」

「そんな……こんな奴が私より長く生きてるなんて……」

怪しい笑いをするフランに冷静なツツコミをする十六夜。パチュリ
ーに至つては俺を研究材料にするつもりなのか手をワキワキさせて
いる。レミリアはor zポーズで打ちひしがれている。そつからは
もう一騒動があつた。

フランは俺の服を脱がそうとするし、パチュリーは怪しい道具を俺に使おうとしてくるし、十六夜は傍観しているし、レミリアに至っては弾幕を放つてくる始末。それをフランドールが防ぎ弾幕ごっこを始める始末。十六夜もパチュリーも避難して、俺は一人戦場に残されてしまった。これは確実に巻き添えをくらうと思った俺は身体の痛みに必死に耐え火事場のクソ力を発揮し、紅魔館を抜け出したのだ。だが玄関で力尽きた俺はどうすることも出来ず、諦めたその瞬間、博麗霊夢が現れたのだ！何て都合のいい展開だと思ったが感謝したのだ。俺はわけを説明して人里まで送ってもらった。だがコレにより身体を酷使したせいか、痛みがより一層増して、喋る事も出来なくなってしまったのだ。

誰か・・・誰か俺に平穩をくれ
エエエツエエツエエツエエツ
エエ！！！！！！！！！！！

後日、人里で痛みに悶えながらも松葉杖で歩いている青年が有名に

なった。子ども達に悪戯されて痛みにも絶えている姿は英雄とは程遠かったのである・・・。

第十四話（後書き）

主人公はモテます。普通なのにモテます。ですが鈍感ではなく、更に自身が紳士なので口リ以外は拒絶します。

そしてもう二度と結婚しないと心に決めているので結婚はしません。主人公は基本運がいいです。運がなかったら死んでます。IFだととつくの昔に死んでいます。・・・。

第十五話（前書き）

会社が忙しい・・・

第十五話

やあ、杉本公平だよ。実は紅霧異変の時の痛みがまだ引いていないんだよ。引くどころか平行線を保ったままだ。だから俺はあの西行寺幽々子が起こした異変、春夏秋冬異変（だっけか？）を解決することは愚か、見ることにすら出来なかった。やはり原作の異変であるならば見たいと思うのは仕方あるまい。だがどっちにしろ俺は飛べないので冥界に行こうにも行けないのだが。

そしてこのままわけのわからない痛みを患ったまま松葉杖で生活するのにも限界がある。だが治すためにはどうすればいいか？そこで俺は思いついたわけよ！

そうだ、永遠亭へ行こう・・・

となあ！ならば思い立ったが吉日、早速準備をして寺子屋にいくとしよう。何故寺子屋か？それは永遠亭に行くには竹林を通らなければならぬ。だが竹林は地理等を知らないと確実に迷う、いや知ってても迷いそう。だ。ならどうするか？それは寺子屋に行けば竹林に住んでいるあの不老不死である藤原妹紅に高確率で会えるからだ。初対面だと頼みにくい、俺ともこたんは何回も会っているから気兼ねなく頼めるってものだ。

「さて、行きますかねッ痛エア！？」

立つだけで尋常じゃない痛さが襲いかかってくる。これは早めに永遠亭に行かなければ・・・。

青年移動中・・・

さあやつと着きました寺子屋。ここまで来るのに痛みを我慢しながら松葉杖でとぼとぼ歩く俺の姿はまるでリストラされたサラリーマンの様に哀愁が漂ってたに違いない。
さて、入りますかね。

「お邪魔します」

ガラガラと音を立てて入る。何時もなら上白沢さんが出てくるのだが今は昼。つまり授業中って事だろ。ならば俺はもこたんが居るであろう居間に向かう。途中上白沢さんと女兒に挨拶していく。そして居間の前についた。中から物音がしているから誰かいるのが分かる。恐らくもこたんだと思うが。俺は勢いよく襖を開け叫ぶ。

「もこたん、頼みたい事があるんだ！」

「っ!？」

「おや？」

俺が襖を開けた先にいたのは純白のパンティー一枚だけのもこたんがいた。白い肌に華奢な身体。胸があまりなく、だが可愛い少女らしさを引き立たせている。まあ、そんな感想は目の前の景色とともに脳内に保存して置いといて。

「もこたん、実はだね」

「で・・・」

「永遠に「出てけ!!」グボツハアア!？」

鳩尾にブローは止めてください・・・物理的な痛みと永続的な痛みが融合して体感したことのない痛みが俺を襲ったのだ。勿論こんなのに耐えられるわけもなく俺は気絶するのであった。

青年気絶中・・・

ハッ！？今何時だ！？ガバアツと起き上がった俺は痛みを我慢しながらも外を見る。おお、綺麗な夕日だね・・・って馬鹿！もう夕方っすか！？ぐっ！？・・・心の中でツッコんでも痛むのか・・・。

「あー、起きたのか」
「ンン？」

声が聞こえた方を見るとそこには気まずそうにしているもこたんがいる。

「スマン公平！お前が痛みを我慢しているのを知っているのに殴ってしまつて・・・」

「あー、あれは俺が悪かつたからかもこたんが謝る必要はないぜ。むしろ俺が謝らないといけないだろ。ごめんもこたん！代わりとしては何だが俺の裸を見せてやるよ」

「で、何か私に用があるんじゃないのか？」

スルーされた。だが顔がほんのり赤いということは完璧にはスルー出来なかったようだ。まあ裸を見せると言われたんだ、恥ずかしがるのが乙女な証拠ってやつだ。フランドール？あいつはダメだ。そんなこと言つた瞬間俺は食われる。勿論性的な意味でだ。

「ああ、実はこの痛みが治る気配が全然見えないので、前に風の噂で聞いた永遠亭に行けば治るかと思ツてね。でも竹林のせいで行けなくて・・・。そこで竹林に住んでいるもこたんに案内してもらお

うかと」

「永遠亭か……。永遠亭の道なら分かっているから案内したいんだけど……」

「何か問題があるのか？」

「ああ、実はその永遠亭の主と私は会ったらずぐ殺しあいする仲間だよ」

殺しあいする仲間とか滅茶物騒だなおい。ああ、そういえば原作でも殺しあう仲だとか。そしてその相手はあのかぐや姫、蓬萊山輝代だ。お互いに不老不死なので殺しても直ぐ生き返るが……。

「あー、そんなに気まずいと思うなら他の人に頼むが……」

「……いや、案内してやるよ。このまま行かなかつたら輝代に負けたみたいで癪だしな」

「負けず嫌いか、長年生きてるもこたんにも子どもな部分があつたんだね。まア外見少女だけど」

「うるさい!!」

ゴチン、と拳が振り落とされ俺の頭にクリーンヒットした。痛すぎるのだが……。だがやはり恥ずかしいのか顔が赤い。いや、これは怒って赤くなっている可能性もあるのだが。

「ならもうすぐ日が暮れるけど行くか？」

「それは構わないんだが一つ問題があるのさ」

「問題？まさかさっきの痛みが続いているのか？」

「いや、痛みは我慢できる。問題は……。俺が飛べないことだ!!」

俺がそう叫んだ瞬間、もこたんは何言ってるんだコイツ、頭可笑しいんじゃない？みたいな目で見てきた。ふっ、もこたんだから許してやるが口リ以外がそんな目で見てきたら殴るからな？恐らく返り討

ちにあうと思うが。

「飛べないって・・・お前この里の英雄とまで呼ばれてるだろ？なら博霊の巫女が飛べるならお前も飛べるだろ・・・」

「いやいや、俺は普通の人間だぞ？霊夢みたいな人間の中の非人間と比べられても俺が劣っているに決まってるだろ！そもそも人間は普通に飛べない！・・・まあ、俺が飛べない理由は霊力とかが全く無いのも関係してると思うけどな」

「ふーん・・・ならどうする？飛べないとハッキリ言っただけで時間かかるぞ？」

「大丈夫だ、答えはもうでている」

「・・・嫌な予感がするんだが」

俺はニヤリと笑う。そう、飛べない俺がどうやって永遠亭まで行くのか。それはもう一つしか方法がない。それは・・・

「もこたんが俺を背負って行けばいいじゃない」

「・・・冗談も程々にしろよ？」

「いやいや冗談ではないよ。第一たとえ身体の痛みがなくても飛べない俺にとってこの方法じゃないと行けないんだよ！分かってくれよもこたん！」

「分かっただけならまずその呼び方を変えろ！」

「嫌だ！この呼び方だけは死んでも変えん！！」

「なら死ね！！」

ギャーギャー騒ぐ俺達。その後上白沢さんに頭突きをくらわされたのは言うまでもないことだろう。それでもこたんもあーだこーだ言いながらも俺を背負って永遠亭まで送ってくれると言うのだからやはり可愛い。さあ、永遠亭に出発だ！！

第十五話（後書き）

[illegible]

第十六話

やあ、杉本公平だ。現在俺はもこたんに背負われて竹林を滑空中だ。と言つても俺に出来ることなど無いので絶賛暇を持て余している最中。いや、痛みを我慢しているので逆に暇ではないのかもしれない。もこたんと話したとしても余計なことを言つと落とされそうなので話せないし……。どうしようか？

「なあ」

「ん？」

色々と考えているともこたんが珍しく話しかけてきた。やっとデレたか。

「……不純な事考えてると燃やすぞ？」

「……カンガエテナイヨ？」

「はあ……。まあいいや。で、聞きたい事があるんだけど」

「なんだい？俺のスリーサイズかい？それとも俺の趣味についてかい？趣味についてだと一週間は聞ける覚悟がないと話さないが」

「そんなもん聞きたくもない。私が聞きたいのはお前は本当に何者なんだ？」

何者ねえ……。千年以上前に気づいたら見知らぬ森にいた一般人つて素直に言つても信じてくれないだろうしてさて何と答えようか。まっ、一先ずは疑問を疑問で返すか。

「なんでそんな質問を？」

「お前の噂は千年以上も前に聞いていてな。やれあのフラワーマスターを倒したのやれ鬼の四天王二人を倒したの色々噂が絶えなか

ったんだよ。なのに今日の前にいるのは全身が痛く、オマケに空も飛べないっていう普通の人間よりも駄目駄目な奴が本当に英雄なのかなって思ってたね」

「ああ、そのことね。それは全て運が良かったただけだ。実際に偶然が偶然を呼び、そのまた偶然が舞い降りてきたからこそ一般人の俺が今まで生きれたんだ。俺自身能力とかに頼りっぱなしだしな。俺は英雄英雄と言われ続けているが、能力等が無くなったら唯の雑魚で愚図な身体障害者の一般人に成り下がるのさ。それに普通の人間は空飛べねエよ」

「頑張れば飛べるだろ。それに身体障害者って・・・お前はどこも悪くないんだろ？なのに何故身体障害者になるんだ？」

「それは極秘事項です」
「・・・」

もこたんはム力ついたので速度を上げやがった。地味に恐かったのが俺は目を瞑ったままもこたんに抱きつく。決していやらしい目的があつたわけじゃないぞ？絶対だからな！ああ、良い匂い・・・。

青年少女移動中・・・

目を瞑っていたからどんな道を通ってきたのかは分からない。が、コレだけは言えよう。なんで・・・

「何でこんなにも畏だらけなんだー！！」

「うるさい！」

「熱ッ！？」

もこたんめ、俺が叫ぶと手に火を出してきやがる。しかもギリギリ

火傷しない温度だから困ったもんだ。流石に熱いのはゴメンだ。
で、何故俺が叫んでたと言うと罨が多すぎるからです。もこたん曰く悪戯兎が罨を張り巡らせてるとか。一般的に落とし穴が多いのだから念のため空を飛んでいても発動する罨があるらしい。デカイ丸太がこつち向かってきたときは死んだなと思ったがもこたんが軽々と受け止めたので思わず抱きついてしまった。勿論殴られたが。

「ほら、見えてきたぞ」

「んー？」

背中越しから見てみると立派な屋敷が竹林に建っていた。あれが永遠亭か……。原作だと術で広くなっていたのだが、そのままでも広そうだ。

「やつと子守から解放される……」

「子守って……あア、もこたんの中には俺達の愛の結晶アディイイ……！」

「ふざけた事言つと燃やすぞ……」

「イ、イエッサー……」

この目は駄目だ。マジで俺を燃やして殺す目だ。ここは下手に刺激したら間違いない殺される……。！流石にこんなことで死にたくないの自重することしよう。

つて、いつの間にか永遠亭の玄関まで着いたか。いやあ、空を飛べるっていいね。俺だと絶対一泊二日、高確率でのたれ死ぬと思う。

「おーい、誰がいるかー！」

もこたんがドアをドンドン叩く。暫し待つと足音が聞こえてきた。これだけ待つて事は寝てたのかな？だとしたら悪いことしちゃっ

たかな。

「すみません、お待たせしました！」

ガラガラとドアを開けて出てきたのはウサミミでパジャマ姿の原作キャラ、鈴仙・優曇華院・イナバだった。名前が長つたらしいので優曇華とでも呼ぼうか。

「藤原妹紅さんでしたか・・・また姫様と喧嘩してきたのですか？」
「いや、患者を連れてきたただけだ」

ホラ、といい俺を降ろす。松葉杖で何とか身体を支える俺。ヤベ、地面に着くだけで激痛っすか？何か症状悪化してないか？

「彼が患者ですか？」

「ああ、どうもあの異変から身体が痛いらしくてね」

「・・・分かりました。師匠のところへ案内します」

優曇華が案内してくれるらしい。俺は頑張って優曇華に何とかついていけるよう歩く。もこたんはもう帰ると思っていたのだが、俺が歩くのをサポートしてくれていた。うう、優しい子や・・・。

どんどん進んでいく優曇華。どうも彼女は人間を見下した感がある。さっきだって俺を見るなり見下したような目で敵意丸出しで俺を睨んだしな。いったい俺が何をしたと？ただ単に月の兎だっていうことで地上の生き物全てを見下しているなら俺は確実に相手しないだろうが。

「師匠、患者を連れてきました」

「・・・分かったわ。入りなさい」

襖を開けると薬品の匂いがしてくる。別に気にはならないが、こんな所で作業していると服とかに匂いがつくぞ。

「で、ウドンゲ。患者は誰かしら？」

「この方です・・・入ってください」

瞬間物凄い敵意が俺に突き刺さる。恐らく俺に対して敬語を使うのが嫌なんだろう。そして病人相手にそんな敵意ぶつけるなよ。体調が万全じゃない今の俺だと苦しい。お陰で倒れそうになるのをもこたんに支えてもらっている状態だしな。

「ウドンゲ、患者相手に敵意を出さない」

「・・・分かりました」

ちよつとだけ敵意が和らいだがそれでも敵意が俺を突き刺す。このアマ・・・流石の俺もキれるぞゴルァ！！

「ウドンゲ、貴女は一先ずこの部屋から出て行きなさい」

「ですが！」

「早く出て行きなさい」

「・・・分かりました」

部屋を出て行くときに俺を睨んできたが俺は無視する。俺の無視スキルは最強だぞ！たとえば隣でジェイソンが現れても無視することが出来る。あつ、ゴメン。流石に殺人鬼は無視できないや。

「ふう、ごめんなさい。あの子も悪気があってあんな態度を取っているわけじゃないのよ」

「だが患者相手にあの敵意は駄目だろ。あのままだと私がアイツを燃やしてたよ？」

「よう輝代、久しぶり」

「・・・本当に公平なの？」

「何言ッてんだよ。あアもしかして俺がとツクの昔に死んでると思ッていたのか？」

二人はコクリと頷く。

「だって人間の寿命だと40いつたらいいほうじゃない」

「それにその装置で更に寿命が縮まりますし・・・」

「あー、実は俺能力持ちでね。そのお陰で今まで生き残っていたのさ」

「能力ッてお前『向きを操る程度の能力』だろ？それで寿命が長引くとも思えないし・・・」

「そういやもこたんにも言ッてなかつたな。実は俺ッて能力三つ持ッてるんだよね」

『三つ！？』

三人がハモリながら驚く。そりゃ驚くだろうな。紫曰く能力と数だけは規格外らしいし。

「そう三つ。一つはもこたんが言ッたやつ、もう一つは・・・めんどいのでパス。で最後が『寿命と若さを奪う程度の能力』だ」

「パスって・・・まあいいわ。寿命と若さね・・・そのお陰で今まで生き延びたのね」

「あとこの八意さん特性の補助装置のお陰かな。これが無かつたら俺はもう死んでいたしな」

「役に立てていたようで嬉しいわ」

ワイワイと談笑する俺ら。だが大事なことを忘れていたのだ。そう治療だよ治療！早くこの痛みから抜け出したいんだよ！！

「あー、その八意さん。もうそろそろ診察していただけると助かるのですが・・・」

「ああ、そうだったわね。なら服を脱ぎなさい」

「分かりました」

スムーズに会話が進み服を脱ごうとする。だがそれに待ったをかける人物がいた。

「ちょっと待ちなさい！」

「あア？」

それは蓬萊山輝代だった。彼女は何故か手をワキワキさせていた。そして俺は嫌な予感がしたのだ。

「脱ぐのなら手伝ってあげるわ！」

「断る！」

「遠慮しなくてもいいわよ」

近づいてくる輝代。後ろに下がる俺。だが下がっている俺が不利だ。何故なら・・・

「ぐッ・・・」

「フッフ、もう逃げれないわよ？」

後ろには壁があった、そう、逃げる側は後ろに下がると壁があつて逃げ道がなくなるのだ。輝代は尚も近づき、遂には俺の服に手をかける。振りほどきたいが痛みのせいでそこまでの力はいらない。

「フッフ、私の難題をクリアしたご褒美をあげるわ」

「いらない！何か俺の貞操が危ない気がするからいらない！」

「遠慮しなくても良いのよ？こんな美少女と肌を重ねられるのならむしろ喜びなさいよ」

何をトチ狂ったこと言っただコイツ。しかも二人が見てる前でそんな事いうか普通。だがこのままだと確実にヤバイ。救世主が現れたのはその時だった。

「いい加減に・・・離れろよ!!」

もこたんが掌に炎を出しながらそう叫ぶ。おお、今の言葉は確実に嫉妬している！そしてこのまま輝代をぶっ飛ばしちまえ！なに遠慮するな、ヤツタレーイ!!・・・って、エ？その炎の大きさだと俺も巻き込みますよね？エ、エ!？ち、ちよつともこたん！誰も俺を巻き添えにしるなんて言ってない・・・ってアアアアアアアアアア!？向かって、向かってきた!?!?!?!?!?嘘だといってよもこたん!?!?!?!?!ん!!

「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!?」

最後に見た光景はピンピンしてる輝代とあつ、という顔をしたもこたんと頭をさえている八意さんの姿だった。八意さん、貴女も苦労人ですね・・・。そう呟きながら俺は倒れたのであった。

「や、やつちまった・・・」

「ちよつと・・・これは本格的にマズイわよ!?!」

「姫様、退いてください。ここは早く治療した方がいいでしょう」

「そ、そうね。妹紅も呆然としてないで運ぶの手伝って！」

「あ、ああ・・・」

その後も色々と騒ぎがあつたのだが（主に因幡てゐのせいで）、永琳の苦勞が増えるので割り合いさせていただく。

第十七話

やあ、杉本公平だ。あの後、八意さんによる治療により何とか一命を取り留めた。もこたんは涙目で謝ってきたもんだから思わず許しちゃった。まあ怒る気なんて端からないけど。だってこうなったのもあのアホ姫のせいだからな。アホ姫も謝ってきたが勿論最初は許さなかった。だけど泣いてしまったので仕方なく許してあげた。嘘泣きだったら絶対許さなかったが、どうやら嘘泣きではないので気に食わんが許してあげたのだよ！べ、別に泣いたから許したわけじゃないからな！本当だからな！！

まあこの話は置いて、俺の身体についてだ。どうやら火傷を治すついでに俺の身体の異変も見てくれたらしい。マジパネエぜ八意さん！で、俺の身体の異変なんだが・・・実は魔力が原因らしい。なんと俺の身体は魔力や霊力、妖力や神力等に対して体内に入った瞬間拒絶反応が起こるらしい。で、その魔力なんだが心当たりがある。そう、あの紅霧異変で俺が手足が千切れる瀕死に陥った時にパチュリーにくっ付けてもらった時だ。あの時、パチュリーは魔方阵で自分の魔力だけで俺の手足をくっ付けたと言っていた。つまりその瞬間俺の身体に魔力が入ってしまったというわけだ。

しかも八意さんが言うには日に日に無くなるどころか増えているらしい。このままにしておくとも魔力が増え続けて最終的には爆発するらしい。その話を聞いた瞬間顔が青白くなったのが分かった。もこたんも輝代も心配してくれたが俺は輝代の分までありがとうを言える余力がなかった。だがここで八意さんがある薬を取り出したんだ。それは・・・

「魔力軽減薬よ」

という飲んだらちよつとだけ体内の魔力が減る薬らしい。なんとい

うござ都合主義だ！だがそのご都合主義に感謝する。これで死になくなるぜ！え？朝昼夕の食後に一個飲んでだと？一気に飲んだら逆に増えるだって？で、完全に魔力が無くなるのに1年はかかるだと？・・・え？ってことは俺は一年間痛みに耐えろと？・・・

そしてそのまま意識はブラックアウトしてしまうのである。

ふと目が覚めると目の前は暗く、しかし月の光で部屋全体を見るこ
とが出来た。どうやらここは俺が寝ていた部屋らしい。装置も起動
し、立ち上がる。痛みはちよつとだけマシになつたがそれでも痛い
ことには変わらない。松葉杖を突きながら進み、窓を開ける。そこ
には景色の変わらない竹林。そして見上げると満月。だがふとこの
満月に違和感を感じた。ずっと見慣れた月ではなくどこことなく違和
感がある月。まさかこれは・・・

永夜異変。それは明けない夜が続いた異変。その主犯は俺の恩人、八意永琳その人だ。輝代を守るため、術で偽りの月を創り、月人を欺きその間に月人に感知されないようにするとかなんとか。だがその作戦も徒労に終わる。何故なら博霊大結界のお陰で月人からは感知されないようになっていたからだ（そうだったかは疑問に思うが）。1000年以上も生きてるから合っているのかどうか分からない。

が……。今回思い出したのも偶然だからな。

「ということは……」

俺の嫌な予感が働く。確か永夜抄は二人一組による四チームを選択していたはずだ。そして途中、魔理沙&アリスペア若しくは霊夢&八雲ペアが落ちるハズだ。後は十六夜&レミリアペアと魂魄&西行寺ペアか……。ハッキリ言くとチート集団ばっかだ。こんなのが襲いかかってきたら勝てる気が全然しないんですけど。

「フム、俺も見に行きたいんだが……。なんとなく巻き込まれる予感がするんだ」

だから大人しく部屋の中に居よう。ここにいれば全くもってあんぜ「邪魔するぜ」んじゃなかった……。

魔理沙が部屋の襖ごと突っ込んできた。そしてその後ろからさつき述べたペアが全員飛んできた。……って全員かよ!!!?

「お、公平じゃないか。久しぶりだぜ」

「よオ魔理沙と他の皆。俺はお前達と会いたくなかった」

「初対面なのに酷いわね」

「酷いもなにもそんなに大勢でこられてしかも戦う気満々な奴らに会って嬉しいと思うやつはいない」

「どうでもいいけど、私は早く異変を解決して神社に帰って布団で眠りたいのよ。だから……。覚悟しなさい!」

「ちょ!?!おまツ!?!」

いきなりアミュレットを投げてきた。しかもホーミング付き。俺はそれを避けようと思ったが如何せん身体に痛みが奔る。そのお陰でモ口に直撃してしまった。霊夢達もまさか当たると思っていなかつ

たのか呆然としている。と思ったら八雲と西行寺は笑いを堪えていた。

「クソツタレ・・・病人である俺に対して攻撃してくるとは・・・無念・・・・・・・・」

バタツと倒れる俺。勿論気絶などしていない。ここは気絶したふりをしてやり過ごそうと決めた。だがそうは問屋が卸さないそうだ。

「ほら起きなさい」

「ゲブフウ!?」

いつでえ・・・八雲のやつ俺の腹目掛けて弾幕を放ちやがった・・・。しかも威力が結構箆っていたし・・・。

「何すんだよ!」

「貴方が気絶したフリをするから悪いのよ」

やはりバレバレだったか・・・。とその瞬間殺気を感じたので右に飛ぶ。その瞬間、俺がいた場所には弾幕が降ってきた。しかも手加減など微塵もない弾幕だ。冷や汗をかきながら身体の痛みを無視して弾幕を放った人物をみる。それは・・・

「レミリアか・・・」

莫大な妖気を噴出させながらこちらを睨むレミリア。何故睨んでくるのだろうか。まあ恐らくはフランドール関係だと思うが。

「霊夢達、ここは私達に任せて先に行きなさい」

それは死亡フラグですぜレミリア。

霊夢達は俺の頭上を通り、恐らくだが八意さんか輝代、それか両方の場所に向かったんだろう。だがレミリアと十六夜は動かない。それどころかレミリアは殺気すら放ってくる。ぐっ、随分と嫌われてしまったようだ……。幼女に嫌われるなんて俺はどうしたら……。

「よそ見してる暇何てないですよ？」

声が聞こえた瞬間、俺は頑張って左へ飛び跳ねた。が、どうやら十六夜のナイフが俺の脚に刺さったらしい。悲鳴をあげたかったがレミリアも攻撃してきているのでその余裕すらない。それどころか身体の痛みのせいで避ける余裕すらないのだ。つまり……

「ウボアー!？」

直撃しますよねー。しかもほぼ全弾当たっている。痛い、痛くて意識が途絶えそうだ……。だが今ここで気絶するわけにはいけない。何故ならここで少しでも八意さんへの恩を返しておきたいからだ。普通の殺し合いなら八意さん、輝代が勝つだろう。だが弾幕ごっこだと負けと思う。しかも六対二だ。だがもしかしたら勝てるかもしれない。だがここで俺が即効やられると八対二になり確実に負けてしまう。ならここで俺が二人を足止めすればいい。微力ながら俺もこの異変に参加させてもらうぜ!

「幼ゝゲフンゲフン!……。レミリアを攻撃する気はないからな、十六夜だけ狙わしてもらうぜ?」

その瞬間俺の背後から五本の風槍が創りだされ、そのまま十六夜を狙い撃つ。だが……

「遅いわね」

レミリアに普通に壊された。チツ、流石に吸血鬼。割と離れたところに居てもスグ目の前に現れてくる。それに十六夜もだ。何だよ『時を操る程度の能力』とか。時を止める時点で反則だろ！ほら、今も目の前にナイフが現れたし。霊夢や魔理沙はよくこんなの避けれたな。という俺も頑張って避ける。頬にナイフが掠るが気にしてはいられない。

「どうした人間？フランの時のように本気で戦わないと死ぬぞ？」

「すいません杉本様。フラン様の婚約者である貴方を攻撃するのは気が引けるのですが、お嬢様の命令です。ですから・・・手加減はできません」

「・・・えエ？婚約もなにもそんな約束は「ホラホラ！本気をだせ人間よ！！」グツ！？」

畜生！婚約者とかなんだよ！フランドールと婚約した覚えなぞないぞ！そしてレミリア。さつきと全然口調が違うぞ？妙にカリスマオーラが漂ってるし・・・まさか、戦闘になるとあんな口調になるのか？幼女が偉そうな口調・・・内心は臆病だがそれを隠すために偉そうな口調をして他者に自分の弱い心を見せないようにする。しかし何時までも気を張ってたら疲れてしまう。だから従者や親しい者の時は普段の口調になる。そしてさつきまで普段の口調だった。つまりだ・・・俺はレミリアに嫌われていないわけだ！！

いやあ、よかったよかった。やはり幼女に嫌われるのは嫌でござるからな！つてうお！？目の前がナイフと紅い蝙蝠の形をした弾幕でいっぱい・・・

「ウオオツオオ！！！」

必死で避ける。肩にナイフが刺さろうが、腕に弾幕が当たろうが致命傷にならない限り避け続ける。いやでも痛いッス！・・・そして避けることには成功したのだ。そんな自分を褒めたい。これは賞状を貰ってもいいくらいの素晴らしさ。だが・・・

「ゼエ・・・ゼエ・・・アアアアア・・・」

流石に身体が悲鳴を上げてきた。主に拒絶反応と疲労のせいだ。

「例え1000年以上生きてるとしても所詮は病を患った人間。体力はそこらのミジンコと同レベルね」

「お嬢様、そろそろ終わらせないと霊夢達の援護に行けません」

「あら、もうそんな時間なのね。もう少し嬲り殺してあげたかったのに・・・まあ仕方ないわ。じゃあ・・・さようなら！」

レミリアが槍のようなもの投げつけてきた。アレは・・・グングニル！？スペカで発動するんじゃないのか！？ガチで俺を殺す気か・・・。幼女に殺されるのも本望だが、俺はまだこの世界全ての幼女に会っていない。だから・・・

「切り札ツてのを・・・使わせてもらおうじゃねエか！！」

四本の短剣が俺の手元に現れる。グングニルを防ぐには生半可な防御をした瞬間死が決定する。避けようと思っても掠ったりモロに当たったりして当然駄目。ならこの短剣でどうするか？その答えは・・・霊菜と霊花の形見の短剣四つで結界を張る！フッ・・・俺は引き籠もらせてもらっぜ？

「油断せず引きこもろう、『博麗守護結界』！！」

自分を中心に50cmくらい離れた四方に短剣を投げ、畳に刺さる。その瞬間俺を守るかのように周りに結界が張られた。この結界、博麗守護結界は短剣に込められている霊力、それと霊菜の能力『守護する程度の能力』と霊花の『保つ程度の能力』、そして俺が合図して初めて発動できる結界。ハッキリ言って滅茶苦茶硬い。その証拠にグングニルが結界にぶつかってもビクともしない。だがギュギギギギギギギギギギギギギギギッギイ！！という衝突音が喧しい。レミリアの方を見ると驚愕という言葉が当てはまるような顔をしていた。まあ自慢の技を簡単に止められたんだからその気持ちは分かるぞ！

「な、なによその結界・・・！」

「凄まじい霊力を感じます・・・！」

「これが俺の自慢の結界、『博麗守護結界』だ。因みにこの結界を破ったことがあるのは八雲のみだ。それ以外のヤツは破れなかったぞ。まああのフラワーマスターにはヒビ入れられたがな」

『なっ！？』

本当八雲はチートだ。この結界を張っても境界を弄って解除するかどんなんだよ。風見も風見だ。アイツ唯の殴りでヒビ入れたんだぞ？ありえねーよ！！まあ結局は破れなかったんだがな。でも風見は本気出してなかったし、いざとなれば軽く破ってきそうだな・・・クツ、バグキャラが多いな幻想郷は！

「さて、まだ時間はタップリあるんだ、夜のデートと洒落込もうじゃないか！！」

「・・・気持ち悪」

「・・・それは流石に」

・
・
・さあ異変が終わるまで持ちこたえるぞ！！

第十七話（後書き）

遅くなってすいませんでした！

遅れた理由は会社が忙しくなり、休日出勤や残業をホボ毎日していたからです。

次はいつ投稿するか分かりませんが、早めに投稿できるよう頑張ります。

第十八話（前書き）

遅くなって申し訳ありません！

第十八話

本物の満月が輝いている。それは偽者では到底放つことの出来ない光で神々しく輝いている。そしてその下で戦っている者たち。

輝代vs魔理沙・アリス&幽々子・妖夢、永琳vs霊夢・紫。若干輝代の方に戦力が集中しているが気にしないでいただきたい。

様々な形の弾幕が相手を襲い、弾幕が弾幕を打ち消しあう。そこには美しい情景が出来上がっていた。その中で八雲紫は考える。

（恐らく公平は『博麗守護結界』を使つたわ。あの懐かしい霊力が証拠ね。これでレミリア達が追いかけてくることはまずない。流石に幽々子の方は圧しているけど、私達の方は圧されている……。月の賢者がここまで強いとは計算外ですわね）

紫は永琳が思っていた以上に強かったので苦戦しているようだ。しかしそこは主人公組み。霊夢の胡散臭い拳動と紫のスキマのお陰で持ちこたえている。だがこのままではジリ貧。霊夢達はスペカも残りわずか。永琳はまだあると考えててもよさそうだ。流石にこれは年季の違いなのか、はたまた永琳の知能が紫を遥かに上回っているのかは分からない。だがハッキリと分かっているのは一つ。このままだと霊夢達が負けてしまうということだ。

（チツ、思っていた以上に強いわね。無駄なく且つ正確に弾幕を撃ってくるからやりにくいし……。魔理沙の方は圧しているから早く終わらせてこっちを手伝ってもらいたいわね）

霊夢はグレイズしながらどうにか反撃しようと試みるが、反撃する瞬間に矢が放たれるからそれを避けるために集中してしまいあまり弾幕が撃てない状況にされている。

二対一でもこの状況だ。果たして勝てるかどうかも怪しいところ。その時だった。

「恋符『マスタースパーク』!!」

「!？」

魔理沙がマスタースパークを放ったのだ。そしてマスタースパークはヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!という音を放ちながら永琳を飲み込んだのだ。

「弹幕はパワーだぜ！」

「随分遅かったじゃない魔理沙」

「いや私も早く終わらせたかったが・・・案外あの姫も強かったんだぜ」

「へえ・・・」

「不意打ちとはやってくれるわね」

「マスタースパークをくらっても無傷だと？あの姫同様、コイツも不老不死なのか・・・？」

（四対一でも魔理沙達が苦戦したあの姫もかなりの実力者だったってわけね。不老不死らしいから耐久力が凄かっただけかもしれないけど。だけど、目の前に居る従者・・・八意永琳だっけ？の方が強いのは確かね。はあ、面倒だわ）

考え事しながらも余裕で避ける霊夢。逆に余裕が無くなってきた永琳。それはそうだろう。主人公組に加えてアリス、八雲、幽々子、妖夢が居るのだ。唯でさえ幻想郷を担う二人を相手していただけでも苦しいのに、援軍が増えるとはもう完全に詰んでいる。輝代もよく四対一で結構耐えれたと私は思う。これが主人公だったら即効やられていたことだろう。

（まったく、運がないわね。この術さえ完成すれば夜なんて自動的に明けるのに。それに今は彼がいる。彼が巻き込まれていたら大変だわ・・・）

そう永琳が考えた瞬間、屋敷から魔力が溢れ出したのだ。

「!?」

「この魔力は・・・マズイ!?」

永琳は弾幕ごっこを放棄して屋敷の中に入っていった。そしてその異変に気づいた八雲は

「まずいわね・・・」

「紫、この魔力はどういうこと?」

「この魔力誰かのに似てるんだよな・・・えーっと・・・ああ、パチュリーの魔力に似てるんだぜ」

「パチュリーが誰だか知りませんが、この魔力は尋常じゃないですよ」

「んー、この魔力ってさっきの青年の中にあつた魔力じゃない?」

「流石幽々子ね。そう、この魔力は恐らく公平の中にあつたパチュリーの魔力よ」

「ちよつと紫!公平って魔力や霊力が全く受け付けないんじゃないかな?」

「それにパチュリーの魔力が中にあるってどういうことだ?」

「それはね・・・」

八雲説明中・・・

「なるほど、あの時の魔力か・・・」

「でも私は全然感じなかったわよ？」

「それは私には分からないわ。霊夢の実力不足なのかはたまた彼が何かしていたのか・・・」

「あのく、話を聞いてみるとこうしてる間もその杉本さんが危ないのでは・・・？」

「そうよねく、さっきまでの魔力が段々と減ってきているってことは衰弱してる可能性が高いわねく」

幽々子と妖夢の言葉にハツとなった霊夢達は急いで主人公の元に向かうのであった。

ふむう、なんとも諦めの悪い人（吸血鬼もいるが）達なんでしょうか。こう弾幕をいくら出そうがスベカを出そうがこの鉄壁の結界は壊れないのだよ！霊菜、霊花曰く『愛の力です』らしいが・・・まあ、霊菜は分かる。いつも愛がどうのこうの言って俺に体当たりしてきたからな。だが霊花よ、君の言葉は今も分からないんだが？まあ確かにいつも甘えていたが、そこには愛などないだろ。んん？そういうや霊花の旦那って誰だ・・・？いつの間にか妊娠してて相手の事を聞くと逃げたとか言ってたけど・・・。ああ、今思い出すだけで腹が立ってくるな。俺がその相手を見つけてぶっ殺したいが、そいつは人間だろう（孫が人間だから必然的に相手も人間）。もう生きてはいないだろう。

「ハア・・・ハア・・・もう！何で壊れないのよ！！」

「くっ、スペカですらビクともしないなんて・・・」

「ふっ、引き籠りは伊達じゃないのだよ」

「神術『吸血鬼幻想』!」

「メイド秘技『殺人ドール』!」

フハハハハ! 無駄無駄無駄ア!!

「その程度のスペカではこの結界は壊せゴフッ!」?

な、何だ!?! 急に血が口から大量に!?

それと同時に結界もパリンと砕けた。

「ガハッ!」?

更に口から血が出てくる。何が起きて・・・!?

「グッ・・・アアアアアッアッア・・・!」?

痛い痛い痛いイタイイタイイタイ・・・!?! 全身に強烈な痛さが奔る。こ、これはマジでヤバんじゃないか!?

「ちょっと、どうしたのよ!」?

「杉本様!」?

「痛い・・・アアアアア・・・」

クソガアアアアアッ! ガハッア!?! こ、このままだとマジで死んでしまう。一体全体何がどうなってやがる!?

その時だった。身体から凄い量の魔力が出てきたのは。

「これは・・・!」?

「魔力・・・ですか。しかもパチュリー様の!？」

「ゼハア・・・ゼハア・・・アウアツ!？」

何だこれ!?!? 体が張り裂けそうだ!! 血は出なくなったがgggg・

「貴方達、彼から離れなさい」

痛みに悶えていると聞いたことのある声が部屋に響いた。

「誰？」

「私は八意永琳。この永遠亭にいる姫の従者であり、この異変を起こした張本人でもあるわ」

『ッ!?!』

「そう身構えないでくれるかしら。私は彼を治療するために戻ってきたのよ」

永琳が俺の隣に来る。が目があまり見えないのでぼやけて写っている。そして今は不思議と痛みを感じない。アレかな。アドレナリン放出しすぎて痛みを限界突破し無我の境地へとたどり着いたのかな？

「思っていたのより酷いわ・・・魔力が増え続けているわね」

何？魔力が増え続けているだ?!? 馬鹿な、いったい何が・・・。

「さっきの霊力の源は・・・この短剣ね。これに感応して増えたとしてもいうのかしら」

「そんな診察はどうでもいいわ。コイツは助かるの？」

「何事も診察が大事よ。で、彼が助かるかどうかだったわね。このままだと死ぬわ。でも安心しなさい。この私がいるからには必ず助

けてあげるわ。それに姫の恩人ですもの」

おおおお！何と頼もしい言葉だ！！例えるなら黒い医者腕並に頼もしく感じる。それに恩も売つといて良かった。じゃないとここで死んでいたことだろうしな。

「じゃあ先ずは麻酔を・・・」

ブスッ！という効果音と共に俺に眠気が襲ってきた。耐えられるはずも無く俺は意識を手放してしまうのであった。

――――

普通の青年だった俺。大学も三年間通い続けてきた。友達も普通にいたし、普通な成績に普通なレポート。彼女は生まれてこの方いなかったが、普通に暮らしてきたと思う。だがそんなある日、昔、隣に住んでいた家族がまた戻ってきたのである。ここから悪夢が始まった。引越してきた家族の中に幼馴染がいたのだ。「久しぶり！」と言ってきたのは10人中10人が振り返るであろう美女だった。だが顔なんて覚えてはいるはずも無く、久しぶりと言われても全然分からなかった。

大学の講義が終わり、帰る準備をし、校門を出るとそこには幼馴染がいた。何をしているのか？と問えば帰りを待っていたと返答してくる。友達は「リア充死ね！」と叫びどっかいつてしまう。いやいや、付き合ってもないし、ましてや待つといってくれなんて頼みをした覚えがない。

それからというものの、講義が終われば校門で待つており、バイトは

食事処で働いているのだが、店の中で俺が終わるのをずっと待っており、夜は俺の家族と一緒に食事をするようになっていった。家族達もそれが普通になってきていた。ここまで言えばリア充だろう。だがしかし、彼女は普通ではなかった。

俺が女友達と話しながら校門まで行くと刀を構えだしたのだ。どこから出したのか問いたくなる衝動に駆られたが、俺は友達を逃がし、幼馴染を宥めたりした。

またバイトではシフトの女性と話してるとどこからともなく現れて、「公平に色目を使うな！」と叫び刀を振り回す始末。拳句の果てには、母と妹にまで刀を振り回そうとする。何でも同じ血が流れているのでその血を大量に飲み、血の繋がりを作りたかったとか……。前々からコイツヤンデレじゃね？って思ってたんだが、この発言で完璧にヤンデレだと分かったね。いや、ヤンデレよりもヤバイ領域に入っているかもしれんが……。

母も妹もすっかり幼馴染に脅えてしまっていた。俺も脅えていたが、拒むわけにもいかなかった。なぜなら、一回拒んだことがあるんだ。そしたら小型のナイフでふともも辺りを刺してきたのだ。その時の幼馴染の目は光彩が消えており、ぶつぶつと何かを言いながら今度は包丁を手に握っていた、ガチでどこから取り出したんだ！？というツツコミをしたかったがそれ所ではない。俺は必死に付き合ってくれだの愛してるなどいった。すると幼馴染は笑顔になり抱きついてきた。そして首筋に何かを刺され、意識がなくなった。

そして事件が起こったのはそれから一週間後の事だった。あんな展開になるなんて、二次元のみだと思っていた。そう、アレは……

・・・随分と懐かしい夢だ。何故今このような夢を見るのか分らないが・・・嫌な事件だったね。スペックは一般人なのに、あの時は一般人とはかけ離れた体験をしている。くっ、これも時代の波つていうやつか（違います）。

「本・・・大・・・？一・・・眼を覚・・・ない・・・と・・・じや・・・？」

「・・・え、早・・・起き・・・よ！」

「ま・・・式・・・つて・・・のに」

「・・・な・・・よ！」

声が聞こえる。この部屋には結構な人数がいるようだ。ガヤガヤして眠れないっいたらありやしねえ。だけどもう少し寝かせてくれ。まだ眠たいんだよ・・・

「こ・・・話・・・参考・・・よう・・・」

「フ・・・考・・・が・・・？」

「それ・・・童・・・だ？」

「・・・雪・・・よ！」

「白・・・？」

「そ・・・白雪・・・これ・・・と・・・姫は・・・子様の・・・ス・・・目覚・・・の・・・状・・・で・・・える・・・王・・・平が・・・姫よ！」

おや？何か嫌な予感がしてきたぞ？あまり聞き取れないから放って置こうと思ったが・・・。

「だからキスすれば公平が目覚めるの！だから遠慮なくいかせて貰うわね」

ガバアと俺は布団を声のする方に飛ばし、部屋の隅まで逃げる。そ

の動きはまるでゴキブリであるかのようだ。

「あら起きちゃった。残念」

「コラテメエフラン！何意味不明なこと言っただけにキスしようとしてるんだよ！！それに他の人たちも止めてくれよ・・・」

皆笑っている。いや、笑うところじゃないから！

俺が嘆いていると八意さんが近づいてきた。

「気分はどう？」

「別に・・・なんともないですね。ん？身体の痛みが無くなっていますね」

「それは魔力を私がどうにかしたからですわ。と言っても完全に無くすることは不可能でしたので封印しておきましたわ」

八雲が意味不明なことを仰っているんですが？

「意味が分からないって顔をしていますわね。要するに、『博麗結界』に感応して公平の中にある魔力が活性化。次第に増えていったわけですね。そこでその医者の方で魔力を減らし、私の能力で完全に消そうとしましたの。ですが公平の脳が今回の事でその魔力を『自分の身体の一部』と思い込んでしまった。そのせいで完全に消すと危ないので封印という形を取ったわけ。でもこの封印は貴方が本気を出すと流石に耐えられないわ。だから、長生きしたければ本気を出さないことね」

「・・・なるほどね。あア分かった」

つまりリミッター解除しなければいいってことだな。でもいつか解除しそうで恐いんだよね・・・まあその時はそのときだな。

さて・・・これで永夜異変は無事に終わったわけか。オマケに俺の

身体も完璧ではないが治ったわけだしな。さて、次はどんな異変が起きるのかねえ・・・。

後日、人里では元気に働く一人の青年の姿が戻ってきたのであった

第十八話（後書き）

ヤバイ、リアルが本当に忙しい。お盆でも結構出勤してた。くっ、誰かこの私に時間を・・・。

主人公が見た夢は主人公の中でのトラウマでもあり、ロリコンになるきっかけでもあります。

第十九話

どうも、杉本公平だ。永夜異変からは何事もなく、平和な日常が続いている。平和はいいね。だつてほら、怪我とか重傷を負つて死ぬ可能性とかないんだよ。いやー、ここ最近死にかけてることが多いからもう感動ものだ。で、今日もせっせと働いているのだ。身体の痛みが無くなつてからは一所懸命働いているのだよ。親父さんにも迷惑かけたしな。

「おい、また例の場所から酒の注文が入ったぞ！」

「えー、またっすか!？」

「これで6回目ですよ!？」

・・・また注文が入ったのか。ん？例の場所だつて？例の場所とは博霊神社の事だ。ここ最近ずっと宴会をしているのか二日に一回は確実に酒の注文が入る。それを博霊神社まで届けなければならない。配達には忙しいので従業員にやらせている。妖怪とか大丈夫なのか？とか長い階段を大量の酒を運びながら登れるのか？とかあるが大丈夫だ。何故なら親父さんが木の葉で出来た式を用意してくれるからだ。護衛は勿論、酒を軽々と運んでくれる。式だけで十分だと思つが、親父さんが「お前らだけ楽しさせてやるか！」と怒鳴つたため従業員も付いていく事になっている。

「で、今度は誰が行く？」

「俺前回行ったから行かなくていいよね？」

「・・・そうだな、ならお前は行かなくていい」

「よしっ！」

何故配達を嫌がるのか。それは宴会に参加しているメンバーがとん

でもなくヤバイからだ。今まで起きた異変のメンバーは殆ど参加している。そのせいで配達に行った従業員が青い顔で涙を流しながら「もういぎだぐないです・・・」と今まで配達してきた全員が言ってきたのである。だがこれは仕事なのでそんな泣き言など言っられないし、聞いてもらえない。まあ俺には関係ない事だからさっさと仕事終わらせてノンビリするかな。

「そうだ！公平さんが行けばいいんだ！」

「おお、それだ！」

「なんていい事を思いつくんだお前は！よくやった！」

「はッ？」

ちよっ！？何人に配達押し付けてんだよ！しかも何か俺が行くことになってるし！

「オイオイオイ！誰も行くなんて言ッてねエぞ！」

「ええ？だって配達に行つてないの公平さんだけですよ？」

「そうだぞ。しかもあの妖怪達に免疫あるのは公の旦那だけだしな」

「いや、俺忙しいからどツちにしろ無理だ！」

「大丈夫です！公平さんの仕事はもう終わらせました！」

「何ッ！？」

隣を見ると俺がやろうとしていた仕事もう終わっていた。馬鹿な！？眼を離れたあんな一瞬で俺の仕事を終わらせただ！？・・・こんな時だけ無駄に才能を発揮させやがって。そんなに行きたくないのか。

「はア、分かッた分かッた。今回だけだぞ？」

「っし！流石公平さんだ」

「恩に着ます！」

まったく、調子いいなおい。まあ引き受けたからにはやることはやるさ。早速配達のお酒が置いてある場所に向かう。そこにはリヤカーにいっぱい積まれたお酒が……。いやいやいや大量すぎるだろ！？どんだけ飲む気なんだよ！最近の注文よりも三倍近いぞ！？くつ、よりによって俺のときだけこんなに大量に注文しなくてもいいじゃないか……。

俺はブツブツ言いながらリヤカーに近づく。するとそこには小さい『親父さん』の顔をした狸たちがいた。と言っても式なのだが。うむ、いつ見ても気持ち悪い。

「早速行きますかねエ」

俺がそういうと式たちはせつせとリヤカーを運び出したのである。

青年移動中……

ふう、やっと着いた。道中は何事もなく進み、階段でも息切れするくらいしか起きていない。今日は運がいいかも知れんな。さっさと配達終わらせて帰るかな。時間ももう遅いし。

「ちわゝ玄屋です。お酒を持ってきました」

某国民的アニメに出てくる従業員の真似して玄関で大声を出す。奥から足音が聞こえてくる。案の定出てきたのは霊夢だった。

「あつ、公平じゃない。丁度良いところに来たわね」

「丁度良い……？」

「ええ。実はもう宴会は開かれているのよ」

「なるほど。で、酒が切れたと。そこで丁度良く俺が酒を配達しにきたと」

「違う」

「違う？」

「ええ。実はまだ半分程度しか集まってないのよ。で、集まった中に幽々子がいるのよ・・・」

「あーなるほど。つまり酒のつまみが見る見るうちに消えていくというわけか・・・」

流石大食い。一騎当千の働きをしているようだ。最悪な意味で。

「妖夢や咲夜も手伝ってくれているんだけど・・・間に合わなくて・・・分かった。じゃあ善は急げだな。霊夢はこの酒を運んでくれ。俺は台所に向かう」

「ありがとう、助かったわ!」

霊夢は満面の笑みで酒を運んでいった。さて俺も行きますかな。

青年移動中・・・

台所に着いたわけだが・・・。

「美鈴!こっちは出来上がったから持って行きなさい!」

「はい!」

「鈴仙さん、こっちもお願いします!」

「分かりました!」

「さ、咲夜さん!また空になった皿が大量に・・・」

「こつちもです・・・」

中々の忙しさだ。まあ結構な人数＋大食いがいるのに料理しているのは二人と運ぶの二人じゃ完全に回るはずない。おっと、俺も傍観している暇はないな。

「助ッ人登場！」

「す、杉本様！？」

「公平さんが何故ここに？」

「ん？ああそれはな」

ここに來た経緯を簡潔に話す。

「なるほど。しかし杉本様に料理が出来るのでしょうか？」

「こんなヤツにできる筈がないわ」

「・・・百聞は一見に如かず。まあ見てな」

俺は愛用の包丁を鞘から取り出し、早速調理にかかる。同時進行で様々なつまみを作るため無駄なく素早く作っていく。いやあ、バイトと長いこと生きていたから調理スキルもアップしているわけなんだよ。今じゃ料理は趣味になっているくらいだからな。

「ほら、アンタ達もボサツとしないで仕事して！」

俺がそういうと皆各々の仕事をやりだした。そして誰も文句を言わなかったところまあ合格ってところなのだから。さて、フルスピードでやるぞ！！

青年調理中・・・

アレからつまみを作り続けた。休む暇もなく作り続けた。そして漸く幽々子が満足したのか調理地獄から開放されたのだ。何故地獄かつて？そりや作つても作つても沢山作つても五分後にはほとんどが空になつて歸つてくるのだ。生産が追いつかねえよ！だが俺達はやり遂げた。やり遂げたんだ！このなんともいえない達成感を胸に宴会場へと向かった。

「あの、すみません」

「もしかしてチルノさんでしょうか？」

俺が大声出したせいでチルノ（仮）は勿論リグル達や他の宴会メンバーも驚いている。が今はそんなことどうでも良い！

ゼエントしてあげよう。なに、遠慮することはない。さあ・・・さあさあさあさあああー!!」

「え?え?え?だ、大ちゃん助けて!」

「た、助けてあげたいけど・・・この人怖いよう・・・」

「アタイも怖い・・・」

「怖いのかいチルノちゃん。確かにいきなり小さくなれといわれたら恐ろしいだろう。ならばこの私が抱きしめてあげよう。ソレならば安心だろう?さあ遠慮せず私の胸に飛び込んで「酔夢」施餓鬼縛りの術」「んん?」

俺の身体にぐるぐると鎖が巻かれた。この技は・・・

「伊吹萃香・・・!」

「おー、久しぶりだな人間。酒の席だからハメを外すのもいいけどソレは流石にハメを外しすぎなんじゃないかな?」

「フツ、俺はチルノちゃんを幼女への道という名の進化を手伝っているに過ぎん。そしてその愛があればこの程度の鎖引き千切って・・・フヌヌヌツ!・・・又オオオオオツ!!・・・か、硬え」

「当たり前だ!この自慢の鎖を千切れるヤツは早々いないさ!」

クソツ!神はこの俺をどうしたいのだろうか・・・俺みたいな紳士にとって生きにくい世界にして・・・。ロリが・・・ロリが圧倒的に少ない・・・。

「ハア・・・、分かった。もう俺はチルノちゃんを幼女にしようとは思わないさ」

「その言葉嘘じゃないね?」

「ああ」

俺が肯定すると鎖が解かれた。そして俺はチルノのほうを向き

「ごめんなさい！」

「え？」

土下座した。まああんなに暴走しちゃったし、ちょっと泣きそうだったし、流石にこれは土下座レベルだろう。でもこんなので許してくれるとは思わないが……。

「ま、まあ最初は驚いたけどアタイにかかればあの程度楽勝よ！」

「……ということは許してくれるのか？」

「アタイもそこまで鬼じゃないし、許してあげるわ！」

何故だか知らんが許してくれた。優しいのかそれともただ単に馬鹿なのか……。まあどっちでもいいか。

「許してくれた御礼にこれをあげるよ」

鞆から玄屋秘蔵のお酒を取り出す。子どもですら病みつきになってしまう程の銘酒だ。何故持つてるって？それはアレだ。いざ襲われた時の危険回避の為の賄賂ってやつ？

「あー！？それは玄屋秘蔵のお酒！！」

萃香が酒を奪おうとしてきた。が甘い！

「ほいチルノちゃん。皆と仲良く飲むんだぜ？」

「りょーかい！」

「酒を渡せー！ー！」

チルノに酒を渡すと俺は別の酒を取り出し萃香を誘導させる。これでこの会場には被害がでなくてすむぜ。俺に対しては被害が出るがな！……ってちよつとちよつと……弾幕はせこいってアー……ッ！！

その後縁側で気絶している青年を肴に、皆宴会を楽しんだとか……。

第十九話（後書き）

遅くなりすいませんでした！相変わらず残業パラダイスですね。休みがずっと一週間に一回の単休というのも響いていますけどね。

誤字を直しました。博霊↓博麗に直つてると思います。いやあ、主人公の苗字を間違えてたなんてお恥ずかしいです……。指摘してくれた方どうもありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648s/>

東方一般人

2011年8月28日00時08分発行